

国道一号掛川バイパス建設用地内
埋蔵文化財調査報告書

掛川市教育委員会

例 言

1. 本書は国道一号掛川バイパス用地内に所在する埋蔵文化財の調査報告である。
2. 遺跡所在地 表1, 表2, 表3のとおりである。
3. 調査期間 第1次 昭和50年1月14日～昭和50年3月30日
第2次 昭和50年7月30日～昭和51年3月31日
第3次 昭和51年6月15日～昭和52年3月31日
4. 調査計画機関 建設省中部地方建設局浜松工事事務所
5. 調査指導機関 静岡県教育委員会
6. 調査主体者 掛川市教育委員会
7. 調査担当者 久永 春男
8. 調査員 岩井 克允, 内藤 次郎
9. 調査参加者 補助員
野口 英生, 大場 満明, 高村 晴久, 三浦 元嘉, 杉山 好宏,
榛葉 樹由, 中村 隆行, 松本 行弘, 般木 健, 岩井 和志,
岩井 正治, 染葉 剛志
市職員(第1次のみ参加)
杉山 武司, 中山 幸男, 高井 康文, 戸塚 光男, 渥美 善一,
山本 進, 榛葉 仁, 八木 修, 田辺 守, 杉本 弘文,
安達 啓, 清水 功, 鈴木 五男, 中山 礼行
県外(愛知県)
木下 克己, 野口 剛, 伊藤 恵, 芳賀 陽, 住吉 政吉,
森田 勝三, 小畑 頼考, 古田 敏晴, 中西 克宏, 石川 明宏,
七原 恵史, 仙田 作吉, 辻 秀樹, 木村 哲雄, 雨宮万里子,
岩崎 直也, 浅井 富尺, 佐藤 昭則, 斉藤 嘉彦, 中川 聖子,
鶴田彦四郎, 鶴田 嘉清, 清水 正明, 矢田 春美, 伊藤 利和,
大橋 勤, 杉浦 知, 牧野 彦一
10. 執筆 執筆にあたっては文型を統一し, 岩井克允, 内藤次郎, 野口英生, 中村隆行, 岩井和志, 岩井正治が執筆し, 文末に記名した。文責は岩井にある。
11. 実測図整理・浄書 岩井克允, 野口英生, 中村隆行, 杉本行弘, 岩井和志, 岩井正治が補佐した。
12. 写真 岩井克允, 内藤次郎が撮影したものを用了。
13. 編集 岩井 克允

序

掛川市内には原始・古代から人々が生活を営まれており、市内の随所にそれらの先人の貴重な文化財が数多く残されております。

これらの文化財については積極的な保護、保存、さらには活用を図り、文化的な環境の保全につとめておりますが、最近の経済状況の変化により文化財、なかでも埋蔵文化財に対して影響ができております。

このようななかで、掛川市は掛川バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査を実施することになりました。関係諸機関と慎重な協議を重ねるとともに、建設省中部地方建設局の埋蔵文化財に対する積極的な深い御理解と御協力によって昭和50年1月から昭和52年3月までの3ケ年に亘る長期の発掘調査が実施できました。

発掘調査した結果、絹張塚遺跡をはじめ16の遺跡から250基以上の遺構が土木工事にも似た発掘調査という成果から明かとなった。古代の生活を知り、今後の文化行政に生かすべき意義は大なるものがあります。

調査の終了にあたって、格別な御配慮もいただいた建設省中部地方建設局、静岡県教育委員会、地元関係者、調査参加者に対し厚く御礼申しあげるとともに、本書の刊行が学術資料として活用され、御批評、御指導いただければ誠に幸甚であります。

昭和52年3月

掛川市教育委員会

教育長 佐藤 正 夫

本文目次

第1章	経 過	1
1.	分 布 調 査	1
2.	調査に至る経過	1
3.	調 査 経 過	2
第2章	絹張塚遺跡	5
1.	位 置 と 環 境	5
2.	遺 構	5
3.	ま と め	6
第3章	不動ヶ谷古墳群	9
1.	位 置 と 環 境	9
2.	第 2 地 点	9
3.	第 3 地 点	10
4.	第 4 地 点	10
5.	第 5 地 点	10
6.	第 5 - 2 地 点	11
7.	不動ヶ谷古墳1号	11
(1)	位 置 と 環 境	11
(2)	墳 丘	11
(3)	埋 葬 施 設	11
(4)	ま と め	12
第4章	西谷田古墳群	13
1.	西谷田古墳1号	13
(1)	位 置 と 環 境	13
(2)	墳 丘	13
(3)	埋 葬 施 設	13
(4)	ま と め	14
2.	西谷田古墳2号	14
(1)	位 置 と 環 境	14
(2)	墳 丘	14
(3)	埋 葬 施 設	14
(4)	遺 物	14
(5)	ま と め	14

第5章	次郎丸遺跡	15
	1. 位置と環境	15
	2. 遺構	15
	3. まとめ	17
第6章	戸塚遺跡	19
	1. 位置と環境	19
	2. 遺構	19
	3. まとめ	19
第7章	内籠遺跡	21
	1. 位置と環境	21
	2. 遺構	21
	3. まとめ	22
第8章	大多郎遺跡	25
	1. 位置と環境	25
	2. 遺構	25
	3. まとめ	26
第9章	大平山古墳群	29
	1. 第11地点	29
	(1) 位置と環境	29
	(2) 調査	29
	2. 第11-2地点	29
	(1) 位置と環境	29
	(2) 調査	29
	3. 大平山古墳1号	30
	(1) 位置と環境	30
	(2) 墳丘	30
	(3) 埋葬施設	30
	(4) 遺物	30
	(5) まとめ	30
第10章	山郷山遺跡	33
	1. 位置と環境	33
	2. 遺構	33
	(1) 弥生時代の遺構	33
	(2) 古墳時代の遺構	34
	(3) 中世以後の遺構	35
	(4) 山郷山経塚1号	48

	(5) 山郷山経塚2号	48
	(6) ま と め	48
第11章	元屋敷遺跡	53
	1. 位置と環境	53
	2. 遺 構	53
	(1) 岩井戸1号	53
	(2) 岩井戸2号	53
	3. ま と め	54
第12章	峯山遺跡	55
	I 位置と環境	55
	II 遺 構	55
	1. 弥生時代の遺構	55
	(1) 豎 穴	55
	(2) 豎穴付属小屋	61
	(3) 屋 外 竈	61
	(4) 小 穴	62
	(5) 土 壙 墓	62
	2. 古墳時代の遺構	62
	(1) 豎 穴	62
	(2) 豎穴付属小屋	73
	(3) 竈	74
	(4) 窯	75
	(5) 小 穴	75
	(6) 土 壙 墓	76
	(7) 溝 状 遺 構	77
	3. 奈良時代の遺構	78
	(1) 祭 礼 遺 構	78
	4. 鎌倉時代の遺構	78
	(1) 岩 井 戸	78
	(2) 土 壙 墓	79
第13章	峯山古墳群	81
	I 峯山古墳1号	81
	(1) 位置と墳丘	81
	(2) 埋 葬 施 設	81
	(3) 遺 物	81
	(4) ま と め	81

II	峯山古墳 2 号	81
	(1) 位置と環境	81
	(2) 墳 丘	82
	(3) 埋葬施設	82
	(4) 遺 物	82
	(5) ま と め	82
III	峯山古墳 3 号	82
	(1) 位置と墳丘	82
	(2) 埋葬施設	82
	(3) 遺 物	83
	(4) 附属土壌	83
	(5) ま と め	83
IV	ま と め	83
	1. 立地について	83
	2. 分布について	83
	(1) 弥生時代の遺構	83
	(2) 古墳時代の遺構	84
	(3) 奈良時代の遺構	84
	(4) 鎌倉時代の遺構	84
	3. 遺構について	84
	(1) 弥生時代の遺構	84
	(2) 古墳時代の遺構	86
	(3) 奈良時代の遺構	90
	(4) 鎌倉時代の遺構	90
	(5) 峯山古墳群	91
	(6) 総 括	91
第14章	山郷横穴群	93
	I 山郷横穴 1 号	93
	(1) 位 置	93
	(2) 構 造	93
	(3) ま と め	93
第15章	谷通横穴群	95
	I 谷通横穴 1 号	95
	(1) 位置と環境	95
	(2) 構 造	95
	(3) 遺 物	95

(4) ま と め	95
第16章 御堂ヶ谷横穴群	97
1. 位置と環境	97
2. 御堂ヶ谷横穴群A群1号	97
(1) 位置と環境	97
(2) 構造	97
(3) 遺物	98
(4) ま と め	98
3. 御堂ヶ谷横穴群A群2号	98
(1) 位置	98
(2) 構造	98
(3) 遺物	98
(4) ま と め	99

表 目 次

表 1	第 1 次調査遺跡地名表	2
表 2	第 2 次調査遺跡地名表	2
表 3	第 3 次調査遺跡地名表	3
表 4	絹張塚遺跡遺構一覽表	6
表 5	内籠遺跡遺構一覽表	23
表 6	大多郎遺跡遺構一覽表	27
表 7	山郷山遺跡遺構一覽表	49
表 8	峯山遺跡弥生時代竪穴一覽表	85
表 9	峯山遺跡弥生時代屋外竈一覽表	86
表 10	峯山遺跡弥生時代土壙墓一覽表	86
表 11	峯山遺跡古墳時代竪穴一覽表	86
表 12	峯山遺跡古墳時代付属小屋一覽表	88
表 13	峯山遺跡古墳時代小穴一覽表	89
表 14	峯山遺跡古墳時代土壙墓一覽表	89
表 15	峯山遺跡古墳時代溝状遺構一覽表	90
表 16	峯山遺跡鎌倉時代岩井戸一覽表	91
表 17	峯山遺跡鎌倉時代土壙墓一覽表	91

第1章 経 過

1. 分 布 調 査

昭和46年建設省は掛川市を東西に貫通する国道一号の慢性渋滞を緩和するため、バイパスを建設することを決定した。延長9.96kmの路線には埋蔵文化財が多数所在していると推定されることから掛川市は昭和48年静岡県教育委員会に対して、その所在確認の調査をするため調査員の派遣を要請した。そこで、静岡県教育委員会は昭和48年7月8日静岡県文化財調査員寺田義昭氏を派遣し、路線内の遺跡分布調査を行なった。

その分布調査報告書によると、「古墳時代の高塚古墳12基、同横穴墳1基、近世墳墓2基であり、古墳は稜線の頂部もしくは高まったところであり、山のコブ状になっている地点であるが、自然地形であるかもしれない。けれども当地方の本村古墳や城北小学校建設用地内の遺跡に似ているので高塚の古墳とした。しかし、夏季の短期間の踏査で確実に埋蔵文化財という証拠はなく、周辺の遺跡との関連性を無視し、縄文遺跡、弥生遺跡は不明」ということであった。

このように第1回目の踏査では、所在確認が明確とならなかったため静岡県教育委員会社会教育課は昭和48年9月18日、舟木義勝氏を派遣して、第2次の踏査を行なった結果、路線内に埋蔵されているとみられる遺跡は円墳16基、横穴墳6基、近世墳墓1基合計23基の所在が確認された。これらは、いずれも静岡県埋蔵文化財包蔵地地名表には登録されておらず、今回の踏査によってはじめて発見され、その所在が明らかになったものである。

2. 調査に至る経過

昭和46年に国道一号掛川バイパス建設が決定され、路線内に所在する埋蔵文化財について2度にわたる踏査の結果、23ヶ所が確認された。これをうけて掛川市開発課は建設省中部地方建設局浜松工事事務所、静岡県教育委員会と第1回発掘調査打合せ会を昭和49年3月14日に開催し、①調査期間は2ヶ年とする。②建設省、静岡県、掛川市の三者契約とする。③調査費は建設省で負担する。④発掘調査団は静岡県において編成する。静岡大学教授市原寿文氏、同助教授藤田 等氏を中心に静岡大学生をもってあてるの4点について合意をみた。このなかで④について掛川市は市原氏を訪ね、「静岡県教育委員会社会教育課からも要請がとどいているはずであるが、今回掛川バイパス関係の埋蔵文化財発掘調査担当者を引受けていただきたい」旨の要請をしたところ、市原氏は「静岡大学の部制の模様替えと海外に出張する」との理由で発掘担当者を辞退した旨県に回答したとのことであった。

このような状況のなかで、第2回発掘調査打合せ会を昭和49年6月19日に開催し、建設省から、昭和49年度に7基を夏期に調査する予算措置をしたとの説明がなされ、静岡県教育委員会

社会教育課からは、第1回発掘調査打合せ会において決定をみた、県による発掘調査団の編成は困難であるので、掛川市において調査委員会を設置されるよう指導があった。

掛川市は再度、静岡県教育委員会に対し発掘担当者の派遣を要請した。これを受けて静岡県教育委員会社会教育課においても、全国各大学に対し調査員の選定を要請したが、これとても「長期にわたる大きな調査の計画に対し、各大学はこれにあたることはできない。」とのことであった。

掛川市はその対策について、みたび、静岡県教育委員会社会教育課に対し指導を仰いだところ、「掛川市においてできる範囲内で選定せよ」との指導がなされた。

建設工事が昭和50年度から開始されることが決定されている一方では発掘担当者が決らず路線内の埋蔵文化財の調査がまったく済されていないことはバイパス建設工事全般に支障をきたすため、掛川市はこれまで高代山古墳群や水垂二つ池古墳群の発掘を担当した日本考古学協会会員久永春男氏に依頼すべく、静岡県教育委員会社会教育課に指導を仰いだところ「久永春男氏において発掘調査することを許可する」との回答がなされた。

そこで掛川市は久永氏に発掘担当を要請したところ、久永氏は「調査班は市職員により結成することを条件に承諾する。又あくまでピンチヒッターである。」との回答を得て、掛川市は発掘担当者を久永春男氏に決定した。

3. 調査経過

調査は頭初23地点を2ケ年で行ない、計画路線の西方から東方に順次発掘調査を実施する予定であったが、建設省側の工事計画により西方からの調査が不可能な状況となりまた元屋敷遺跡と峯山遺跡の調査区域の増大により3ケ年に亘る調査となった。調査遺跡を年次別に示すと、

第1次調査 昭和50年1月14日～昭和51年3月30日

表1 第1次調査遺跡名

	遺跡名	所在地	備考
1	不動ヶ谷古墳群	掛川市下西郷字不動ヶ谷1143 外	第2地点～第5—2地点
2	内籠遺跡	掛川市水垂字内籠510-3 外	
3	大平山古墳群	掛川市藺ヶ谷字大ヶ谷823-2 外	大平山古墳1号
4	山郷横穴群	掛川市宮脇字山郷1302 外	山郷横穴1号
5	峯山遺跡	掛川市藺ヶ谷峯山44 外	

第2次調査 昭和51年7月30日～昭和52年3月31日

表2 第2次調査遺跡名

	遺跡名	所在地	備考
1	不動ヶ谷古墳群	掛川市下西郷字不動ヶ谷1143	不動ヶ谷古墳1号
2	西谷田古墳群	掛川市上西郷字西谷田712-1-1 外	西谷田古墳1号・2号

3	次郎丸遺跡	掛川市上西郷字西谷田754-4 外	
4	峯山遺跡	掛川市菌ヶ谷字峯山47-1 外	
5	谷通古墳	掛川市菌ヶ谷字谷通123	
6	谷通横穴群	掛川市菌ヶ谷字谷通123	

第3次調査 昭和51年6月15日～昭和52年3月31日

表3 第3次調査遺跡名

	遺跡名	所在地	備考
1	絹張塚遺跡	掛川市大池字五ノ坪173	
2	戸塚遺跡	掛川市上西郷字戸塚40-2	
3	大多郎遺跡	掛川市水垂字大多郎590 外	
4	山郷山遺跡	掛川市宮脇字五輪田1014	
5	峯山遺跡	掛川市菌ヶ谷字峯山46 外	
6	元屋敷遺跡	掛川市宮脇字山郷1294-1 外	
7	御堂ヶ谷遺跡	掛川市菌ヶ谷字御堂ヶ谷309 外	御堂ヶ谷横穴1号・2号

である。調査は遺跡とその周辺に繁茂った雑草、雑木の伐採、搬出から開始した。長い年月にわたって放置されていたため作業は困難であった。次に地形測量に入った。等高線単位は50cmを基準として必要に応じて25cm、1mの等高線を採用し、縮尺は調査地点の規模により1/50又は1/100とした。発掘調査はトレンチによる遺構の確認方法をとった。これには墳丘主体部の破壊、裾部の未調査あるいは、竪穴住居跡における周囲の未調査など、多くの反省点を残した。遺物整理については遺構の遺物を一ヶ所に集め、実測図・写真と示し逐一確認した。実測図の整理については整理中に不明確なところは補足調査（例えば大多郎遺跡、山郷山遺跡、峯山遺跡など）を行い正確を期した。遺構写真撮影については担当者を含め調査員2名、外1名が撮影したものであるが、報告書には調査員2名のを当てたが、全遺構を掲載できなかった。本文原稿については担当者が昭和51年11月責任を持ってないとのことで辞退の話があり、その傘下者から提出されたものが若干あり、使用する予定であったが、無用の混乱をさけるため不採とし、調査員のほか例言に記した各氏が行った。（岩井 克允）

第2章 絹張塚遺跡

1. 位置と環境（実測図第2図1，図版1・A）

絹張塚遺跡は掛川駅から北北西へ2.5km行った尾根の南端斜面裾部に位置する。地籍は掛川市大地字五ノ坪173番である。掛川市の北方から多くの開折谷を形成しながら南にのびる山塊の南端に位置し、標高20mほどである。水田との比高は50cm～200cmである。次に周辺の遺跡についてみると、北側には絹張塚古墳1号が墳裾を削られ墳頂部をわずかに残している。東側の源ヶ池周辺には古墳、さらに東方には三十八ノ坪古墳群、三十八ノ坪横穴群、不動ヶ谷古墳群、不動ヶ谷横穴群が所在する。南側には逆川によってできた沖積平野が開けている。西側の原野谷川左岸の細谷地区には二反田古墳群、八幡神社古墳が、細谷地区には枕田古墳が所在する。

2. 遺 構

S B 1（実測図第4図3，図版1・A）

S B 1は絹張塚の頂部から東へ10mほど離れたところに位置する。標高20mである。竪穴の平面形は隅丸長方形を呈し、規模は長軸294cm、短軸235cm、深さ17cmである。竪穴の内側には柱穴が4箇所認められ、その深さは床面から20cmであり、柱穴の底面には小形の川原石が敷かれ、柱が沈まない工夫がなされている。炉跡などは認められない。遺物は瓷器片で第Ⅲ型式に属する。建てられた時期は遺物から平安時代後期とみられる。

S B 2（実測図第4図4，図版1・B）

S B 2はS B 1の南側50cm離れたところに位置する。平面形は陰丸で正方形に近い。規模は長軸279cm、短軸269cm、深さ19cmである。竪穴の内側には柱穴が6箇所認められ、その深さは床面から15cm～18cmである。炉跡などは認められない。遺物は瓷器35片である。瓷器は高環脚部片と壺の口縁部片で、第Ⅱ型式にあたる。建てられた時期は遺物から平安時代中期とみられる。

S B 3（実測図第5図5）

S B 3はS B 2から東へ60cm離れたところに位置する。竪穴は構造物により全貌を明かにすることができなかった。調査し得た結果、平面形は隅丸長方形を呈するものとみられる。規模は長軸218cm、短軸283cm、深さ23cmである。竪穴には炉跡などは認められなかった。遺物は緑釉のかゝった土器片で古瀬戸である。建てられた時期は遺物から鎌倉時代とみられる。

S F 1（実測図第5図6，図版2・A）

S F 1は絹張塚の頂部東側の裾部に位置する。平面形は隅丸長方形を呈する。規模は長軸196cm、短軸61cm、深さ地山面から11cmである。土坑内底部には角礫が40個ほど遺存していた

ことから埋葬壙とみられる。埋葬施設は墓壙と掘り木棺を直葬している。遺物は瓷器第Ⅱ型式の碗、壺の小破片である。木棺の大きさから成人埋葬とみられ、埋葬時期は平安時代中期とみられる。

S F 2 (実測図第5図7)

S F 2はS F 1の東側70cm離れて造られている。平面形は隅丸長方形を呈し、規模は長軸165cm、短軸74cm、深さ12cmである。土坑底部には角礫が80個ほど敷かれており埋葬壙とみられる。埋葬施設は墓壙と掘り木棺を埋葬している。遺物は何も出土していない。埋葬時期はS F 1と同時期であろう。(以上 内藤 次郎)

経塚

S F 1の西側に営まれている。後世に植えられた松の根元にあたる。経塚は平安時代中期から末法思想の普及によって経曲保存の目的をもって経塚が営まれたものである。そして埋納する経曲には法華経、一字一石経など様々であるが、本経塚の場合は平たい川原石の一つに経文を一字書いて埋納した一字一石経である。松の根により破壊が著しく全貌を明かにすることはできなかった。出土した経石の数量、大きさ、石質、経文などは詳かでない。埋納された時期については恐らく鎌倉時代であろう。

道路跡 (図版第2・B)

S B 1の南側に山麓に沿って東西に通じている。道路東側は構造物により調査はできなかった。調査し得た規模は延長9m、幅員2mで、西端は経塚の南側をとおる高低差1mほどの坂道となっている。道路は整地したのち拳大の川原石を敷き均している。そして測溝が北側と南側に設けられていた。崩壊や変形が著しいが規模は幅25cm、深さ20cmほどである。道路が築造された時期は道路上から出土した土器片の瓷器から平安時代中期とみられる。

3. ま と め (実測図第3図2)

絹張塚は尾根の最南端の裾部沿に竪穴3軒、土壙墓2基、経塚1基、敷石道跡1ヶ所のあわせて七つの遺構が発掘された。

竪穴はいずれも隅丸長方形を呈し、竈や焼土は検出されない。竪穴の占地する地形はごく小

表4 絹張塚遺跡遺構一覧表

種別	平面形	規模			遺物	時期	備考
		長軸	短軸	深さ			
S B 1	隅丸長方形	294	235	17	土器片	平安時代後期	
S B 2	隅丸長方形	279	269	19	土器片	平安時代中期	
S B 3	隅丸長方形	283	218	23	土器片	平安時代後期	
S F 1	隅丸長方形	196	61	11	土器片	平安時代中期	
S F 2	不整長楕円	165	74	12	土器片	平安時代	
敷石道跡	長方形	長 900	幅 200		土器片	平安時代中期	
絹張経塚	—	—	—	—	一字一石経	鎌倉時代	

規模の扇状地を呈し、地盤が軟弱であるため、竪穴の柱穴底面に小形の平たい川原石を置き、柱を補強している。

土壙墓は平坦面を削り整え、地山を掘りさげて墓壙をつくり、底面に角礫を置いて木棺を埋葬している。

経塚は土壙墓の西側、敷石道跡の北側に築かれている。松の老木の根元にあり、塚の形態はない。平たい川原石を用いた一字一石経を埋納したものである。

敷石道跡は側溝をもった道で、全面に拳大の川原石を敷き均している。道跡からの遺物は平安時代の中頃とみられるところから、律令国家の交通整備の一つとして駅伝の制が設けられたが、律令制の崩壊とともに衰退し、平安時代中期には消滅しているが、このたび発掘した敷石道跡も、恐らく古代から中世にかけて東海道の重要な道路跡の一つと考えたい。

道の西端から坂道となる重要な地点であり、竪穴も住居跡ではなく、古代から中世へと続いた街道警備の任に当たった者の屯所とも言うべき施設であったかもしれない。そして、こゝを終焉の地とした者の土壙墓やその供養として経塚がつけられた。後世絹張塚と言い伝えられ、聖域として祀られてきた。

(岩井 克允)

第3章 不動ヶ谷古墳群

1. 位置と環境（実測図第6図1）

不動ヶ谷地区は掛川駅から北北西へ2 kmほど行った掛川市下西郷字不動ヶ谷1143、大池字38ノ坪、下垂木字岩谷に位置する。

掛川市の北方の飛鳥山から続く尾根が、枝状に南へのび、倉信川近くまでのびている。遺跡はこの南端部の東西にのびる尾根上と位置する。調査地点のうち最も北側に位置する。

第5地点は標高59.3 mである。ここから尾根を南に25 m行くと第4号地点が位置している。そして、この第4号地点を分岐点として尾根が2つの方向に分かれている。東側に分かれている尾根を15 m行くとコブ状の高まりを呈す第5号-2地点が位置している。今回調査の対象となった中で、最も高いところである。そしてさらに南東に30 m行くと不動ヶ谷古墳が位置している。第4地点から南西に分岐している尾根を10 mさがると第3号地点が位置している。さらに、南西に10 mさがると尾根が高まり西側にまがる部分に第2号地点が位置している。調査地域から周囲を見わたすと、北側には不動ヶ谷古墳群が分布している。南側は倉真川が進んだ沖積平野が広がり、宅地化が進んで水田地帯や市街地が一望のもとに眺められる。また、この沖積地は静岡県埋蔵文化財包蔵地地名表には須恵器片が出土する地点として掲載されている。東側は新池を築くのに適した袋状に入りくんだ谷を形成し、その下方は水田となって西谷田部落へと続いている。この周辺には、今回バイパス建設により消滅する西谷田古墳をはじめ、数基の古墳が点在している。西側は溜池を築き水田がひらけている。また北方からのびる尾根の中腹には横穴が造られている。

2. 第2地点（実測図第7図2、図版4）

第2地点は第3地点から緩やかに下った尾根の末端部に位置している。標高は58.41 mである。

地籍は掛川市下垂木字岩谷1162 同1143-3及び同市大池38の坪2181に属する。

西側は尾根が低く続き、更に水田が開けている。北側には谷を隔てて不動ヶ谷横穴群が分布し、東側には第3地点がある。また南側下方には水田が開けている。

調査は頂部に十字形に交互する2本のトレンチを設定してそれぞれ調査を行なった。

その結果、土壌などは発見されず、又葺石などの外部施設も検出されなかった。また黒色有

機土の堆積や地山にも手加えられていなかったことから、本地点は墳丘状を呈した尾根の高まりであると判断して調査を終了した。

3. 第 3 地 点 (実測図第 7 図 3, 図版 5)

第 3 号地点は、第 4 号地点から南北にゆるやかに下る尾根に位置する。標高は 60.9 m をはかる。この第 3 号地点の南と北は崖状になっている。東側は第 3 号地点に連なる尾根の鞍部である。地籍は掛川市下垂木字岩谷 1142-2 と大池 38 の坪 2181 である。

尾根と平行に東西に約 13 m の長さもち幅 50 cm のトレンチと東西トレンチに直角に長さ 6 m、幅 50 cm のトレンチを南北に設定して調査した。表土層は南側も北側もやはり非常に薄く、2 cm ～ 5 cm ほどであった。第 2 層は強い淡黄褐色土層で 3 cm ～ 20 cm の厚みをもっている。第 3 層は褐色土層になり地上と考え、また遺構や遺物も検出されず地脈と判断して調査を終了した。

4. 第 4 地 点 (実測図第 8 図 4, 図版 6)

新池の北方の丘陵がいくつもの袋状に入りくんだ谷を形成しながら尾根となって南にのび、新池の西南部で 2 つに分岐している。この分岐点に第 4 号地点が位置している。

地籍は掛川市下垂木字岩谷 4108, 同 1143-2 掛川市大池字 38 の坪 2181, 同 2182-1 に属する。標高は 92.09 m である。本地点から四方の景観がよくながめられ、古墳を築く立地条件としては最も良い場所である。南側は急角度をなして落ち込んでいる。南西側には第 3 号地点が位置する。本地点の形態は不整形な円形である。

調査は遺構が稜線方向からみて、東西に築かれている可能性を考慮して、頂上部北西端から頂上部の中央を通過して、第 3 号地点の東側裾部に向けて、長さ 9.4 m のトレンチ A と墳上部の中央から東側へ 3.5 m 隔てたところに長さ 7.4 m のトレンチ B と、さらに東側へ 3.5 m 隔てたところに長さ 5.6 m のトレンチ C をさらに、トレンチ A と並行して長さ 1.6 m のトレンチ D を設定して行った。

この結果、葺石などの外部施設や土器などの遺物が何も検出されなかった。又黒色有機土の堆積や地山に手加えられていなかったことから本地点は、墳丘状を呈した尾根の高まりであると判断して調査を終了した。

5. 第 5 地 点 (実測図第 8 図 5, 図版 7)

第 5 号の 1 地点は第 4 号地点より北に続く尾根にあり、第 4 号地点よりわずかにくだりそしてゆるやかな勾配ののぼる地点に位置している。標高は 59.38 m をはかる。

この地点の東側は崖状をなし新池をのぞみ、西側は急な斜面である。地籍は掛川市下垂木字岩谷 4108 と大池 38 の坪 2182-1 である。

調査は東西に長さ 8 m, 幅 50cm のトレンチを 2 本並行して設定し調査を開始した。

この結果遺構や遺物も発見されなかった。さらに土層にも変化が認められないところから古墳ではなく尾根の高まりであることがわかり調査を終了した。

6. 第 5 — 2 地点 (実測図第 9 図 6, 図版 8)

本地点は第 4 号地点から東へ約 25m ほどに位置する。地籍は掛川市下垂木字岩谷 4108-1 下西郷字不動ヶ谷 1143-2 に属する。

本地点の標高は 63.4m を測り、周辺の中では最も高所をなす。稜線方向からみて、東西に埋葬されている可能性を考慮してマウンドの中央部に十字形に交互する東西トレンチと南北トレンチを設定して調査を行なった。

この結果、頂部に浅い土壌状のものがみられたが、風化と攪乱著しく土壌と認めるまでには至らなかった。外部施設もなく。遺物も出土していない。このようなことから墳丘を呈した尾根の高まりであると判断し調査を終了した。

7. 不動ヶ谷古墳 1 号

(1) 位置と環境 (実測図第 9 図 6, 図版 9・A)

不動ヶ谷古墳は飛鳥山の南 1,500 m 附近の尾根の一つが東南にのびている先端に位置し、標高 59.8m の尾根の高まりを利用して造られている。第 5—2 地点から東へ 50m のところである。古墳の北側は急崖で谷田となり、東側は墳裾から低く尾根がのびている。西側は尾根が続き、不動ヶ谷横穴群、三十八ノ坪横穴群が所在する。南側には倉真川と沖積平野が広がっている。

(2) 墳 丘

墳丘は標高 59.8m の尾根の先端頂部に築造されている。墳丘の北側、南側は急崖となり、東側は尾根が急傾斜となって南東にのびている。また墳丘は雑木により攪乱され遺存状態は良好とは言えない。規模は直径 6 m, 高さ 1 m で小規模の墳丘である。

(3) 埋葬施設

埋葬施設は地山を掘りさげて墓壇をつくり、木棺を埋葬している。墓壇は主軸を N-48°-E にむけている。平面形は隅丸長方形を呈する。規模は長さ 218cm, 幅 49cm, 深さ 15cm である。木棺の形態は墓壇の断面形が舟底形を呈しており、割竹型木棺である。遺物は墓壇内および周辺からも何も出土しなかった。

(4) ま と め (実測図第9図7)

不動ヶ谷古墳1号は尾根の先端頂部につくられ、尾根の小隆起を削り、あるいは盛り上げて墳丘を整えている。外部施設はない。立地条件は悪くはないが墓域に制約をうけている。

埋葬施設が地山を掘りさげて墓壇をつくり、木棺を埋葬していることは西谷田古墳2号と相似ている。木棺の幅はやゝ狭いが成人埋葬であろう。副葬品の出土もなく築造された時期については詳かでないが築造形態から推定して古墳時代中期頃(5世紀)であろう。今後の課題として類例を待ちたい。

(岩井 克允)

第4章 西谷田古墳群

1. 西谷田古墳1号

(1) 位置と環境 (実測図第10図, 図版10・A)

西谷田古墳群は倉真川右岸のいくつものオボレ谷を形成しながら南にのびる尾根が西谷田地区で東に達している。古墳群はその尾根の一つで、通称「北条ヶ谷」と呼ばれる谷の南側で、東側にのびた尾根上の「裏山」上に位置している。周辺の地形は北側は西側へ奥の深い谷と尾根が続き、東側は北側から南に続く谷となり、その東側は谷を隔て、洪積台地倉真川とその沖積平野、初馬川となっている。南側は倉真川と初馬川の合流点近くで、沖積平野が広がっている。

古墳群周辺の遺跡をみると、北側では谷を隔て、西谷田横穴群、飛鳥横穴群が所在し、東側は今回調査することになった次郎丸遺跡、次郎丸古墳、原遺跡が望まれ、南側は宅地化された沖積地で須恵器の包含地である下西郷地区が望まれる。

(2) 墳 丘

西谷田古墳1号は標高56.4mの尾根の最頂部を利用して築造されている。墳丘は北西裾部および東裾部の盗掘による攪乱と墳頂平坦面の材木搬出工事による攪乱の外は封土の流れを考慮に入れても原形を比較的良好に保っている。墳丘は第4紀洪積層の上に堆積している小笠山礫層上に築造されている。墳丘は東西と南北に人頭大の川原石を配置して墓域と定め、この内部に埋葬施設をつくっている。

(3) 埋葬施設 (実測図第11図3, 図版9・B)

埋葬施設は礫層を掘り込んで墓壇をつくり木棺を埋葬している。墓壇のつくられている礫層を断面図から見ると洪積地の河床が北から南へ流れていたとみられる。やゝ大きい礫が墳丘中央部ではほぼ平坦になっているが、南側ではせりあがっている。この上に赤褐色の礫層がみられ、このうえに細かい礫が中央から南部にかけてみられる。この赤褐色土層は川床が干上がって酸化して再び川床として流れ、細かい礫が川床にたまり、その上にやゝ大きい礫が堆積している。

埋葬施設は礫層を掘りさげて土壇を造り粘土による墓壇をつくり木棺を埋葬している。墓壇は主軸をN-24°-Eにおいている。平面形は隅丸長方形を呈する。規模は長さ356cm、幅69cm、深さ21cmである。墓壇の断面形が舟底形をしており、木棺形態は割竹形の木棺である。

(4) ま と め (実測図第11図2)

占地については尾根の最頂部に築造されており、選地については築造時の立地条件は良好である。墳丘については封土の流れなどもあるが、原形はよく遺存している。墓域も大形の川原石を配置して定め、内部構造が礫層を掘り割竹形木棺を直葬している。埋葬墳の東南2.5mの地山面から出土した土師器片には赤色顔料が塗れた高坏脚部は古墳時代中期のものとみられる。古墳の築造された時期は埋葬墳近くの地山面から出土した土師器から5世紀末を求めたい。被葬者は木棺から成人埋葬であり、埋葬墳からの副葬品が何もなかったが、占地にすぐれていることから恐らくこの地域を支配した者とみられる。

2. 西谷田古墳2号

(1) 位置と環境

西谷田古墳2号は西谷田古墳1号の東側斜面を3.5mさがった尾根上に位置する。古墳の北側には西谷田川と倉真川によって形成された沖積平野が広がっている。東側には谷を隔て、次郎丸遺跡のある台地が望まれる。

(2) 墳 丘

墳丘は尾根の頂部よりやや東側の緩斜面に築造されている。墳丘は西側は自然急崖となり、南側は裾部が開墾により消滅している。このため南北に長い楕円形を呈する。墳頂部は後世の祠のため削られ原形はだいぶ損なわれている。

(3) 埋葬施設

埋葬施設は地山を掘りこんでつくられた土壌で、木棺を直葬している。主軸をN-23°-Eにおき、平面形は隅丸長方形を呈する。埋葬墳の規模は長さ266cm、幅61cm、深さ13cmである。木棺は墓壇の断面形が舟底形であることから割竹形木棺である。

(4) 遺 物

遺物は埋葬墳からも、また地山面からも出土しなかった。削平された墳頂部に埋納されていたかもしれない。

(5) ま と め

築造時期については地山を掘りさげ墓壇そっくり木棺を埋葬していることは西谷田古墳1号と相近い年代が考えられるが、副葬品が何も出土していないので詳かでない。今後の課題としたい。被葬者については木棺の規模から成人で、西谷田古墳1号の被葬者よりも身分の低い者とみられる。
(岩井 克允)

第5章 次郎丸遺跡

1. 位置と環境（実測図第12図，図版12）

掛川駅から北へ700 mほど行くと、国道一号の北門交差点に出会う。ここを左折して、西へ向って200 mほど行き右折し北方へ進み、倉真川を渡り500 mほど行った右手に位置する。地籍は掛川市上西郷字西谷田754-4，上西郷字小市825-2である。

遺跡周辺の地形は、掛川市のほぼ中央を北から流れる倉真川が、北東から流れる初馬川と掛川市戸塚地区で合流し、流れを西へ変え右岸の小段丘が形成されている。段丘は北から南に細長く舌状にのび、次郎丸遺跡で急坂斜となり下位段丘と続いている。さらに倉真川を渡った南方には沖積平野が広がっている。西側は枝状に発達した稜線と開折谷が続いている。北東から東側は倉真川と初馬川によってつくられた沖積平野が800 mほどの幅で広がり、その東には、北東からの稜線がのびている。

次に次郎丸遺跡周辺の遺跡をみると、北側の倉真川右岸には小市横穴群、小市遺跡、稲荷山古墳群、平塚山古墳がある。西側には、西谷田古墳の他、西谷田横穴群、不動ヶ谷古墳、不動ヶ谷横穴群などが点在する。東側には沖積平野が広がり、須恵器の包蔵地で東の北袋遺跡、戸塚遺跡の他水垂二ツ池古墳群、天王山古墳群が点在する。南側の段丘上には原遺跡、次郎丸古墳がある。

2. 遺 構

S B 1（実測図第16図11，図版17・B）

S B 1は台地の南東部に位置する。平面形は隅丸長方形を呈する。規模は長軸377 cm，短軸271 cm，深さ38 cmである。竪穴住居跡には柱穴が4個所認められ、その深さは10 cmから15 cmである。焼土が竪穴の中央部分に長軸105 cm，短軸70 cmの規模で遺存し、炉跡である。竪穴の南西隅には長軸120 cm，短軸52 cm，深さ35 cmの土坑がつくられており貯蔵穴であろう。遺物は竪穴床面から土師器の小破片22個が出土した。土師器片は風化が著しいが、第Ⅱ型式にあたる。竪穴住居跡の建てられた時期は出土した遺物から古墳時代後期と考えたい。

S B 2（実測図第17図12，図版18・A）

S B 1から西へ380 cm離れた台地西側の緩斜面に造られている。平面形は隅丸長方形を呈する。規模は長軸307 cm，短軸248 cm，深さ20 cmである。竪穴住居跡には村穴が4個所認められ、その深さは5 cmから15 cmである。焼土が竪穴の中央部分に長軸50 cm，短軸45 cmの規模で遺存しており、炉跡である。遺物は須恵器の坏蓋片で第Ⅲ型式の前半にあたる。竪穴住居跡のつくられた時期は出土した須恵器から古墳時代後期前半と考えたい。

S F 1 (実測図第16図10, 図版17・A)

S D 1 の西側へ80cm離れた台地南側の平担面に造られている。土壌は主軸をN-11°-Wにおき平面形は隅丸長方形を呈する。規模は長軸 191 cm, 短軸 106 cm, 深さ12cmである。断面形は浅い凹形を呈する。遺物は弥生式土器の小破片19個が出土した。土器は胎土, 焼成とも悪く, また風化が著しいので器形がはっきりしないが, 壺の底部が含まれている。土壌のつくられた時期は弥生時代後期末に求めたい。

方形周溝墓 (実測図第14図, 図版14)

台地の南西端近くの平担面に長軸をN-26°-Wにおき築造されている。周溝を完全にめぐらし, 陸橋部はない。平面形は長方形を呈し, 規模は長軸 5.97 m, 短軸 2.60 m である。周溝は幅 47 cm, 深さ 15 cm である。墓壙は周溝の中央や、北寄り部分に造られており, 平面形は長方形である。規模は長さ 222 cm, 幅 100 cm, 深さ 19 cm である。遺物は土器, 鉄剣, ガラス子玉である。土器は鉢で墓壙内の北壁沿いに口縁部を下にして出土した。土器は径 17 cm, 高さ 13 cm で, 胎土, 焼成とも悪く, また風化が著しい。鉄剣は墓壙の東南側壁上に切先を北に, 茎を南にして, 刃部を西側に向けて出土した。ガラス小玉は周溝の南東隅の地山面から出土した。ガラス小玉は大きさは径 5 mm で, 中央に小孔がとっている。方形周溝墓のつくられた時期は出土した遺物から弥生時代の後期末と考えたい。

方形台状墓 (実測図第13図3, 第14図4, 実測図14)

台地中央部のなかほどから東寄りにかけて造られている。調査初頭では方形周溝墓として調査し, 南側の S D 2 と北側の S D 3 を別個の遺構としていたが, S D 3 を調査中に方形周溝墓とは異なり, 方形周溝墓の外側に幅広い溝を設け外部と分断しており, 方形台状墓ではないかと判断し, 完掘したのであるが S D 3 を指示により埋返した。(全景は図版13上である)

方形台状墓は周溝を完全に周り陸橋部はない。周溝の外側には大溝を設け外部と分離している。規模は周溝を含め長軸 502 cm, 短軸 395 cm, 周溝の幅 30 cm, 深さ 15 cm である。そして, 台状墓と外部を分断する溝は S D 2 は全長 654 cm, 幅 150 cm, 深さ 28 cm である。東端は台地前落により消滅している。S D 3 はノートから長さ 6 m, 幅 156 cm, 深さ 24 cm で, 西側へと周っていた。溝を含めた南北 10.3 m である長さは, 主体部の墓壙は中央東寄りの東側周溝から 30 cm 離れて, 主軸を東西方向に向けている。平面形は楕円形を呈し, 規模は長軸 76 cm, 短軸 47 cm, 深さ 14 cm である。埋葬施設は土器棺で, 口縁部を東側に向け, 底部を掘りくぼめた深いところにおいている。遺体は頭部を上向きにした埋葬方法である。

土器棺に使われた土器は弥生式土器で, 2 個体分である。胎土, 焼成とも良好である。台状墓のつくられた時期は出土した土器から弥生時代後期中葉に求めたい。

S D 1 (実測図第15図7, 図版15・A)

S F 1 の東側 80 cm 離れた台地の南東に位置する。遺構は S B 1 の南側と重複し, 竪穴住居跡を切っている。平面形は東西方向の途中から南東方向へ曲っている「へ」字形を呈する。規模は東西のところから北東へ 150 cm のびている。全長 410 cm, 幅 98 cm, 深さ 34 cm である。そして溝なかほどの変曲点附近から西側へ 30 cm, 南東側へ 60 cm の間が深さが 40 cm となっている。

溝の断面形はU形を呈する。遺物は溝中央部の底面から土師器が出土している。土師器は高坏と壺でそれぞれ2個体分である。溝の性格についてははっきりしないが、別の方形周溝墓の溝とも考えられる。溝のつくられた時期は出土した土師器か土師器第Ⅱ期に属することから、古墳時代中期中葉としたい。

木棺礫郭土壙墓（実測図第18図，図版19・20・21・22）

木棺礫郭土壙墓は方形台状墓から北側へ65m離れた平坦部のなかほどに位置する。墓壙は主軸をN-10°-Wにおき、平面形は長方形を呈する。規模は長軸274cm，短軸114cm，深さ23cmである。埋葬施設は墓壙の内側の礫郭と木棺とからなっている。礫郭の規模は長軸550cm，短軸227cm，深さ50cm，積み上げた礫の厚さは60cmである。埋葬方法は墓壙を掘り、床面に川原石を敷き、その中央部に木棺を安置し、木棺の周りに川原石を積み上げて礫郭を造り盛土を行ったものとみられる。木棺の規模は木棺に使用したものとみられる釘の出土状態から長軸390cm，短軸100cm，深さ40cmと推定される。木棺に使用した材木の厚さは15cmほどである。

遺物は木棺に使用した鉄釘14本とガラス小玉3個である。鉄釘は長さ7cmから15cmである。ガラス小玉は礫郭の北側から中ほどにかけて出土しており頭飾であろう。占地については南北に長い台地の中央部に位置し、築造時の選定は優れている。被葬者は成人であり埋葬礫郭が密に築造されており、副葬品の種類は少ないが玉類であることは身分の高い者であると言える。

3. ま と め（実測図第13図2）

次郎丸遺跡は尾根の先端で細長い平坦面に堅穴3軒，土壙墓1基，方形周溝墓1基，方形台状墓1基，木棺礫郭木郭土壙墓1基，溝状遺構3基のあわせて10基にのぼる。

堅穴はいずれも住居跡で，SB1は円形のプランで，炉跡があり，土師器片が出土した。古墳時代中期である。SB2とSB3は隅丸長方形を呈し，炉跡を検出した。埋土中から須恵器が出土しており，古墳時代後期のものである。住居跡は水田との地高36mを計り高地性集落跡と言える。

土壙墓は地山を掘り下げて墓壙をつくっている。墓壙は浅く，平坦をなしている。長さも2mほどあり成人の埋葬壙と考えられる。

方形周溝墓は周溝が完全に巡り，橋部の施設はない。本墓は南北方向の長方形で，中央部に墓壙が掘られていた。墓壙内からは弥生時代末期の鉢，鉄剣が，周溝南西側からガラス小玉が出土した。方形台状墓は正方形の平面形を呈し，中央東溝近くに楕円形の土壙が掘られ，甕棺が埋納されていた。菊川式よりやや遅れる可能性のあるものである。

溝状遺構のSD1は「く」の字形で，堅穴SB1の南下部と複合している。溝内から古墳時代中期の土師器，高坏が出土している。SD2は方形台状墓の南側で，周溝に沿って掘られている。胎土，焼成が悪い，風化の著しい須恵器片が出土している。SD3は方形台状墓の北側に周溝に沿って掘られている。

木棺礫郭土壙墓は他の遺構から北側へ隔てられてつくられている。築造時には墳丘を成していた

木棺礫郭土壙墓は他の遺溝から北側へ隔て、つくられている。築造時には墳丘を成していた可能性もあるが、現況は開墾の影響もあるが、平坦である。外部施設はない。土壙墓は地山を掘りさげ、川原石を敷きつめて木棺を安置し、その周囲に川原石を積み上げ、上部にも礫を置き並べて封土を被せた埋葬形態である。礫郭内からはガラス小玉と木棺に使用した釘14本が出土している。本埋葬壙がつけられた時期は礫郭内から出土した遺物と墓郭近くの封土中に検出された緑釉土器片から奈良時代と考えたい。

以上、次郎丸遺跡から検出した遺構について概略したが、これらを築造年代に従って記すと、まず土壙墓S F 1が築かれ、ついで、方形周溝墓、方形台状墓がつけられた。古墳時代に入り、堅穴S B 1がつけられ、次いで、溝状遺構S D 1、堅穴S B 2、堅穴S B 3の順でつけられた。そして、奈良時代になって木棺礫郭土壙墓がつけられた。このように次郎丸遺跡は弥生時代後期終末期から奈良時代におよぶ墓域であり、また高地性集落跡でもあった。（岩井 克允）

第6章 戸塚遺跡

1. 位置と環境（実測図第20図1，図版23）

戸塚遺跡は掛川市の北東にそびえる粟ヶ岳南西麓から流下している初馬川の下流の左岸で初馬川と水垂川との間を南西にのびる稜線が、南に方向を変える地点の稜線上に位置する。地籍は掛川市上西郷字戸塚42-1である。

遺跡周辺の地形をみると、北側と西側には初馬川と倉真川によってつくられた沖積地となり水田が開けている。南側は稜線が1 kmほど続いている。

周辺の遺跡についてみると、北側では北袋遺跡、さらに北方に大型前方後円墳といわれる下山古墳がある。西側は沖積地が広がり、倉真川の台地にはこのたび調査することになった次郎丸遺跡の他原遺跡、次郎丸古墳、小市遺跡などがある。南には直径13m、高1.5 mのでんでこ山古墳や下清水1号墳、同2号墳、八景山古墳、原新田古墳、天王山古墳群、天皇山遺跡が点在する。さらに東の水垂川の左岸には内籠遺跡、大多郎遺跡、大手山古墳がある。

2. 遺構

S F 1

S F 1は戸塚遺跡の最頂部の東側緩斜面に位置している。畑地として削平されているため遺構の大部分は消滅し、全貌をみることはできなかった。遺構は土壇状と推定されるものである。検出し得た本遺構の平面形は楕円形を呈し、規模は長軸100 cm、短軸78 cm、深さ14 cmである。遺物は精査したが、遺構内からは何ら出土しなかった。しかし、周辺の地山面から中世の甕片などが出土しており、本遺構の築造された時期については、出土した土器片と近い時期と考え鎌倉時代とみられる。

中世の墓にはこのような土壇墓が多いことも特徴の一つである。一般的には長方形または円形の平面をなすように土壇をほり、そのなかに遺体を安置するもので、木棺や木桶に納めたもの、あるいは直接遺骸を納めることもある。そして、その上に土をかぶせ墳丘状を呈するものや、石を置く場合、あるいは五輪塔を置く場合もある。本遺構の場合は削平されている為、規模、形態は詳かでないが、方形土壇のものが木棺埋葬、円形土壇のものが桶埋葬といえることから、恐らくは、地形をも考慮に入れて長方形の埋葬壇であったと考える。

3. まとめ（実測図第21図2）

戸塚遺跡は南北に述べる屋根上の小隆起を削りまた盛土として墳丘を整えているが、開墾に

より大きく変貌している。尾根の東緩斜面を掘りさげて土壙がつくられているが、開墾のため上部は削りとられている。

検出された土壙は底部を残すのみであり、全形は詳かでないが、残存状態から推定して恐らく長方形であったろう。土壙内からは遺物は何も検出されなかったか。北6 mあまりの地山面から出土した中世の甕片が、土壙がつくられた時のものとする、この土壙は鎌倉時代の埋葬壙と言える。

（岩井 克允）

第7章 内籠遺跡

1. 位置と環境（実測図第22図1，図版24）

水垂地区は掛川駅から北東へ2.2 kmほど行った水垂川の左岸で、北東の南アルプスの最南端、粟ヶ岳から連なる尾根が、枝状に発達した開折谷を形成しながら南北にのびている一つが水垂川の左岸にそっている。遺跡はその尾根の標高73.4 mの最頂部周辺に位置している。地籍は掛川市水垂字内籠510他である。

周辺の地形および遺跡についてみると、北側は水垂川によってつくられた沖積地による水田がみられるが、次第に造成され宅地化が進んでいる。北方の丘陵には横穴墳が営まれていたが開墾によって、調査をまたず消滅した。南側は逆川によってつくられた沖積地の水田地帯が広がり、次第に宅地化が進んでいる。東側は丘陵であったが、静岡県によって住宅用地を建設すべく切り崩して宅地造成された。この地域内には埋蔵文化財として、今まで知られていた水垂経塚がただ一つ、事前調査された。この他横穴も分布していたことが採集された遺物によって明らかになった。西側には水垂川によってつくられた沖積地が水田地帯も形成している。そして水垂川に沿った西側の北方からのびる丘陵は発掘調査により、消滅したものを含めて古墳群が10基以上を数える地域である。（岩井 克允）

2. 遺 構

S B 1（実測図第24図3，図版24・B）

S B 1は内籠遺跡の最頂部北側の緩斜面に位置する。畑地として利用され削手されてはいるが遺存状態は比較的良好である。竪穴の平面形は楕円形を呈し、規模は長軸303 m，短軸295 m，深さ12 cmである。竪穴の中央付近には径40 cmほどの焼土が遺存している。焼土は厚く5 cmほどもり上がり長い時間火を焚やしていたものとみられる。竪穴南壁沿いの東西方向に土坑が掘られている。南側の土坑は長さ320 cm，幅120 cm，深さ26 cmである。

遺物は黒褐色土のまじった土坑から土器3個体分が出土した。本遺構についての性格ははっきりしていない住居跡とみるよりも、埋葬墳に隣接地に火を焚き葬送儀礼した小屋ではなかったか。遺構の造られた時期に出土した土器から弥生時代後期末に求めたい。

S B 2（実測図第24図4，図版25・A）

S B 2はS B 1の南側10 m離れたところに位置する。尾根の最頂部の西側緩斜面に造られているが、遺存状態は比較的良好である。平面形は楕円形の皿状を呈し、規模は長軸306 cm，短軸272 cm，深さ25 cmである。柱穴は無い。竪穴内の東壁と南西壁に長軸1 m，短軸60～80 cm，深さ25 cmの土壇が掘られている。遺構の中央部分には焼土が直径50 cmの範囲で認められた。遺

物は何も出土しなかった。遺構の造られた時期は出土遺物がなく明かでないが、S B 1 と同時期とみてよからう。

S B 3 (実測図第25図5, 図版25・B)

S B 3はS B 2の南側3 m離れたところに位置する。尾根の西側緩斜面に造られているが、遺存状態は比較的良好である。平面形は楕円形の皿状を呈する。規模は長軸207 cm, 短軸160 cm, 深さ23 cmである。柱穴, 焼土等は認められず, 遺物も出土していない。

遺構の造られた時期は出土遺物がなく明かではないが, S B 1, S B 2 と同時期とみている。

S F 1 (実測図第25図6, 図版26)

S B 1から北へ5 mほど離れた平坦面に位置する。主軸の北東から南西に向け平面形は楕円形を呈する。規模は長軸151 cm, 短軸98 cm, 深さ20 cmである。遺物は弥生式土器3片が土壌内東壁上面から出土した。土器は風化が著しいが壺片である。土壌の性格については不明確ではあるが, 埋葬壙と考えられる。

S F 2 (実測図第25図7, 図版26・B)

S F 1の南4 mのところに緩斜面に造られている。主軸を北東から南西に向け, 平面形は不整楕円形を呈する。規模は長軸110 cm, 短軸40 cm, 深さ9 cmである。遺物は何も出土していないため性格などはっきりしないが, 埋葬壙とみられる。

S F 3 (実測図第25図8, 図版26・B)

S F 2の南西50 cm離れた緩斜面につくられている。主軸を北東から南西に向け, 平面形は不整楕円形を呈する。規模は長軸149 cm, 短軸61 cm, 深さ9 cmである。遺物が何も出土していないため性格などはっきりしないが, 埋葬壙とみられる。

S F 4 (実測図第26図9, 図版26・B)

S F 3から西へ20 cm離れた緩斜面につくられている。主軸を北東から南西に向け, 平面形は不整長楕円形を呈する。規模は長軸145 cm, 短軸51 cm, 深さ9 cmである。遺物が何も出土していないため性格などはっきりしないが, 埋葬壙とみられる。

S F 5 (実測図第26図10, 図版26・B)

S F 3から南へ40 cm離れたところに位置する。主軸を北西から南東に向け, 平面形は不整長楕円形を呈する。規模は長軸192 cm, 短軸85 cm, 深さ8 cmである。遺物が何も出土していないため性格などはっきりしないが, 埋葬壙とみられる。 (内藤 次郎)

3. ま と め (実測図第23図2)

内籠遺跡は南北にのびる尾根の最頂部の西緩斜面に竪穴状遺構3基と尾根北側平坦面に土壌5基とからなっている。竪穴状遺構はいずれも円形を呈するが, S B 1は床面中央部に焼土が検出され, 南部分には東西に竪穴の長軸より長い長方形の土壌がつくられている。土壌内からは微細な炭化物を含んだ黒色有機土が詰っており, そのなかから弥生時代終末期の土器3個体分が出土した。S B 2およびS B 3はいずれも皿状のプランで, 柱穴はない。焼土がS B 2の

表 5 内籠遺跡遺構一覧表

種別	平面形	規模			遺物	時期	備考
		長軸	短軸	深さ			
S B 1	長楕円+楕円	303	340 295	26 12	土器片	弥生時代後期末	焼土
S B 2	楕円	306	272	25	土器片	弥生時代後期末	焼土
S B 3	楕円	207	160	23	土器片	弥生時代後期末	
S F 1	不整長楕円	151	98	20	土器片	弥生時代後期末	
S F 2	不整長楕円	110	40	9	土器片	弥生時代後期末	
S F 3	不整長楕円	149	61	9	土器片	弥生時代後期末	
S F 4	不整長楕円	145	51	9	土器片	弥生時代後期末	
S F 5	不整長楕円	192	85	8	土器片	弥生時代後期末	

中央に検出された。遺物はない。これらはいずれも住居跡としてよりは、むしろS B 1の土壌が埋葬墳と考えられることから、葬送儀礼に使用した遺構と考えられる。

つぎに、土壌についてみると、いずれも平坦面をなす地山を掘りさげて土壌をつくっている。S F 1は楕円形を呈し、断面形が皿状であるが、他はすべて不整長楕円形を呈する。遺物は検出されなかった。

内籠遺跡のいとなまれた時期は竪穴状遺構が弥生時代終末期と考えられるが、土壌群は遺物がなく詳かでないが、竪穴状遺構と大差がないとみてよからう。(岩井 克允)

第8章 大多郎遺跡

1. 位置と環境

掛川駅から北東へ2.2kmほど行った水垂川の左岸の大平山から北へのびる尾根上に位置する。地籍は掛川市水垂字大多郎590外に属する。周辺の遺跡についてみると、尾根の稜線を隔てた西側には内籠遺跡があり、尾根の北方には内籠古墳群が所在する。南側には大平山古墳群、東側には水垂経塚、山郷山遺跡などが所在する。西側にはオボレ谷を隔て、宝田古墳群が点在する。

2. 遺構

S B 1 (実測図第27図1, 図版27・B)

S B 1は内籠遺跡から東側へ9mほど下の緩斜面の北端に位置する。平面形は南北に長い隅丸長方形を呈する。規模は長軸323cm, 短軸192cm, 壁高29cmである。柱穴は4個所で、その深さは15cmから20cmである。焼土など炉跡は認められない。住居跡の包含土から弥生時代後期とみられる土器の細片が出土している。住居跡の年代は出土した土器片から弥生時代後期と考えられる。

S B 2 (実測図第27図2, 図版27・B)

S B 1の南側で20cm離れて位置する。平面形は隅丸長方形を呈する。規模は長軸276cm, 短軸218cm, 壁高20cmである。柱穴は4個所で、その深さは45cmである。焼土など炉跡は認められない。住居跡の包含土から弥生時代後期とみられる土器細片が出土している。住居跡の年代は出土した土器片と同じ時期とみられる。

S B 3 (実測図第28図3)

S B 2から南側へ2.8m離れている。平面形は隅丸長方形を呈し、規模は長軸302cm, 短軸263cm, 壁高25cmである。柱穴は6個所で、その深さは床面から12cm～20cmである。焼土など炉跡は認められない。住居跡内の包含土から弥生時代後期のものとみられる土器の細片が出土している。住居跡の年代は出土した土器片と同じ時期とみられる。

S B 4 (実測図第28図4, 図版28・A)

S B 3から南へ140cm離れたところに位置する。平面形は隅丸長方形を呈する。規模は長軸350cm, 短軸247cm, 壁高41cmである。柱穴は6個所で、その深さは床面から16cm～18cmである。住居跡の年代は出土した土器片と同じ時期とみられる。

S B 5 (実測図第29図5, 図版28・B)

S B 4から南側へ220cm離れたところに位置する。S B 6と重複し、それを切っている。平

面形は隅丸長方形を呈する。規模は長軸 277 cm, 短軸 246 cm, 壁高 20 cm である。柱穴は 4 個所で、その深さは床面から 15 cm から 18 cm である。焼土など炉跡は検出されない。住居跡の埋土器から弥生時代後期とみられる土器の細片が検出している。住居跡の年代に出土した土器と同じ時期とみられる。

S B 6 (実測図第 29 図 5, 図版 29・A)

S B 6 は S B 5 と重複し、S B 5 によって切られている。遺存する竪穴の平面形は隅丸長方形を呈する。規模は長軸 264 cm, 短軸 248 cm, 壁高 24 cm である。柱穴は 4 個所で、焼土など炉跡は検出されない。住居跡からは弥生時代後期とみられる土器の細片が出土している。住居跡の年代は出土した土器と同じ時期とみられる。

S B 7 (実測図第 29 図 6, 図版 29・A)

S B 4 から南側へ 220 cm 離れたところに位置する。平面形は隅丸長方形であるが、長軸のなかほどがやや張りだしている。規模は長軸 354 cm, 短軸 250 cm, 壁高 17 cm である。柱穴は 6 個所で、炉跡は認められない。遺物は土師器の小破片が 5 個出土している。住居跡の年代は出土した遺物が小破片であり詳かでないが、古墳時代前期であろう。

S K 1 (実測図第 30 図 7, 図版 29・B)

S B 4 から西側へ 150 cm 離れたところに位置する。平面形は楕円形を呈する。規模は長軸 232 cm, 短軸 195 cm, 壁高 21 cm である。柱穴は 2 個所でその深さは床面から 13 cm ~ 14 cm である。遺物は弥生時代後期のもものとみられる土器の細片が少量出土しているのみで、遺構の性格が判然としない。住居に伴う貯蔵用に使用したものではなかろうか。

S K 2 (実測図第 30 図 8, 図版 29・B)

S K 1 の西側 10 cm のところに位置する。平面形は円形を呈する。規模は長軸 167 cm, 短軸 161 cm, 壁高 20 cm である。遺物は弥生時代後期のもものとみられる土器の細片が少量出土しているのみであり、遺構の性格が判然としない。住居に伴う附属施設、例えば貯蔵用に使用したものではなかろうか。

(内藤 次郎)

3. ま と め (実測図第 23・2)

大多郎遺跡は内籠遺跡の東側緩斜面に営まれた高地性集落跡である。遺跡の北側の多くは既に開墾のため消滅している。発掘された遺構は竪穴 7 基, 円形土壇 2 基のあわせて 9 基である。竪穴はいずれも隅丸長方形の住居跡である。S B 1, S B 2 は東へ急傾斜しており、つくられて間もなく地滑が起り、使用不能になったものとみられる。S B 3, S B 4 は緩斜面のなかでも平坦につくられており、柱穴が 6 ケ所ある竪穴である。S B 5 と S B 6 は重複している竪穴で、S B 6 が建てられてから時期をおくことなく埋められ、S B 5 が建てられている。S B 7 は東西に長軸をもつ隅丸長方形の竪穴で、南側と北側へ壁が張り出しているのが特徴である。S K 1 と S K 2 はいずれも正円形の土壇である。二基は互いに接しているが、周囲の竪穴の附属する小屋であろう。

表 6 大多郎遺跡遺構一覧表

遺構 番号	平面形	規模			遺物	時期	備考
		長軸	短軸	深さ			
S B 1	隅丸長方形	372	187	20	土器片	弥生時代後期前半	柱 4
S B 2	隅丸長方形	277	219	20			柱 4
S B 3	隅丸長方形	302	263	25			柱 6
S B 4	隅丸長方形	350	247	41			柱 6
S B 5	隅丸長方形	354	250	17	土師器片	古墳時代前期	柱 9
S B 6	隅丸長方形	277	246	20			柱 4
S B 7	隅丸長方形	310	248	24			柱 6
S K 1	円形	232	195	21			柱 2
S K 2	〃	167	161	20			

このように、大多郎遺跡のうち S B 1 から S B 6 までの 6 軒は南北に長軸をもつ隅丸長方形の竪穴住居跡である。集落の営まれた時期は竪穴の埋土中から出土した弥生式土器小片と S B 1 の北側で開墾により消滅した S B 0 の床面から出土した土器が菊川式土器に比定されることから弥生時代後期前半と考えたい。また、S B 7 は東西に長軸をもつ隅丸長方形の胴張りの住居跡である。竪穴内からは土師器小片が出土しており、営まれた時期は古墳時代前期と考えたい。

(岩井 克允)

第9章 大平山古墳群

1. 第11号地点

(1) 位置と環境及び調査結果

内籠遺跡から東南へ10m離れた標高76mの尾根の先端部に位置する。本地点は北西から南東に長軸をもつ不整形な長円形を呈しており、頂部は山径となって踏みかためられているため平坦状を呈している。

周辺の環境についてみると、南側は谷田の奥まったところ溜池が築かれている。西側は急傾斜で谷田となり、内籠遺跡は東傾斜面に続いている。東側はゆるやかな尾根となって第11-2地点に続いている。バイパスは本地点を北西から南東に通ずる。

(2) 調査（実測図第32図1，図版30）

調査は遺構が南北方向にある可能性を考慮して東西方向にトレンチ1条と南北方向に東西方向と直交するトレンチ3条および東側裾部に南北方向にトレンチ1条を設定して調査を行った。

この結果、古墳として調査対象となった本地点は、葺石などの外部施設は認められず、土器片などの遺物も発見されなかった。また人為的な土層や地山に人工的な手が加わっていなかったことから、墳丘形態をした地膿である。

2. 第11-2地点

(1) 位置と環境（実測図第31図1，図版32・A）

第11号地点から東につらなる稜線を15m登ってゆくと南へ直角にまがる地点に位置している。地籍は掛川市園ヶ谷字大ヶ谷1087-7，掛川市水垂字大多郎39に属する。

(2) 調査（実測図第32図4，図版31・B）

遺構が南北方向に築かれている可能性を考慮して、その逆の東西方向に頂上部北より部分に長さ2.2m，幅40cmのトレンチ，これから南側に70cm隔った，頂上部中央に長さ3.1m，幅40cmのトレンチ，さらに南側に70cm隔ったところに長さ2.7m，幅30cmのトレンチの3条を設定して調査を行った。

この結果、古墳として調査対象となった本地点からは葺石などの外部施設や土器などの破片

も発見できず、また黒色有機土の堆積や地山に人工の手が加えられていなかったことなどから、本地点は、稜線の高まりが墳丘形態をなしているものであり、古墳としては認められず、山であると判断した。

3. 大平山古墳 1号

(1) 位置と環境 (実測図第31図2, 図版32・A)

大平山古墳は水垂川に沿って北東から南西にのびる尾根の一つで、標高83.4mの通称「大平山」の頂部に位置する。古墳から南西にのびる尾根上には小円墳が所在する。古墳の西側は谷田となり、北側には尾根を開墾して茶地となっている。東側から南にかけては沖積地となり宅地化が進んだ水田となっている。周辺の遺跡についてみると、東側の宅地造成、開墾により消滅した水垂経塚、水垂横穴群、さらに谷田の東側には山郷山遺跡、峯山遺跡が点在している。北側には尾根続きの頂部に内籠遺跡、その東側裾部に大多郎遺跡、区画整理事業により未調査のまゝ消滅した大多郎古墳群がある。

(2) 墳 丘

墳丘は標高83.4mの大平山の頂部を削り、あるいは盛土をして墳丘を整えている。墳丘は東側及び西側は長い年月にわたり自然流土と、茶畑による変形が多少あるものの原形をよく保ち、南北に長い楕円形を呈している。墳丘の規模は直径15m、高さ2mである。外部施設はない。

(3) 埋葬施設 (実測図第31図2, 図版32・B)

埋葬墳は地山を掘り下げて造られており、主軸を北西から南東にむけている。平面形は隅丸長方形を呈し、規模は長さ403cm、幅中央部で100cm、深さ13cmである。断面形は舟底形を呈している。埋葬施設は埋葬墳の断面形が舟底形であり、割竹形の木棺であったと思われる。

(4) 遺 物

遺物は埋葬墳内からは何も出土していないが、埋葬墳の西壁地山面から須恵器第Ⅲ型式の前半にあたる坏蓋片1個と鉄製品の大刀小片1片が出土している。

(5) ま と め (実測図第31図1)

大平山古墳は直径15m、高さ約2mの円墳で、占地については尾根の高まりを利用して囲周を削り、若干の盛土をして墳丘が築造されており立地条件に優れている。外部施設はない。埋葬施設が地山を掘りさげて墓壇をつくり木棺を埋葬している。埋葬墳は南へ2度の角度で傾斜している。埋葬墳からは何らの副葬品も検出されなかったが、埋葬墳中央部の西壁地山面の須恵器片が築造時のものとする、本墳の築造された時期は出土した須恵器の坏蓋から古墳時代

後期・6世紀中頃に求めたい。また、被葬者は成人で、遺物は少ないが、古墳の占地に優れており、この地域での地位の高い者と思われる。

(岩井 克允)

第10章 山郷山遺跡

1. 位置と環境 (実測図第33図1, 図版32)

山郷山遺跡は掛川駅から北東へ2.4 kmほど行った掛川市宮脇字五輪田1014-1他の山郷山の頂部に位置する。

山郷山と周辺の地形をみると、粟ヶ岳北方から続く山塊がいくつもの開折谷をつくり、枝状に発達した稜線が南にのびさらにその一つが峯山から西に傾斜し、山郷山神社付近で江戸時代に切られてはいるが西にのび独立丘状をなしている。南側は安養寺川、逆川などによってつくられている沖積地がひろがり水田となっている。山郷山は稜線の最頂部がコブ状に出ており、その外形からうける感じは異様である。雑木伐採後の姿は前方後円墳を思わせる。遺跡の南側には中世の墳墓や火葬場所があり、そしてこれに続く南側には人工の手が加えられた平坦地がある。山郷山が墳墓などに利用された時代には、葬送儀礼などをした小屋の類があったのではなかろうか。

次に山郷山遺跡周辺の遺跡についてみると、北側の水田を隔てた水垂地区には、水垂横穴群、水垂経塚があり、さらに遠方には祭祀遺跡でもある粟ヶ岳が望まれる。東側には五輪田遺跡、宮脇横穴群、元屋敷遺跡、峯山遺跡、山郷山横穴群、神明横穴群、谷通り横穴群などが所在し、南側には弥生時代の河原遺跡、宮脇横穴、西側には大平山古墳、大多郎遺跡、内籠遺跡などが所在している。

2. 遺 構

このたびの調査において発掘された山郷山遺跡の遺構は弥生時代の土壙墓2基、古墳時代の土壙墓5基、中世から近世におよぶ土壙墓44基、経塚2基である。これらを時代を追って概略すると次のとおりである。

(1) 弥生時代の遺構

S F 1 (実測図第35図3, 図版39・B)

S F 1は山郷山の東側斜面でS F 2から北西側へ18cm離れたところに位置する。主軸を北東から南西におき、平面形は楕円形を呈する。規模は長軸77cm、短軸68cm、深さ5cmであった。底面は東側に13°傾斜しており、縦断面形は皿状を呈し、横断面形も皿状を呈する。

土壙内には黒色有機土が詰っており、土器片が散乱していたことから遺存しにくい有機質とともに直葬した土器棺墓と考えられる。

遺物は土壙内底面から土器片が散乱した状態で出土した。土器片は発掘時に於ては数多くあ

ったし、註1が整理段階では細片4片であった。したがって土器の形態は明確でなく、辛じて判断できるものは、口縁部片と頸部片で、いずれも胎土は荒く、焼成は悪い。文様は土器表面の剥離が著しく明瞭ではない。

この遺構の造られた時期は出土した土器片から弥生時代後期中葉と考えたい。そしてこの土壙は幼児を葬った土器棺墓であろう。

S F 2 (実測図第35図4, 図版39・B)

S F 2は山郷山の東側斜面で、T17から北西側へ10cm離れたところに位置する。主軸を東から西におき、平面形は楕円形を呈する。規模は長軸62cm, 短軸49cm, 深さ25cmであった。底面は南東にゆるやかに傾斜しており、縦断面形は舟形を呈し、横断面形も舟形を呈する。

土壙内には黒褐色土が詰っており、遺存しにくい有機物とともに遺体を葬った埋葬壙とみられる。遺物は埋葬壙内壁面から土器片2片が出土した。土器片は細片で形態などは不明である。胎土は荒く、焼成は不良である。埋葬壙のつくられた時期はS F 1と相近い時期と考えられるので、弥生時代後期中葉を考えたい。(岩井 克允)

(2) 古墳時代の遺構

S F 3 (実測図第35図5, 図版34・A)

S F 3は山郷山の中央の平坦部に造られている埋葬壙である。地山を掘りさげて土壙をつくり木棺を直葬している。埋葬壙は主軸を北西から南東におき、平面形は隅丸長方形を呈する。規模は長さ176cm, 幅67cm, 深さ17cmである。遺物は人骨細片と土器片である。人骨細片は埋葬壙底面中央から北側にかけて、土器片は土師器片で埋葬壙南側の底面から出土している。土師器片の器形ははっきりしないが坏であろう。胎土は細かく、焼成は良好である。埋葬壙のつくられた時期は古墳時代中期を考えたい。

S F 4 (実測図第35図6, 図版34・A)

S F 4は山郷山の最頂部なかほどの平坦面につくられている。主軸を北西から南東におき、平面形は隅丸長方形を呈する。規模は長さ170cm, 幅56cm, 深さ14cmである。埋葬壙には黒色有機土が詰っていたことから木棺を直葬したものとみられる。遺物は土師器が土壙底面なかほどの西壁沿から出土している。土器片は3片でいずれも細片である。胎土は細く、焼成は良好である。器形は細片であり、はっきりしないが坏であろう。埋葬壙は規模から成人埋葬のもので、つくられた時期は古墳時代中期を考えたい。

S F 5 (実測図第36図7, 図版34・B)

S F 40の南側2.9mほど離れた山郷山南東裾部につくられている埋葬壙である。地山を掘りさげ土壙をつくり、角礫をおき木棺を直葬している。主軸をほぼ東西におき、平面形は隅丸長方形を呈する。規模は長さ299cm, 幅81cm, 深さ11cmである。遺物は土壙内の中央部北壁下の底面から出土した土師器片である。土師器片は小片で、胎土は細く、焼成は良好である。器肌は赤味を帯びた黄褐色を呈する。器形は小片であるが、恐らく坏であろう。埋葬壙がつくられた時期はS F 4と相近い時期と考え古墳時代中期に求めたい。

副室は主体部の東側に接してつくられている。主軸を東西におき、平面形は隅丸長方形を呈する。規模は長さ121cm、幅70cm、深さ14cmである。遺物は土壙の中央底面から土師器片が出土している。土師器片は小片であり器形はわからない。土坑はSF5と主軸を同じくしており、SF5に附属する土坑で、副葬品の埋納に使用しているかもしれない。土壙のつくられた時期はSF5と同じく、古墳時代中期と考える。

S F 6（実測図第36図8，図版第34・B）

SF5の東側45cmほど離れてつくられた埋葬壙である。地山を掘りさげて土壙をつくり木棺を直葬している。埋葬壙は主軸をほぼ東西におき、平面形は隅丸長方形を呈する。規模は長さ307cm、幅106cm、深さ11cmである。遺物は土師器の細片が土壙底面の北壁沿いと南壁沿いから1片ずつ出土している。土師器片は細片で器形ははっきりしないが、壺型土器と坏であろう。土師器片の胎土は細かく、焼成は良好である。器肌は赤味を帯びた黄褐色である。埋葬壙のつくられた時期は遺物から古墳時代の中期を考えたい。

(3) 中世以後の遺構

S F 7（実測図第36図9，図版34・A）

SF7はSF3と重複しており、さご山の頂上の平坦部中央やや東側に造られている。主軸を北西から南東におき、平面形は隅丸長方形を呈する。規模は長軸129cm、短軸56cm、深さ18cmである。底面はほぼ平坦であり、縦断面形は舟形を呈し、横断面形も舟形を呈する。

遺構には暗褐色有機土が詰っていたことから、この土壙は遺存しにくい有機物を用いて直葬した埋葬壙である。埋葬壙の内部からは人骨や副葬品は何も出土しなかった。

埋葬壙は地山を浅く掘り込んで土壙を造り、遺存しにくい有機物を用いた直葬とみられる。埋葬壙の造られた時期は周囲のSF8、SF9などの埋葬壙と相近い時期が考えられるので、中世から近世までを考えたい。そして、この埋葬壙には副葬品が何も無かったことから、被葬者はおそらく庶民層の幼児であろう。

S F 8（実測図第36図10，図版34・A）

SF8はSF3の南西10cmほど離れた、さご山の頂上の平坦部中央やや東側に造られている。主軸を北西から南東におき、平面形は隅丸長方形を呈する。土壙の内壁に礫が周らされていた。規模は長軸105cm、短軸69cm、深さ5cmである。底面はほぼ平坦であり、縦断面形は舟形を呈し、横断面形も舟形を呈する。

遺構には暗褐色土が詰っていたことから、この土壙は遺存しにくい有機物を用いて直葬した埋葬壙である。埋葬壙の内部からは人骨や副葬品は何も出土しなかった。

埋葬壙は地山を浅く掘り込んで土壙を造り、遺存しにくい有機物を用いた直葬とみられる。埋葬壙の造られた時期はSF7、SF9などの埋葬壙と相近い時期が考えられるので、中世から近世までを考えたい。そして、この埋葬壙には副葬品が何も無かったことから、被葬者はおそらく庶民層の幼児であろう。

S F 9 (実測図第36図11, 図版34・A)

S F 9はS F 10の北側20cmほど離れた、さご山の頂上の平坦部南東側に造られている。主軸を北西から南東におき、平面形は隅丸長方形を呈する。土壌内北側に礫が置かれていた。規模は長軸145cm, 短軸76cm, 深さ18cmである。底面はほぼ平坦であり、縦断面形は舟形を呈し、横断面形も舟形を呈する。

遺構には暗褐色土が詰っていたことから、この土壌は遺存しにくい有機物を用いて直葬した埋葬墳である。埋葬墳の内部からは人骨や副葬品は何も出土しなかった。

埋葬墳は地山を浅く掘り込んで土壌を造り、遺存しにくい有機物を用いた直葬とみられ、埋葬墳の造られた時期はS F 7, S F 8などの埋葬墳と相近い時期が考えられるので、中世から近世までを考えたい。そして、この埋葬墳には副葬品が何も無かったことから、被葬者はおそらく庶民層の幼児であろう。

S F 10 (実測図第37図12, 図版34・A)

S F 10はS F 9の南側20cmほど離れた、さご山の頂上の平坦部南側に造られている。主軸を北東から南西におき、平面形は楕円形を呈する。土壌内西側壁に礫が置かれていた。規模は長軸125cm, 短軸85cm, 深さ17cmである。底面はほぼ平坦であり、縦断面形は皿形を呈し、横断面形も皿形を呈する。

遺構には暗褐色土が詰っていたことから、この土壌は遺存しにくい有機物を用いて直葬した埋葬墳である。埋葬墳の内部からは人骨や副葬品は何も出土しなかった。

埋葬墳は地山を浅く掘り込んで土壌を造り、遺存しにくい有機物を用いた直葬とみられ、埋葬墳の造られた時期はS F 8, S F 9などの埋葬墳と相近い時期が考えられるので、中世から近世までと考えたい。そして、この埋葬墳には副葬品が何も無かったことから、被葬者はおそらく庶民層の幼児であろう。

S F 11 (実測図第37図13, 図版35・A)

S F 11はS F 4の北側1.2mほど離れた、平坦部中央やや北側に造られている。主軸を北東から南西におき、平面形は楕円形を呈する。土壌上端周囲には礫が置かれていた。規模は長軸110cm, 短軸65cm, 深さ21cmである。底面はほぼ平坦であり、縦断面形は舟形を呈し、横断面形は皿形を呈する。

遺構には暗褐色土が詰っていたことから、この土壌は遺存しにくい有機物を用いて直葬した埋葬墳である。埋葬墳の内部からは人骨や副葬品は何も出土しなかった。

埋葬墳は地山を浅く掘り込んで土壌を造り、遺存しにくい有機物を用いた直葬とみられ、埋葬墳の造られた時期はS F 7, S F 8などの埋葬墳と相近い時期が考えられるので中世から近世までを考えたい。そして、この埋葬墳には副葬品が何も無かったことから、被葬者はおそらく庶民層の幼児であろう。

S F 12 (実測図第37図14, 図版35・B)

S F 12はS F 11の西北側2.7mほど離れた、さご山の頂上の平坦部北西側に造られている。主軸を西側から東側におき、平面形は楕円形を呈する。規模は長軸63cm, 短軸52cm, 深さ22cm

である。底面はほぼ平坦であり、縦断面形は皿形を呈し、横断面形も皿形を呈する。

遺構には暗褐色土が詰っていたことから、この土壌は遺存しにくい有機物を用いて直葬した埋葬墳である。埋葬墳の内部からは人骨や副葬品は何も出土しなかった。

埋葬墳は地山を浅く掘り込んで土壌を造り、遺存しにくい有機物を用いた直葬とみられ、埋葬墳の造られた時期はS F 11、S F 13などの埋葬墳と相近い時期が考えられるので、中世から近世までを考えたい。そして、この埋葬墳には副葬品が何も無かったことから、被葬者はおそらく庶民層の幼児であろう。(野口 英生)

S F 13 (実測図第37図15, 図版36・A)

S F 13はS F 14の北西側1.2 mほど離れた、さご山の頂上の平坦部北側に造られている。主軸を北西から南東におき、平面形は楕円形を呈する。土壌周囲に礫が周らされていた。規模は長軸51cm、短軸25cm、深さ14cmである。底面はほぼ平坦であり、縦断面形は舟形を呈し、横断面形も舟形を呈する。

遺構には暗褐色土が詰っていたことから、この土壌は遺存しにくい有機物を用いて直葬した埋葬墳である。埋葬墳の内部からは人骨や副葬品は何も出土しなかった。

埋葬墳は地山を浅く掘り込んで土壌を造り、遺存しにくい有機物を用いた直葬とみられ、埋葬墳の造られた時期はS F 11、S F 14などの埋葬墳と相近い時期が考えられるので、中世から近世までを考えたい。そして、この埋葬墳には副葬品が何も無かったことから、被葬者はおそらく庶民層の幼児であろう。

S F 14 (実測図第37図16, 図版36・B)

S F 14はS F 11の北側1.1 mほど離れた、さご山の東側傾斜面に造られている。主軸を北東から南西におき、平面形は楕円形を呈する。土壌周辺20cmのところ礫が敷かれていた。規模は長軸70cm、短軸46cm、深さ8 cmである。底面は北東側3°傾斜しており、縦断面形は舟形を呈し、横断面形も舟形を呈する。

遺構には暗褐色土が詰っていたことから、この土壌は遺存しにくい有機物を用いて直葬した埋葬墳である。埋葬墳の内部からは人骨や副葬品は何も出土しなかった。

埋葬墳は地山を浅く掘り込んで土壌を造り、遺存しにくい有機物を用いた直葬とみられ、埋葬墳の造られた時期はS F 11、S F 13などの埋葬墳と相近い時期が考えられるので、中世から近世までを考えたい。そして、この埋葬墳には副葬品が何も無かったことから、被葬者はおそらく庶民層の幼児であろう。

S F 15 (実測図第37図17, 図版37・A)

S F 15はS F 16の北側10cmほど離れた、さご山の頂上の平坦部北東側に造られている。主軸を北から南におき、平面形は隅丸長方形を呈する。規模は長軸108cm、短軸36cm、深さ12cmである。底面はほぼ平坦であり、縦断面形は舟形を呈し、横断面形も舟形を呈する。

遺構には暗褐色土が詰っていたことから、この土壌は遺存しにくい有機物を用いて直葬した埋葬墳である。埋葬墳の内部からは人骨や副葬品は何も出土しなかった。

埋葬墳は地山を浅く掘り込んで土壌を造り、遺存しにくい有機物を用いた直葬とみられ、埋

葬壇の造られた時期はS F 11, S F 16などの埋葬壇と近い時期が考えられるので、中世から近世までを考えたい。そして、この埋葬壇には副葬品が何も無かったことから、被葬者はおそらく庶民層の幼児であろう。

S F 16 (実測図第38図18, 図版37・A)

S F 16はS F 15の南側10cmほど離れた、さご山の頂上の平坦部北東側に造られている。主軸を北東から南西におき、平面形は隅丸長方形を呈する。規模は長軸71cm, 短軸42cm, 深さ6cmである。底面はほぼ平坦であり、縦断面形は舟形を呈し、横断面形を呈する。

遺構には暗褐色土が詰っていたことから、この土壌は遺存しにくい有機物を用いて直葬した埋葬壇である。埋葬壇の内部からは人骨や副葬品は何も出土しなかった。

埋葬壇は地山を浅く掘り込んで土壌を造り、遺存しにくい有機物を用いた直葬とみられ、埋葬壇の造られた時期はS F 15, S F 17などの埋葬壇と近い時期が考えられるので、中世から近世までを考えたい。そして、この埋葬壇には副葬品が何も無かったことから、被葬者はおそらく庶民層の幼児であろう。

S F 17 (実測図第38図19, 図版37・B)

S F 17はS F 18の北西50cmほど離れた、さご山の東側傾斜面に造られている。主軸を北東から南西におき、平面形は楕円形を呈する。土壌内上端から30cmのところには礫が周らされていた。規模は長軸111cm, 短軸74cm, 深さ6cmである。底面は南東側4°傾斜しており、縦断面形は皿形を呈する。

遺構には暗褐色土が詰っていたことから、この土壌は遺存しにくい有機物を用いて直葬した埋葬壇である。埋葬壇の内部からはカワラケ片が1片出土した。カワラケは小片であり器形は明らかではないがおそらく坏であろう。胎土は細かく、焼成は良好である。

埋葬壇は地山を浅く掘り込んで土壌を造り、遺存しにくい有機物を用いた直葬とみられ、埋葬壇の造られた時期はS F 18, S F 20などの埋葬壇と近い時期が考えられるので、中世から近世までを考えたい。そして、この埋葬壇には副葬品がカワラケ1片だけ出土したのみであり、被葬者はおそらく庶民層の幼児であろう。

S F 18 (実測図第38図20, 図版38・A)

S F 18はS F 19の北西側50cmほど離れた、さご山の東側傾斜面に造られている。主軸を北東から南西におき、平面形は楕円形を呈する。土壌内北側に主に礫が敷かれていた。規模は長軸89cm, 短軸60cm, 深さ5cmである。底面は南東側3°傾斜しており、縦断面形は舟形を呈し、横断面形は皿形を呈する。

遺構には暗褐色土が詰っていたことから、この土壌は遺存しにくい有機物を用いて直葬した埋葬壇である。埋葬壇の内部からは人骨や副葬品は何も出土しなかった。

埋葬壇は地山を浅く掘り込んで土壌を造り、遺存しにくい有機物を用いた直葬とみられ、埋葬壇の造られた時期はS F 17, S F 19などの埋葬壇と近い時期が考えられるので、中世から近世までを考えたい。そして、この埋葬壇には副葬品が何も無かったことから、被葬者はおそらく庶民層の幼児であろう。

S F 19 (実測図第38図21, 図版38・B)

S F 19はS F 18の南東側50cmほど離れた、さご山の東側傾斜面に造られている。主軸を北東から南西におき、平面形は楕円形を呈する。土壌の上端から20cmのところ礫が周らされていた。規模は長軸105cm, 短軸69cm, 深さ10cmであった。底面はほぼ平坦であり、縦断面形は皿形を呈し、横断面形も皿形を呈する。

遺構には暗褐色土が詰っていたことから、この土壌は遺存しにくい有機物を用いて直葬した埋葬墳である。埋葬墳の内部からは人骨や副葬品は何も出土しなかった。

埋葬墳は地山を浅く掘り込んで土壌を造り、遺存しにくい有機物を用いた直葬とみられ、埋葬墳の造られた時期はS F 18, S F 21などの埋葬墳と相近い時期が考えられるので、中世から近世までを考えたい。そして、この埋葬墳には副葬品が何も無かったことから、被葬者はおそらく庶民層の幼児であろう。(中村 隆行)

S F 20 (実測図第38図22)

S F 20はS F 21の北西側30cmほど離れた、さご山の東傾斜面に造られている。主軸を北東から南西におき、平面形は楕円形を呈する。土壌上端に礫が周らされていた。規模は長軸79cm, 短軸59cm, 深さ9cmである。底面は北東側8°傾斜しており、縦断面形は皿形を呈し、横断面形も皿形を呈する。

遺構には暗褐色土が詰っていたことから、この土壌は遺存しにくい有機物を用いて直葬した埋葬墳である。埋葬墳の内部からは人骨や副葬品は何も出土しなかった。

埋葬墳は地山を浅く掘り込んで土壌を造り、遺存しにくい有機物を用いた直葬とみられ、埋葬墳の造られた時期はS F 21, S F 23などの埋葬墳と相近い時期が考えられるので、中世から近世までを考えたい。そして、この埋葬墳には副葬品が何も無かったことから、被葬者はおそらく庶民層の幼児であろう。

S F 21 (実測図第38図23, 図版39・A)

S F 21はS F 20の南東側30cmほど離れた、さご山の東傾斜面に造られている。主軸を東から西におき、平面形は隅丸長方形を呈する。土壌上端に礫が周らされていた。規模は長軸100cm, 短軸62cm, 深さ17cmである。底面はほぼ平坦であり、縦断面形は舟形を呈し、横断面形は皿形を呈する。

遺構には暗褐色土が詰っていたことから、この土壌は遺存しにくい有機物を用いて直葬した埋葬墳である。埋葬墳の内部からはカワラケ片が2片出土した。カワラケは小片であり器形は明らかではないがおそらく坏であろう。胎土は細かく、焼成は良好である。

埋葬墳は地山を浅く掘り込んで土壌を造り、遺存しにくい有機物を用いた直葬とみられ、埋葬墳の造られた時期はS F 20, S F 24などの埋葬墳と相近い時期が考えられるので、中世から近世までを考えたい。そして、この埋葬墳には副葬品がカワラケ2片だけ出土したのみであり、被葬者はおそらく庶民層の幼児であろう。

S F 22 (実測図第39図24, 図版39・A)

S F 22はS F 2の西側20cmほど離れた、さご山の東傾斜面に造られている。主軸を北西から

南東におき、平面形は楕円形を呈する。土壌底部から壁にかけて数個の礫があった。規模は長軸66cm、短軸48cm、深さ12cmである。底面はほぼ平坦であり、縦断面形は皿形を呈し、横断面形は舟形を呈する。

遺構には暗褐色土が詰っていたことから、この土壌は遺存しにくい有機物を用いて直葬した埋葬墳である。埋葬墳の内部からは人骨や副葬品は何も出土しなかった。

埋葬墳は地山を浅く掘り込んで土壌を造り、遺存しにくい有機物を用いた直葬とみられ、埋葬墳の造られた時期はS F 23、S F 26などの埋葬墳と相近い時期が考えられるので、中世から近世までを考えたい。そして、この埋葬墳には副葬品が何も無かったことから、被葬者はおそらく庶民層の幼児であろう。

S F 23（実測図第39図25，図版39・B）

S F 23はS F 2の南東側10cmほど離れた、さご山の東傾斜面に造られている。主軸を北東から南西におき、平面形は楕円形を呈する。土壌内には数個の礫があった。規模は長軸46cm、短軸32cm、深さ16cmである。底面はほぼ平坦であり、縦断面形は皿形を呈し、横断面形も皿形を呈する。

遺構には暗褐色土が詰っていたことから、この土壌は遺存しにくい有機物を用いて直葬した埋葬墳である。埋葬墳の内部からは人骨や副葬品は何も出土しなかった。

埋葬墳は地山を浅く掘り込んで土壌を造り、遺存しにくい有機物を用いた直葬とみられ、埋葬墳の造られた時期はS F 24、S F 25などの埋葬墳と相近い時期が考えられるので、中世から近世までを考えたい。そして、この埋葬墳には副葬品が何も無かったことから、被葬者はおそらく庶民層の幼児であろう。

S F 24（実測図第39図26，図版39・B）

S F 24はS F 21の北側40cmほど離れた、さご山の東傾斜面に造られている。主軸を東から西におき、平面形は楕円形を呈する。規模は長軸45cm、短軸29cm、深さ8cmである。底面はほぼ平坦であり、縦断面形は皿形を呈し、横断面形も皿形を呈する。

遺構には暗褐色土が詰っていたことから、この土壌は遺存しにくい有機物を用いて直葬した埋葬墳である。埋葬墳の内部からは人骨や副葬品は何も出土しなかった。

埋葬墳は地山を浅く掘り込んで土壌を造り、遺存しにくい有機物を用いた直葬とみられ、埋葬墳の造られた時期はS F 21、S F 23などの埋葬墳と相近い時期が考えられるので、中世から近世までを考えたい。そして、この埋葬墳には副葬品が何も無かったことから、被葬者はおそらく庶民層の幼児であろう。

S F 25（実測図第39図27，図版39・B）

S F 25はS F 23の東側20cmほど離れた、さご山の東傾斜面に造られている。主軸を北東から南西におき、平面形は楕円形を呈する。土壌北西側に礫が置かれていた。規模は長軸63cm、短軸43cm、深さ10cmである。底面はほぼ平坦であり、縦断面形は皿形を呈し、横断面形も皿形を呈する。

遺構には暗褐色土が詰っていたことから、この土壌は遺存しにくい有機物を用いて直葬した

埋葬墳である。埋葬墳の内部からはカワラケの小片2片出土した。カワラケは小片であり器形は明らかではないが、おそらく坏であろう。胎土は細かく、焼成は良好である。

埋葬墳は地山を浅く掘り込んで土壌を造り、遺存しにくい有機物を用いた直葬とみられ、埋葬墳の造られた時期はS F 23, S F 24などの埋葬墳と相近い時期が考えられるので、中世から近世までを考えたい。そして、この埋葬墳には副葬品がカワラケ2片だけ出土したのみであり、被葬者はおそらく庶民層の幼児であろう。

S F 26 (実測図第39図28, 図版39・B)

S F 26はS F 1の北西側35cmほど離れた、さご山の東傾斜面に造られている。主軸を東から西におき、平面形は楕円形を呈する。土壌内壁に数個の礫が置かれていた。規模は長軸45cm, 短軸35cm, 深さ14cmである。底面は東側30°傾斜しており、縦断面形は皿形を呈し、横断面形も皿形を呈する。

遺構には暗褐色土が詰っていたことから、この土壌は遺存しにくい有機物を用いて直葬した埋葬墳である。埋葬墳の内部からは人骨や副葬品は何も出土しなかった。

埋葬墳は地山を浅く掘り込んで土壌を造り、遺存しにくい有機物を用いた直葬とみられ、埋葬墳の造られた時期はS F 22, S F 27などの埋葬墳と相近い時期が考えられるので、中世から近世までを考えたい。そして、この埋葬墳には副葬品が何も無かったことから、被葬者はおそらく庶民層の幼児であろう。 (松本 行弘)

S F 27 (実測図第39図29, 図版39・B)

S F 27はS F 1の東側35cmほど離れた、東側傾斜面に造られている。主軸を北東から南西におき、平面形は楕円形を呈する。土壌内の側壁と周囲の地山面に礫が周らされていた。規模は長軸65cm, 短軸60cm, 深さ13cmである。底面は北東側に19°傾斜しており、縦断面形は皿形を呈し、横断面形も皿形を呈する。

遺構には暗褐色有機土が詰っていたことから、この土壌は遺存しにくい有機物を用いて直葬した埋葬墳である。埋葬墳の内部からは人骨や副葬品は何も出土しなかった。

埋葬墳は地山を浅く掘り込んで土壌を造り、遺存しにくい有機物を用いた直葬とみられ、埋葬墳の造られた時期は周囲のS F 25, S F 28などの埋葬墳と相近い時期が考えられるので、中世から近世までを考えたい。そして、この埋葬墳には副葬品が何も無かったことから、被葬者はおそらく庶民層の幼児であろう。

S F 28 (実測図版第39図30)

S F 28はS F 25の東側40cmほど離れた、東側傾斜面に造られている。主軸を北東から南西におき、平面形は円形を呈する。土壌とその周辺全体に礫が周らされていた。規模は長軸63cm, 短軸60cm, 深さ17cmである。底面は北西側に10°傾斜しており、縦断面形は皿形を呈し、横断面形も皿形を呈する。

遺構には暗褐色有機土が詰っていたことから、この土壌は遺存しにくい有機物を用いて直葬した埋葬墳である。埋葬墳の内部からは人骨や副葬品は何も出土しなかった。

埋葬墳は地山を浅く掘り込んで土壌を造り、遺存しにくい有機物を用いた直葬とみられ、埋

葬壇の造られた時期は周囲のS F 25, S F 27などの埋葬壇と相近い時期が考えられるので、中世から近世までを考えたい。そして、この埋葬壇には副葬品が何も無かったことから、被葬者はおそらく庶民層の幼児であろう。

S F 29 (実測図第40図31, 図版40・B)

S F 29はS F 10の東側3.6 mほど離れた、南側傾斜面に造られている。主軸を北西から南東におき、平面形は楕円形を呈する。規模は長軸69cm, 短軸50cm, 深さ7 cmである。底面はほぼ平坦であり、縦断面形は皿形を呈し、横断面形も皿形を呈する。

遺構には暗褐色有機土が詰っていたことから、この土壌は遺存しにくい有機物を用いて直葬した埋葬壇である。埋葬壇の内部からはカワラケの小片が1個出土した。カワラケは小片であり器形は明らかではないがおそらく坏であろう。胎土は細かく、焼成は良好である。

埋葬壇は地山を浅く掘り込んで土壌を造り、遺存しにくい有機物を用いた直葬とみられ、埋葬壇の造られた時期は周囲のS F 10, S F 18などの埋葬壇と相近い時期が考えられるので、中世から近世までを考えたい。そして、この埋葬壇には副葬品が小片1個が出土したのみであり、おそらく被葬者は庶民層の幼児であろう。

S F 30 (実測図第40図32, 図版41・A)

S F 30はS F 31の東側1.5 mほど離れた、南側傾斜面に造られている。主軸を北西から南東におき、平面形は楕円形を呈する。土壌内上端に礫が周らされていた。規模は長軸85cm, 短軸49cm, 深さ13cmである。底面はほぼ平坦であり、縦断面形は皿形を呈し、横断面形も皿形を呈する。

遺構には暗褐色有機土が詰っていたことから、この土壌は遺存しにくい有機物を用いて直葬した埋葬壇である。埋葬壇の内部からは人骨や副葬品は何も出土しなかった。

埋葬壇は地山を浅く掘り込んで土壌を造り、遺存しにくい有機物を用いた直葬とみられ、埋葬壇の造られた時期は周囲のS F 31, S F 32などの埋葬壇と相近い時期が考えられるので、中世から近世までを考えたい。そして、この埋葬壇には副葬品が何も無かったことから、被葬者はおそらく庄民層の幼児であろう。

S F 31 (実測図第40図33, 図版41・B)

S F 31はS F 10の南側50cmほど離れた、南側傾斜面に造られている。主軸を北東から南西におき、平面形は隅丸長方形を呈する。規模は長軸154 cm, 短軸46cm, 深さ11cmである。底面は南東側に8°傾斜しており、縦断面形は舟形を呈し、横断面形も舟形を呈する。

遺構には暗褐色有機土が詰っていたことから、この土壌は遺存しにくい有機物を用いて直葬した埋葬壇である。埋葬壇の内部からは人骨や副葬品は何も出土しなかった。

埋葬壇は地山を浅く掘り込んで土壌を造り、遺存しにくい有機物を用いた直葬とみられ、埋葬壇の造られた時期は周囲のS F 10, S F 30などの埋葬壇と相近い時期が考えられるので、中世から近世までを考えたい。そして、この埋葬壇には副葬品が何も無かったことから、被葬者はおそらく庶民層の成人に近い者であろう。

S F 32 (実測図第40図34, 図版42・A)

S F 32はS F 33の東側55cmほど離れた、西側傾斜面に造られている。主軸を北東から南西におき、平面形は隅丸長方形を呈する。規模は長軸140cm, 短軸63cm, 深さ11cmである。底面は南西側に7°傾斜しており、縦断面形は舟形を呈し、横断面形も舟形を呈する。

遺構には暗褐色有機土が詰っていたことから、この土壌は遺存しにくい有機物を用いて直葬した埋葬墳である。埋葬墳の内部からは人骨や副葬品は何も出土しなかった。

埋葬墳は地山を浅く掘り込んで土壌を造り、遺存しにくい有機物を用いた直葬とみられ、埋葬墳の造られた時期は周囲のS F 33などの埋葬墳と相近い時期が考えられるので、中世から近世までを考えた。そして、この埋葬墳には副葬品が何も無かったことから、被葬者はおそらく庶民層の幼児であろう。

S F 33 (実測図第40図35, 図版42・A)

S F 33はS F 32の西側55cmほど離れた、西側傾斜面に造られている。主軸を北西から南東におき、平面形は隅丸長方形を呈する。規模は長軸148cm, 短軸80cm, 深さ22cmである。底面はほぼ平坦であり、縦断面形は舟形を呈し、横断面形も舟形を呈する。

遺構には暗褐色有機土が詰っていたことから、この土壌は遺存しにくい有機物を用いて直葬した埋葬墳である。埋葬墳の内部からは人骨や副葬品は何も出土しなかった。

埋葬墳は地山を浅く掘り込んで土壌を造り、遺存しにくい有機物を用いた直葬とみられ、埋葬墳の造られた時期は周囲のS F 32などの埋葬墳と相近い時期が考えられるので、中世から近世までを考えた。そして、この埋葬墳には副葬品が何も無かったことから、被葬者はおそらく庶民層の成人に近い者であろう。

S F 34 (実測図第40図36, 図版42・B)

S F 34はS F 31の南側1mほど離れた、南側傾斜面に造られている。主軸を北西から南東におき、平面形は隅丸長方形を呈する。土壌内上端10cmほどのところに礫が周らされていた。規模は長軸62cm, 短軸37cm, 深さ5cmである。縦断面形は舟形を呈し横断面形も舟形を呈する。

遺構には暗褐色有機土が詰っていたことから、この土壌は遺存しにくい有機物を用いて直葬した埋葬墳である。埋葬墳の内部からは人骨や副葬品は何も出土しなかった。

埋葬墳は地山を浅く掘り込んで土壌を造り、遺存しにくい有機物を用いた直葬とみられ、埋葬墳の造られた時期は周囲のS F 31, S F 35などの埋葬墳と相近い時期が考えられるので、中世から近世までを考えた。そして、この埋葬墳には副葬品が何も無かったことから、被葬者はおそらく庶民層の幼児であろう。

(岩井 和志)

S F 35 (実測図第41図37, 図版43・A)

S F 35はS F 36の西側130cmほど離れた、南側傾斜面に造られている。主軸を東から西におき、平面形は楕円形を呈する。土壌内上端に数個の礫が置かれていた。規模は長軸59cm, 短軸48cm, 深さ20cmである。底面はほぼ平坦であり、縦断面形は舟形を呈し、横断面形も舟形を呈する。

遺構には暗褐色有機土が詰っていたことから、この土壌は遺存しにくい有機物を用いて直葬

した埋葬墳である。埋葬墳の内部からは人骨や副葬品は何も出土しなかった。

埋葬墳は地山を浅く掘り込んで土壌を造り、遺存しにくい有機物を用いた直葬とみられ、埋葬墳の造られた時期は周囲のS F 36、S F 34などの埋葬墳と近い時期が考えられるので、中世から近世までを考えた。そして、この埋葬墳には副葬品が何も無かったことから、被葬者はおそらく庶民層の幼児であろう。

S F 36 (実測図第41図38, 図版43・B)

S F 36はS F 37の西側80cmほど離れた、南側傾斜面に造られている。主軸を北東から南西におき、平面形は隅丸長方形を呈する。土壌内上端に礫が置かれていた。規模は長軸78cm, 短軸35cm, 深さ11cmである。底面は南西側に5°傾斜しており、縦断面形は皿形を呈し、横断面形も皿形を呈する。

遺構には暗褐色有機土が詰っていたことから、この土壌は遺存しにくい有機物を用いて直葬した埋葬墳である。埋葬墳の内部からは人骨や副葬品は何も出土しなかった。

埋葬墳は地山を浅く掘り込んで土壌を造り、遺存しにくい有機物を用いた直葬とみられ、埋葬墳の造られた時期は周囲のS F 35、S F 37などの埋葬墳と近い時期が考えられるので、中世から近世までを考えた。そして、この埋葬墳には副葬品が何も無かったことから、被葬者はおそらく庶民層の幼児であろう。

S F 37 (実測図第41図39)

S F 37はS F 42の西側36cmほど離れた、南側傾斜面に造られている。主軸を北西から南東におき、平面形は円形を呈する。土壌内東側の壁から周辺にかけて礫が置かれていた。規模は長軸50cm, 短軸46cm, 深さ10cmである。底面はほぼ平坦であり、縦断面形は皿形を呈し、横断面形も皿形を呈する。

遺構には暗褐色有機土が詰っていたことから、この土壌は遺存しにくい有機物を用いて直葬した埋葬墳である。埋葬墳の内部からは人骨や副葬品は何も出土しなかった。

埋葬墳は地山を浅く掘り込んで土壌を造り、遺存しにくい有機物を用いた直葬とみられ、埋葬墳の造られた時期は周囲のS F 36、S F 42などの埋葬墳と近い時期が考えられるので、中世から近世までを考えた。そして、この埋葬墳には副葬品が何も無かったことから、被葬者はおそらく庶民層の幼児であろう。

S F 38 (実測図第41図40, 図版44・A)

S F 38はS F 30の南側85cmほど離れた、南側傾斜面に造られている。主軸を北西から南北におき、平面形は隅丸長方形を呈する。土壌内の壁から周辺にかけて礫が周らされていた。規模は長軸88cm, 短軸31cm, 深さ9cmである。底面は南東側に5°傾斜しており、縦断面形は皿形を呈し、横断面形も皿形を呈する。

遺構には暗褐色有機土が詰っていたことから、この土壌は遺存しにくい有機物を用いて直葬した埋葬墳である。埋葬墳の内部からは人骨や副葬品は何も出土しなかった。

埋葬墳は地山を浅く掘り込んで土壌を造り、遺存しにくい有機物を用いた直葬とみられ、埋葬墳の造られた時期は周囲のS F 30、S F 37などの埋葬墳と近い時期が考えられるので、中

世から近世までを考えたい。そして、この埋葬壙には副葬品が何も無かったことから、被葬者はおそらく庶民層の幼児であろう。

S F 39（実測図第41図41）

S F 39はS F 38の東側150cmほど離れた、南側傾斜面に造られている。主軸を北東から南西におき、平面形は楕円形を呈する。規模は長軸95cm、短軸43cm、深さ10cmである。底面は南西側6°傾斜しており、縦断面形は舟形を呈し、横断面形も舟形を呈する。

遺構には暗褐色有機土が詰っていたことから、この土壌は遺存しにくい有機物を用いて直葬した埋葬壙である。埋葬壙の内部からは人骨や副葬品は何も出土しなかった。

埋葬壙は地山を浅く掘り込んで土壌を造り、遺存しにくい有機物を用いた直葬とみられ、埋葬壙の造られた時期は周囲のS F 30、S F 38などの埋葬壙と相近い時期が考えられるので、中世から近世までと考えたい。そして、この埋葬壙には副葬品が何も無かったことから、被葬者はおそらく庶民層の幼児であろう。

S F 40（実測図第41図42）

S F 40はS F 5の北側2.8mほど離れた、南側の傾斜面に造られている。主軸を北東から南西におき、平面形は隅丸長方形を呈する。規模は長軸151cm、短軸68cm、深さ45cmである。底面はほぼ平坦であり、縦断面形は舟形を呈し、横断面形も舟形を呈する。

遺構には暗褐色有機土が詰っていたことから、この土壌は遺存しにくい有機物を用いて直葬した埋葬壙である。埋葬壙の内部からは人骨や副葬品は何も出土しなかった。

埋葬壙は地山を浅く掘り込んで土壌を造り、遺存しにくい有機物を用いた直葬とみられ、埋葬壙の造られた時期は周囲のS F 5、S F 39などの埋葬壙と相近い時期が考えられるので、中世から近世までを考えたい。そして、この埋葬壙には副葬品が何も無かったことから、被葬者はおそらく庶民層の成人に近い者であろう。

S F 41（実測図第42図43、図版44・B）

S F 41はS F 42の東側70cmほど離れた、南側傾斜面に造られている。主軸を北東から南西におき、平面形は楕円形を呈する。土壌周辺に礫が周らされていた。規模は、長軸54cm、短軸30cm、深さ8cmである。底面はほぼ平坦であり、縦断面形は舟形を呈し、横断面形も舟形を呈する。

遺構には暗褐色有機土が詰っていたことから、この土壌も遺存しにくい有機物を用いて直葬した埋葬壙である。埋葬壙の内部からは人骨や副葬品は何も出土しなかった。

埋葬壙は地山を浅く掘り込んで土壌を造り、遺存しにくい有機物を用いた直葬とみられ、埋葬壙の造られた時期は周囲のS F 39、S F 42などの埋葬壙と相近い時期が考えられるので、中世から近世までを考えたい。そして、この埋葬壙には副葬品が何も無かったことから、被葬者はおそらく庶民層の幼児であろう。

S F 42（実測図第42図44、図版45・A）

S F 42はS F 37の東側55cmほど離れた、南側傾斜面に造られている。主軸を北西から南東におき、平面形は楕円形を呈する。土壌内の壁から周辺にかけて礫が置かれていた。規模は長軸

44cm, 短軸32cm, 深さ9cmである。底面は南東側に5°傾斜しており, 縦断面形は皿形を呈し, 横断面形も皿形を呈する。

遺構には暗褐色有機土が詰っていたことから, この土壌は遺存しにくい有機物を用いて直葬した埋葬壇である。埋葬壇の内部からは人骨や副葬品は何も出土しなかった。

埋葬壇は地山を浅く掘り込んで土壌を造り, 遺存しにくい有機物を用いた直葬とみられ, 埋葬壇の造られた時期は周囲のS F 37, S F 41などの埋葬壇と相近い時期が考えられるので, 中世から近世までを考えたい。そして, この被葬者はおそらく庶民層の幼児であろう。

S F 43 (実測図第42図45)

S F 43はS F 37の南側55cmほど離れた, 南側傾斜面に造られている。主軸を東から西におき, 平面形は隅丸長方形を呈する。土壌内上端周辺に礫が周らされていた。規模は長軸90cm, 短軸53cm, 深さ6cmである。底面はほぼ平坦であり, 縦断面形は皿形を呈し, 横断面形も皿形を呈する。

遺構には暗褐色有機土が詰っていたことから, この土壌は遺存しにくい有機物を用いて直葬した埋葬壇である。埋葬壇の内部からは人骨や副葬品は何も出土しなかった。

埋葬壇は地山を浅く掘り込んで土壌を造り, 遺存しにくい有機物を用いた直葬とみられ, 埋葬壇の造られた時期は周囲のS F 37, S F 42などの埋葬壇と相近い時期が考えられるので, 中世から近世までを考えたい。そして, この埋葬壇には副葬品が何も無かったことから, 被葬者はおそらく庶民層の幼児であろう。

S F 44 (実測図第42図46)

S F 44はS F 35の南西150cmほど離れた, 南側傾斜面に造られている。主軸を北西から南東におき, 平面形は隅丸長方形を呈する。規模は長軸75cm, 短軸45cm, 深さ4cmである。底面は南東側に11°傾斜しており, 縦断面形は皿形を呈し, 横断面形も皿形を呈する。

遺構には暗褐色有機土が詰っていたことから, この土壌は遺存しにくい有機物を用いて直葬した埋葬壇である。埋葬壇の内部からは人骨や副葬品は何も出土しなかった。

埋葬壇は地山を浅く掘り込んで土壌を造り, 遺存しにくい有機物を用いた直葬とみられ, 埋葬壇の造られた時期は周囲のS F 35, S F 47などの埋葬壇と相近い時期が考えられるので, 中世から近世までを考えたい。そして, この埋葬壇には副葬品が何も無かったことから, 被葬者はおそらく庶民層の幼児であろう。

S F 45 (実測図第42図47)

S F 45はS F 46の南西30cmほど離れた, さご山の西傾斜面に造られている。主軸を北東から南西におき, 平面形は楕円形を呈する。土壌内上端に礫が周らされていた。規模は長軸85cm, 短軸47cm, 深さ17cmである。底面は南西側11°傾斜しており, 縦断面形は皿形を呈し, 横断面形も皿形を呈する。

遺構には暗褐色有機土が詰っていたことから, この土壌は遺存しにくい有機物を用いて直葬した埋葬壇である。埋葬壇の内部からは人骨や副葬品は何も出土しなかった。

埋葬壇は地山を浅く掘り込んで土壌を造り, 遺存しにくい有機物を用いた直葬とみられ, 埋

葬壇の造られた時期はS F 46などの埋葬壇と近い時期が考えられるので、中世から近世までを考えた。そして、この埋葬壇には副葬品が何も無かったことから、被葬者はおそらく庶民層の幼児であろう。

S F 46 (実測図第42図48, 図版45・B)

S F 46はS F 45の北東30cmほど離れた、さご山の西傾斜面に造られている。主軸を北東から南西におき、平面形は楕円形を呈する。土壇内上端に礫が周られていた。規模は長軸116cm, 短軸91cm, 深さ14cmである。底面は北側37°傾斜しており、縦断面形は皿形を呈し、横断面形も皿形を呈する。

遺構には暗褐色有機土が詰っていたことから、この土壇は遺存しにくい有機物を用いて直葬した埋葬壇である。埋葬壇の内部からは人骨や副葬品は何も出土しなかった。

埋葬壇は地山を浅く掘り込んで土壇を造り、遺存しにくい有機物を用いた直葬とみられ、埋葬壇の造られた時期はS F 45などの埋葬壇と近い時期が考えられるので、中世から近世までを考えた。そして、この埋葬壇には副葬品が何も無かったことから、被葬者はおそらく庶民層の幼児であろう。

S F 47 (実測図第43図49)

S F 47はS F 48の西側20cmほど離れた、さご山の南傾斜面に造られている。主軸を北東から南西におき、平面形は隅丸長方形を呈する。現存部の規模は長軸140cm, 短軸43cm, 深さ20cmである。底面は南西側11°傾斜しており、縦断面形は皿形を呈し、横断面形も皿形を呈する。

遺構には暗褐色有機土が詰っていたことから、この土壇は遺存しにくい有機物を用いて直葬した埋葬壇である。埋葬壇の内部からは人骨や副葬品は何も出土しなかった。

埋葬壇は地山を浅く掘り込んで土壇を造り、遺存しにくい有機物を用いた直葬とみられ、埋葬壇の造られた時期はS F 48, S F 49などの埋葬壇と近い時期が考えられるので、中世から近世までを考えた。そして、この埋葬壇には副葬品が何も無かったことから、被葬者はおそらく庶民層の幼児であろう。

S F 48 (実測図第43図49)

S F 48はS F 49の西側10cmほど離れた、さご山の南傾斜面に造られている。主軸を南から北におき、平面形は隅丸長方形を呈する。現存部の規模は長軸80cm, 短軸42cm, 深さ13cmである。底面は南側13°傾斜しており、縦断面形は皿形を呈し、横断面形も皿形を呈する。

遺構には暗褐色有機土が詰っていたことから、この土壇は遺存しにくい有機物を用いて直葬した埋葬壇である。埋葬壇の内部からは人骨や副葬品は何も出土しなかった。

埋葬壇は地山を浅く掘り込んで土壇を造り、遺存しにくい有機物を用いた直葬とみられ、埋葬壇の造られた時期はS F 47, S F 49などの埋葬壇と近い時期が考えられるので、中世から近世までを考えた。そして、この埋葬壇には副葬品が何も無かったことから、被葬者はおそらく庶民層の幼児であろう。

S F 49 (実測図第43図49)

S F 49はS F 48の東側10cmほど離れた、さご山の南傾斜面に造られている。主軸を北東から

南西におき、平面形は隅丸長方形を呈する。現存部の規模は長軸63cm、短軸43cm、深さ13cmである。底面は南西側9°傾斜しており、縦断面形は舟形を呈する。

遺構には暗褐色有機土が詰っていたことから、この土壌は遺存しにくい有機物を用いて直葬した埋葬墳である。埋葬墳の内部からは人骨や副葬品は何も出土しなかった。

埋葬墳は地山を浅く掘り込んで土壌を造り、遺存しにくい有機物を用いた直葬とみられ、埋葬墳の造られた時期はS F 47、S F 48などの埋葬墳と相近い時期が考えられるので、中世から近世までを考えたい。そして、この埋葬墳には副葬品が何も無かったことから、被葬者はおそらく庶民層の幼児であろう。(岩井 正治)

(4) 山郷山経塚1号 (図版46・A)

山郷山が東南側にテラス状に張出している緩斜面に位置する。調査の際トレンチ設定と発掘の不手際により遺構の大部分は破壊され明確にし得なかった。しかし、和鏡出土地点の下部には直径15cm、深さが残存部10cmほどの黒褐色土が堆積しており経筒を埋納した経塚と判断した。

経塚は堆積土の残存状況から経筒には遺存しにくい木製であろう。経筒の埋納墳は直径15cmあまり、深さは遺存部から20cm以上とみられる。経筒の規模は高さについては前述のとおり10cmを残すのみで詳かでない。直径は出土した鏡から8cm前後であろう。経筒に鏡を使用する場合底に鏡を使用する例があるが、本経塚の場合経筒の蓋に使用されたとみられる。和鏡は花菱菊花散紋鏡である。材質は白銅製である。直径8cm、外縁幅2㎝、厚さ1.5㎝、鈕は帯形素鈕で長さ8㎝、幅2㎝である。鈕の中央部は紐により摩耗し細くなっている。鏡表面の腐蝕はごくわずかである。鏡背文には帯をめぐらさず、鏡面全面に花菱紋と菊花紋を組合せて散らしている。本経塚のつくられた時期は室町時代後期から末期と考えたい。

(5) 山郷山経塚2号 (実測図第43図50)

経塚2号は山郷山の東南側の傾斜面で、経塚1号から9m離れて埋納されている。経塚は傾斜面の地山を円形に掘りさげて埋納墳をつくり、経筒を埋納して封土を盛り、さらに角礫を置いている。しかし、封土は長い年月にわたって流れ、角礫のみが遺存していた。埋納墳の掘り方は長軸28cm、短軸25cm、深さ19cmの規模床面が8°西へ傾斜する筒状である。埋納墳は底部には暗褐色土が堆積し、上部には角礫を含んだ封土が落ち込んでいた。埋納墳の底部に堆積した暗褐色土から推定して、経筒は木製であり、その中に入れる経典の材料も紙木経ではなかったろうか。通常、経筒とともに添えられる鏡などもなく、経塚1号と比べ質素のものであり、現世利益の祈願よりもむしろ供養として埋納されたのではなからうか。したがって、本経塚がつくられた時期も経塚1号よりやゝくんだり、室町時代から江戸時代初期と考えたい。

(6) ま と め (実測図第34図2)

このたびの山郷山遺跡の調査において発掘された遺構は

1. 弥生時代の土壌墓 2基

- 2. 古墳時代の土壙墓 5基
- 3. 中世以後の土壙墓 44基
- 4. 経塚 2基

である。これらを一覧表に示して概略をのべて、まとめとしたい。

表7 山郷山遺跡遺構一覧表

種別	平面形	規模			遺物	時期	備考
		長軸	短軸	深さ			
S F 1	長楕円	77	68	25	土器片	弥生時代後期中葉	
S F 2	長楕円	63	43	10	土器片	弥生時代後期中葉	
S F 3	長楕円	176	67	17		古墳時代後期	
S F 4	長楕円	170	56	14	土師器片	古墳時代後期	
S F 5	長楕円	299	81	11	土師器片	古墳時代後期	副室121×70×14
S F 6	長楕円	307	106	11	土師器片	古墳時代後期	
S F 7	長楕円	129	56	18			
S F 8	長楕円	105	69	5			
S F 9	長楕円	145	76	18			
S F 10	長楕円	125	85	17			
S F 11	長楕円	110	65	21			
S F 12	長楕円	63	52	22			
S F 13	長楕円	51	25	14			
S F 14	長楕円	70	46	8			
S F 15	長楕円	108	36	12			
S F 16	長楕円	71	42	6			
S F 17	長楕円	111	74	6	カワラケ片	中世以後	
S F 18	長楕円	89	60	5			
S F 19	長楕円	105	69	10			
S F 20	長楕円	79	59	9			
S F 21	長楕円	100	62	17	カワラケ片	中世以後	
S F 22	長楕円	66	48	12			
S F 23	長楕円	46	32	16			
S F 24	長楕円	45	29	8			
S F 25	長楕円	62	49	5	カワラケ片	中世以後	
S F 26	長楕円	45	35	14			
S F 27	楕円	65	60	13			
S F 28	楕円	63	60	10			
S F 29	長楕円	69	50	7	カワラケ片	中世以後	
S F 30	長楕円	85	49	13			

S F 31	隅丸長方形	154	46	11		
S F 32	長 楕 円	140	63	11		
S F 33	長 楕 円	148	80	22		
S F 34	長 楕 円	62	37	5		
S F 35	長 楕 円	59	48	20		
S F 36	長 楕 円	78	35	11		
S F 37	楕 円	50	46	10		
S F 38	隅丸長方形	88	31	9		
S F 39	長 楕 円	95	43	10		
S F 40	長 楕 円	151	68	45		
S F 41	長 楕 円	54	30	8		
S F 42	長 楕 円	44	32	9		
S F 43	長 楕 円	90	53	6		
S F 44	長 楕 円	75	45	4		
S F 45	長 楕 円	85	47	17		
S F 46	長 楕 円	116	91	17		
S F 47	長 楕 円	140	43	20		
S F 48	長 楕 円	80	42	13		
S F 49	長 楕 円	63	43	13		
経塚1号	—	—	—	—	鏡	室 町 時 代
経塚2号	楕 円	28	25	19		室 町 時 代

1. 弥生時代の土壙墓

山郷山東側傾斜面につくられている。規模は長軸70cm前後の楕円形を呈する土壙に深鉢形土器を用いた埋葬とみられる。土器片の出土状態から甕形土器か壺形土器を棺として深鉢形土器を蓋として使用したかあるいは、深鉢形土器のみを使用したかのどちらかである。いずれにしても、土器棺は約10片の傾斜面の地山を掘りさげ、土器棺の頭部が上位になるような埋葬方法であり、弥生時代中期の土器棺葬の特徴と言える。土器棺に使われた土器片は風化が著しく明瞭を欠くが、嶺田式に比定できるので弥生時代中期中葉と考えたい。

2. 古墳時代の土壙墓

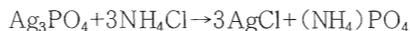
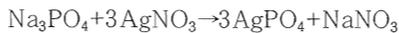
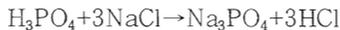
山郷山の頂部平坦部2基と南東側にテラス状に張出し部分の3基の合計5基からなっている。頂部につくられている2基は占地もよく築造時には墳丘をなしていたと思われるが、中世からの土壙群火葬場築造のため墳丘は消滅している。埋葬施設は地山を掘り下げた木棺直葬である。被葬者は木棺の規模から成人と考える。山郷山南東側のテラス状部に東西方向に並んでつくられている3基はいずれも地山を掘りさげて土壙をつくり木棺を直葬している。3基とも築造時には墳丘をなしていたものとみられるが、自然崩壊と木棺腐蝕による墳丘の沈下により地山の低い方向へ流土が堆積し自然傾斜状態となったものとみられる。遺物も土器器小片のみ

であるが、古墳時代中期の成人埋葬のものとする。

3. 中世以後の土壌墓

占地については山郷山の頂部と北側斜面も除いて全体につくられている。これらを位置別にみると南側斜面17基、頂部平坦部14基、東側斜面9基、西側斜面4基の順である。平面形は長楕円形が40基と最も多く、長方形が4基となっている。規模についてみると、全長100cm未満のもの29基、101cm以上のもの15基あわせて44基である。これを更に被葬者別にみると、死産、生後間もなく死亡した嬰兒は土壌の長さが100cm以内のものに埋葬している。幼児や成人に近い者は土壌の長さ101cm以上のものに埋葬している。そして、土壌墓の南側下方には鎌倉時代まで遡る土葬墓が3基所在し、更にこの南側には平坦面があり、葬送儀礼の堂宇のごときものが建てられた時期もあったであろう。頂部は火葬場として近代まで使われていた。しかし、山郷山の東側には土葬墓や江戸時代中期まで遡る共同墓地があることからこれらの土壌は遺物の出土は少ないが、中世から近世まで続いた埋葬墳群であったと考える。また、古老の話から昭和初期まで嬰兒の土葬墓として使われたことも考慮に入れると現代まで続いた埋葬地であったと言える。土壌群は規模が小さく、人体埋葬墳ではないという意見もあったので、土壌底部に堆積していた土が淡褐色あるいは灰褐色を呈していることから木棺埋葬ではなく、布など遺存しにくい有機物を使った水子乳幼児の埋葬が多くをしめているのではないかと思われた。本土壌が埋葬墳ではないとの指摘もあり、土壌底部に堆積している土を採集して化学分析を行ない、燐の検出を行ない、埋葬墳であることを実証するため専門家の指導をうけ実験を行なった。

分析方法は微量定量分析によるイオン検出法によった。分析方法をその順序に従って記すと



である。この結果、土壌内底部の淡褐色あるいは灰褐色土は土壌以外から採集した土よりも燐の強い反応を示したことから、これらの土壌は埋葬墳であると判断した。

4. 経塚

眺望が利く山頂裾部に木製経筒に和鏡を蓋に使った経塚を埋葬した山郷山は古代からの墳墓群であると同時に、北方に水垂経塚を望み東方には『延喜式』に所載の阿波々神社のある粟ヶ岳を望む霊地であったと考える。経筒の蓋に使われた和鏡は花菱菊花散紋鏡である。菊花を鏡背全面を書面として損くのは平安時代中期にその初例を見るが室町時代には団花紋となっている。花菱紋も鎌倉時代後期から室町時代に多くの例をみる。このように紋散らしは平安時代中期に造られ、鎌倉時代の後期に多くなり、末期から室町時代に急速に増大するようである。

山郷山経塚から出土した和鏡の花菱菊花散紋鏡も鏡背文の紋散らしは鎌倉時代から室町時代に多くの類例をみることから鑄造の粗雑とも相まって、経塚が隆盛した室町時代の後期から末期に営まれた経塚に経筒の一部として使用したものと考えたい。(岩井 克允)

第11章 元屋敷遺跡

1. 位置と環境 (実測図第46図1, 図版47・A)

掛川駅から北へ700m行くと国道一号との北門交差点に出会う。ここを右折して東へ2.5kmほど行くと藪ヶ谷地区で、旧東海道との交差点に出会う。この少し西寄りで左折し、北方へ200mほど行くと右手に開折谷が開け、その東から南に稜線がのびている。この峯山稜線の北側と南端からそれぞれ西に傾斜する尾根が下方の水田にまで続いている。

遺跡はこの尾根に囲まれてできた小扇状地上で、峯山の北の谷から流れる深谷川でその北側を仕切られている。地籍は掛川市宮脇字山郷1296-1である。

周辺の遺跡についてみると、北側から東にかけては峯山遺跡、山郷横穴群、深谷古墳、深谷横穴群、谷通り横穴群や谷を隔てた東方には御堂ヶ谷横穴群、千羽横穴群が点在する。南側には神明横穴群、廃天養院跡、川原遺跡などがある。西側には宮脇横穴、五輪田遺跡、山郷山遺跡があり、さらに水垂地区には、大平山古墳、大多郎遺跡、内籠遺跡が点在する。

2. 遺構

(1) 岩井戸1号 (実測図第45図2, 図版47・B)

峯山遺跡北部稜線西端裾の傾斜面の岩盤上に掘られていた。井戸の平面形は円形を呈し、その規模は長軸113cm、短軸104cm、深さ65cmを計った。井戸には柱穴が汲手側の左右に2ヶ所と、奥側の左右に2ヶ所掘られており片流れの屋根を支えていたものとみられる。

遺物は井戸底面より長さ45cm、幅12cm、長さ43cm、幅12cmの杉の木皮2枚、土師器片が出土した。

井戸の造られた時代は江戸時代とみられ、明治中期まで使われたものとみられる。

(2) 井戸2号 (実測図第45図3, 図版48・A)

峯山遺跡北部稜線西端裾を下った水田の中にあった。井戸2号の平面形は正円形を呈し、規模は長軸100cm、短軸93cm、深さ84cmを計った。断面形はU形を呈した。井戸の上端部には幅11cmの竹で造った籬を井戸枠としてはめていた。井戸の周辺には柱の下部が数本遺存していたため、屋外井戸よりも、あるいは小屋の中にあったのではないだろうか。

井戸は江戸時代に造られ明治時代中期にかけて使用されたものとみられる。

3. ま と め (実測図第44図1, 図版49)

元屋敷遺跡は峯山遺構のある峯山から流れだす土砂によって形成された小扇状地形で、明治中期前半まで住家があったが、その後水田となったため元屋敷と呼ばれている、バイパス用地内調査計画立案の際は遺構の確認のみを行なうことになっていた。試掘の結果、地表下2 m附近からは弥生時代の土器片が検出され、又地表下50cm附近からは江戸時代の遺構が検出された。集水施設2ヶ所、岩井戸1ヶ所、井戸2ヶ所、溝状遺構2ヶ所である。S E 1は崖面下部を平坦にして掘りこみ、片流れの屋根を設け、雨水の流入を防いでいる。井戸S E 3は井戸枠を竹で編んで嵌めこんでいる。集水施設はS E 2, S E 3へと通じている。溝状遺構はS E 3の南側で、北東側と南側から1ヶ所に集め、さらに南へ続いて行くようである。遺物はカワラケ、陶磁器などである。

(岩井 克允)

このように本遺跡は完掘はできなかったが、弥生時代、鎌倉時代、江戸時代、明治時代と続いた複合遺跡であった。

第12章 峯山遺跡

I. 位置と環境（実測図第46図1，図版50・A）

峯山遺跡は掛川駅から北東へ2.8 kmほど行った，標高80 m前後の尾根上に位置する。地籍は掛川市藪ヶ谷字峯山46，47-1，藪ヶ谷字山郷1301他である。

峯山遺跡周辺の地形をみると北東から続く尾根が多くの開折谷を形成し，枝状に発達した尾根の先端近くで，南は逆川近くまで続いている。西側や南側は逆川や安養寺川などによってつくられた沖積平野が幅800 mの幅でみられる。また西側沖積平野の北側には峯山からの尾根が西方にのびている。

次に周辺の遺跡についてみると，逆川流域の右岸には多くの遺跡が点在する。峯山遺跡から東側をみると谷通横穴群，御堂ヶ谷横穴群，千羽横穴群などが点在し，南側では弥生時代の河原遺跡，神明横穴群，廃天養院跡などが所在し，西側では峯山遺跡のある尾根と尾根の裾部の小扇状地には，元屋敷遺跡，水田を隔てて宮脇横穴群，五輪田遺跡，山郷山遺跡，西谷田遺跡，大平山古墳，大多郎遺跡が，北側では谷通横穴群，深谷古墳，深谷横穴群，水垂経塚などが所在する。

（岩井 正治）

II. 遺 構

このたび発掘された遺構は弥生時代，古墳時代，奈良時代，鎌倉時代の各時代にわたっている。

1. 弥生時代の遺構

(1) 竪 穴

S B 1（実測図第47図2，図版52）

S B 1は峯山稜線西側の微隆起平坦面に造られているので，耕作により，壁の北西部側が一部分削平されているほかは，遺存状態は良好である。平面形は円形を呈する。規模は長軸604 cm，短軸564 cm，壁高15 cmである。柱穴は13個所で，床面からの深さは15 cmである。遺構の中央や北寄り部分に炉跡が遺存していた。炉跡は焼土が径88 cm，厚さ7 cmほどで，その周りに拳大の礫が7個ほど置かれたものである。

出土した遺物は土器片と石器である。土器は壺で，口縁部を床面につけて出土した。石器は大型蛤刃石斧である。遺構の造られた時期は，弥生時代後期前半とみられる。

S B 2（実測図第47図3）

S B 2は尾根の平担部に造られている。一部分が、用地外におよんでいるので、全貌を明かにすることはできなかった。平面形は楕円形を呈するものとみられる。調査し得た規模は壁上面で長軸353cm、短軸180cm、壁高23cmである。柱穴は5個所で、床面からの深さは20cmである。柱穴は5個所で、床面からの深さは20cmである。炉跡などは検出されなかった。

出土した遺物は土器片で、壺形土器、甕形土器などの小破片である。

S B 3（実測図第47図4）

S B 3は尾根の鞍部に造られているので遺存状態は良好である。平面形は楕円形を呈する。規模は壁上面で、長軸253cm、短軸219cm、壁高29cmである。柱穴や炉跡などは検出されなかった。

出土した遺物は土器片で、壺形土器、甕形土器などの小破片である。

S B 4（実測図第48図5、図版53・A）

S B 4は尾根の鞍部に造られているので遺存状態は良好である。一部分が用地外におよんでいるため、全貌を明かにすることはできなかった。調査し得たところによると、平面形は楕円形を呈するものとみられる。規模は長軸225cm、短軸144cm、壁高25cmである。柱穴は4個所で、床面からの深さは25cmである。炉跡などは検出されなかった。

出土した遺物は土器片で、壺形土器、甕形土器などの小破片である。

S B 5（実測図第48図6、図版53・B）

S B 5は尾根の鞍部に造られているので、遺存状態は良好である。平面形は円形を呈する。規模は長軸413cm、短軸376cm、壁高29cmである。柱穴は10個所で、床面からの深さは35cmである。遺構の中央附近には焼土が遺存していた。その規模は長軸65cm、短軸57cm、厚さ46cmである。また北寄りには貯蔵穴が造られていた。規模は長軸70cm、短軸40cm、深さ20cmである。

出土した遺物は土器片で、壺形土器、甕形土器などの小破片である。

S B 6（実測図第49図7、図版54・A）

S B 6は尾根の鞍部に造られているので、遺存状態は良好である。平面形は円形を呈する。規模は壁上面で長軸518cm、短軸480cm、壁高30cmである。柱穴は11個所で、床面からの深さは16cmである。遺構中央には炉跡とみられる焼土が遺存していた。その規模は長軸80cm、短軸70cm、厚さ67cmほどである。遺構外部の北西80cmのところに土壌が掘られていた。平面形は楕円形を呈し、長軸97cm、短軸68cm、深さ40cmでS B 6の附属施設である貯蔵穴であろう。

出土した遺物はS B 6、S K 1とも土器片で、壺形土器、甕形土器などの小破片である。

S B 7（実測図49図8）

S B 7は尾根の鞍部に造られているので、遺存状態は良好である。平面形は長楕円形を呈する。規模は壁上面で長軸201cm、短軸137cm、壁高18cmである。遺構からは柱穴や炉跡などは検出されなかった。

出土した遺物は土器片で、壺形土器、甕形土器などの小破片である。

S B 8 (実測図第49図9, 図版54・B)

S B 8は尾根の鞍部に造られているので、遺存状態は良好である。平面形は長楕円形を呈する。規模は壁上面で長軸307cm, 短軸220cm, 壁高29cmである。柱穴は4個所で、その深さは床面から11cmから20cmである。炉跡などは検出されなかった。

出土した遺物は土器片で、壺形土器、甕形土器などの小破片である。

S B 9 (実測図第50図10, 図版55・A)

S B 9は尾根の鞍部に造られているので、遺存状態は良好である。平面形は不整形円形を呈する。規模は壁上面で長軸348cm, 短軸322cm, 壁高22cmである。柱穴は9個所で、その深さは床面から23cmから28cmである。炉跡などは検出されなかった。

出土した遺物は土器片で、壺形土器、甕形土器などの小破片である。

S B 10 (実測図第50図11, 図版55・B)

S B 10は尾根の鞍部に造られているので、遺存状態は良好である。平面形は楕円形を呈する。規模は壁上面で長軸152cm, 短軸119cm, 壁高30cmである。遺構からは柱穴や炉跡などは検出されなかった。

出土した遺物は土器片で、壺形土器、甕形土器などの小破片である。

S B 11 (実測図第50図12)

S B 11は西に傾斜する尾根上に造られているので、耕作により北壁が削平されている。平面形は長楕円形を呈する。規模は壁上面で長軸211cm, 短軸102cm, 壁高12cmである。柱穴は2個所で、その深さは床面から20cmであった。炉跡などは確認されなかった。

出土した遺物は土器片で、壺形土器、甕形土器などの小破片である。

S B 12 (実測図第51図13, 図版56・A)

S B 12は西に傾斜する尾根上に造られているので、耕作により西壁が削平されている。平面形は楕円形を呈する。規模は壁上面で長軸336cm, 短軸263cm, 壁高13cmである。柱穴は6個所で、その深さは10cmから15cmである。竪穴の中央南寄りに焼土が遺存していた。焼土の規模は長軸60cm, 短軸40cm, 厚さ6cmほどである。また炭化材が南西から北東方向に出土しているので、この遺構は火災に遇ったものとみられる。

出土した遺物は土器片と石器2である。土器は壺形土器の口縁部片である。石器は二つとも扁平片刃石斧である。一つは頁岩製で、長さ7cm, 幅4.7cm, 厚さ1.2cmである。刃こぼれが全体にみられ、右側の磨耗度が大きい。他の一つは緑泥片岩製で、長さ4.2cm, 幅4.2cm, 厚さ8mmである。刃こぼれはなく、右側の磨耗度が大きい。(内藤 次郎)

S B 13 (実測図第51図14)

S B 13は西に傾斜する尾根上に造られているので、耕作により西壁が削平されている。平面形は楕円形を呈する。規模は壁上面で、長軸273cm, 短軸196cmほど、壁高23cmである。柱穴や炉跡などは検出されなかった。

出土した遺物は土器片で、壺形土器、甕形土器などの小破片である。

S B 14 (実測図第51図15, 図版57・A)

S B 14は西に傾斜する尾根上に造られているので、耕作により西壁が削平されている。平面形は楕円形を呈する。規模は壁上面で、長軸 206 cm, 短軸 167 cmほど、壁高11cmである。柱穴は1個所で、その深さは20cmである。床面の中央附近には焼土が遺存していた。焼土は径50cm, 厚さ5 cmほどである。また、炭化材が北西から南東方向に出土していることから竪穴は火災に遇ったものとみられる。

出土した遺物は土器片が2個体分出土した。壺形土器と甕形土器である。遺構の造られた時期は弥生時代後期前半である。

S B 15 (実測図第51図16, 図版58・A)

S B 15は西に傾斜する尾根上に造られているので、耕作により西壁が削平されている。平面形は不整形を呈する。規模は壁上面で、長軸 177 cm, 短軸 164 cmほど、壁高19cmである。柱穴は2個所で、その深さは15cmである。焼土が中央部分に長軸35cm, 短軸25cm, 深さ4.5 cmの規模で遺存しており炉跡である。炭化材が床面の北西から南東方向に出土したことから火災に遇ったものとみられる。

出土した遺物は土器片で、壺形土器、甕形土器などの小破片である。

S B 16 (実測図第51図17)

S B 16は西に傾斜する尾根上に造られているが、耕作による削平の影響はみられない。平面形は不整形を呈する。規模は壁上面で、長軸 151 cm, 短軸 140 cm, 壁高20cmである。柱穴や炉跡などは検出されなかった。

出土した遺物は土器片で、壺形土器、甕形土器などの小破片である。 (野口 英生)

S B 17 (実測図第52図18)

S B 17は西に傾斜する尾根上に造られているので、耕作により西壁が削平されている。平面形は長楕円形を呈する。規模は壁上面で長軸 323 cm, 短軸 175 cmほど、壁高36cmである。柱穴は3個所で、その深さは床面から15cmから17cmである。炉跡などは検出できなかった。

出土した遺物は土器片で、壺形土器と甕形土器などの小破片である。

S B 18 (実測図第52図19, 図版58・B)

S B 18は西に傾斜する尾根上に造られているが 遺存状態は良好である。平面形は楕円形を呈する。規模は壁上面で長軸 237 cm, 短軸 155 cm, 壁高32cmである。柱穴は7個所で、その深さは床面から12cmから16cmである。炉跡などは検出できなかった。

出土した遺物は土器片で、壺形土器、甕形土器などの小破片である。

S B 19 (実測図第52図20)

S B 19は西に傾斜する尾根上に造られているが、耕作による削平は少ない。平面形は不整形楕円形を呈する。規模は長軸 252 cm, 短軸 162 cm, 壁高16cmである。柱穴は6個所で、その深さは床面から15cmから22cmである。炉跡などは確認されなかった。

出土した遺物は土器片4個体分ほどで、壺形土器、甕形土器などの小破片である。

S B 20 (実測図第52図21)

S B 20は西に傾斜する尾根上に造られているが、遺存状態は良好である。平面形は隅丸長方形を呈する。規模は壁上面で長軸 281 cm, 短軸 238 cm, 壁高20cmである。柱穴は 8 個所で、その深さ13cmから20cmである。炉跡などは検出されなかった。

出土した遺物は土器片で、壺形土器、甕形土器などの小破片である。

S B 21 (実測図第53図22, 図版59・A)

S B 21は西に傾斜する尾根上に造られているが、耕作による削平は少ない。S B 22と北壁を接している。平面形は円形を呈する。規模は径 130 cm, 壁高20cmである。柱穴は 3 個所で、その深さは12cmから15cmである。炉跡などは検出されなかった。

出土した遺物は土器片で、甕形土器とみられる小破片である。 (中村 隆行)

S B 22 (実測図第53図22, 図版59・A)

S B 22は西に傾斜する尾根上に造られているが、耕作による削平は少ない。平面形は不整形円形を呈する。規模は壁上面で、長軸 131 cm, 短軸 124 cm, 壁高17cmである。柱穴は 1 個所で、その深さは15cmである。炉跡などは検出されなかった。

出土した遺物は土器片で、壺形土器 1 個体分の小破片である。

S B 23 (実測図第53図23, 図版59・B)

S B 23は尾根の鞍部に造られているので遺存状態は良好である。平面形は隅丸長方形を呈する。規模は壁上面で長軸 234 cm, 短軸 183 cm, 深さ43cmである。柱穴は 4 個所で、その深さは床面から10cmから12cmである。遺構の中央東寄りに焼土が径35cmほどで薄く遺存していた。

出土した遺物は土器片で、壺形土器、甕形土器などの小破片である。

S B 24 (実測図第54図24)

S B 24は西に傾斜する尾根上の平坦なところに造られているので、遺存状態は良好である。平面形は隅丸長方形を呈する。規模は壁上面で長軸 308 cm, 短軸 268 cm, 壁高31cmである。柱穴は 6 個所で、その深さは床面から16cmから19cmである。遺構の中央北寄りに炉跡が遺存していた。炉跡は 5 cmから20cmの礫を用いて円形に造られていた。遺構は S B 64(実測図第54図24)と重複しており、その下部にある。

出土した遺物は土器片と石器である。土器片は壺形土器 3 個体分の小破片である。石器は砥石 1 で、砂岩製である。大きさは長さ10.3 cm, 幅 6.6 cm, 厚さ 4 cmである。

S B 25 (実測図第54図25)

S B 25は尾根部に造られているが遺存状態は比較的良好である。平面形は隅丸長方形を呈し、規模は壁上面で長軸 217 cm, 短軸 137 cm, 壁高24cmである。柱穴が 2 ケ所で、床面からの深さは18cmである。遺構の中央東部分には規模長軸60cm, 短軸42cm, 深さ17cmの貯蔵穴が造られていた。遺構外北東方向に規模、長軸95cm, 短軸70cm, 深さ12cmの貯蔵穴 S K 3 (実測図第74図80) が造られている。

S B 25は東側に S B 67, 西側に S B 26と重なっている。遺構の状態や遺物により S B 26, S B 25, S B 67の順序で造られているとみてよかろう。(実測図第54図25)

出土した遺物は土器片で、壺形土器、甕形土器などの小破片である。 (岩井 和志)

S B 26 (実測図第54図25)

S B 26は尾根部に造られているが遺存状態は比較的良好である。平面形は隅丸長方形を呈じ、規模は壁上面で長軸 190 cm、短軸 121 cm、壁高32cmである。柱穴は確認されなかった。遺構内北東部分には長軸30cm、短軸25cm、深さ14cmの土壌が造られていた。土壌内には半截された甕形土器が入っており、炉に使用したものか、あるいは貯蔵用に使用したものとみられる。

S B 26はS B 25と重なっているがその重複状態はS B 25で記したとおりである。

出土した遺物は遺構内土壌に半截された甕形土器 1 個体分とその他土器片が少量出土した。

S B 27 (実測図第55図26, 図版60・A)

S B 27は西へ傾斜する尾根上に造られているが、耕作により西壁が削平されている。平面形は隅丸長方形を呈する。規模は壁上面で長軸 203 cmほど、短軸 190 cm、壁高18cmである。柱穴や炉跡などは検出されなかった。

出土した遺物は土器片で、壺形土器 2 個体分と甕形土器片などの小破片である。

S B 28 (実測図第55図27, 図版60・B)

S B 28は尾根上の緩斜面に造られているが、耕作による削平は少ない。平面形は隅丸長方形を呈する。規模は壁上面で長軸 210 cm、短軸 119 cm、壁高25cmである。柱穴や炉跡などは検出されなかった。

出土した遺物は土器片で、壺形土器、甕形土器などの小破片である。

S B 29 (実測図第55図28, 図版60・B)

S B 29は尾根上の緩斜面に造られているので、耕作による削平は少ない。平面形は楕円形を呈する。規模は壁上面で、長軸 153 cm、短軸 131 cm、壁高25cmである。柱穴や炉跡などの検出されなかった。

出土した遺物は土器片で、壺形土器、甕形土器などの小破片である。

S B 30 (実測図第55図29)

S B 30は尾根の先端部に造られている。平面形は楕円形を呈する。規模は壁上面で長軸 221 cm、短軸 173 cm、壁高27cmである。柱穴や炉跡などは検出されなかった。

出土した遺物は土器片で、壺形土器、甕形土器などの小破片である。

S B 31 (実測図第55図30)

S B 31は尾根の先端部に造られている。北東壁と南西壁が削平されている。平面形は隅丸長方形を呈する。規模は壁上面で、長軸 216 cm、短軸 178 cm、壁高26cmである。柱穴や炉跡などは検出されなかった。

出土した遺物は土器片で、壺形土器、甕形土器などの小破片である。

S B 32 (実測図第55図31)

S B 32は尾根の先端部に造られているが、遺存状態は良好である。平面形は楕円形を呈する。規模は壁上面で、長軸 158 cm、短軸 137 cm、壁高38cmである。柱穴や炉跡などは検出されなかった。

出土した遺物は土器片で、壺形土器、甕形土器などの小破片である。 (岩井 正治)

(2) 竪穴付属小屋

SK 1

SK 1はSB 6の北側に1 mほど離れてつくられている。主軸を北東から南西にむき、平面形は楕円形を呈する。規模は長さ97cm, 幅60cm, 深さ40cmである。

遺物は弥生時代の土器片である。土器片は細片数個である。器形は詳かでない。胎土は精選されており、焼成は良好である。

(3) 室外竈

屋外竈 S I 3 (実測図第53図23)

竈3号の北側10cmほど離れて主軸を東西にむけてつくられている。竈5号,竈6号とともに、ほぼ等間隔で弧を描きながら煙出し部を一点に集中させるごとく並んでいる東南側に位置する。平面形は茄子形を呈する。焚口部を東側に設け、煙出し部は西側である。底面は焚口部から煙出し部にむかってゆるやかな傾斜をなしている。規模は全長116cm, 幅は67cm, 深さ本体部で18cmである。焚口部は竈本体へとゆるやかに接続しており、その区分と長さは明確にし難い。

竈本体は焚口部と接続しており形状ははっきりしない。煙出し部は竈本体後部が急に狭まり長さ20cm, 幅14cmの規模で造られている。底面はごく浅いくぼみがつくられ、側壁は急傾斜で地上に達している。

遺物は微細な炭化物を含んだ黒色土のなかに土師器の細片が数個出土している。竈のつくられた時期はKD 18内の竈と大差はなく古墳時代前期とみられる。

屋外竈 S I 4 (実測図第53図23)

竈S I 3の北側20cmのところと位置する。主軸を北東から南西におき、平面形は楕円形を呈する。北東側を焚口とし、南西側に煙出しを設けている。規模は長さ100cm, 幅66cm, 深さ20cmである。竈は焚口部から5°の角度で煙出し部へ傾斜している。

焚口部の両壁は弧をえがきながら本体部へ続き、その区別はつかない。本体は煙出し部が煙突であることから天井部があったとみられる。煙出し部は煙突となっており内径5cmである。

遺物は竈内に堆積している炭化物を含んだ暗黒色土の中から土師器の細片が数片である。竈のつくられた時期は竈S I 3と同時期とみて古墳時代前期とみられる。

屋外竈 S I 5 (実測図第53図23)

竈S I 4の西側へ10cm離れたところにつくられている。主軸を北西から南東におき、平面形は三角錘形を呈する。北西側を焚口とし、南東側を煙出しとしている。規模は長さ99cm, 幅は中央部で60cm, 深さ14cmである。竈は焚口部から煙出し部まで平坦である。

焚口部は幅60cmで隅円となり幅を次第に狭めながら本体へと接続している。竈の本体は幅を狭めながら煙出し部へ接続している。煙出し部は残存状況から竈S I 4と同様に、煙突であったと推定する。

遺物は竈内に堆積している炭化物を含んだ暗黒色土のなから土師器細片が数片出土している。竈のつくられた時期は竈S I 4と同時期とみて古墳時代前期とみられる。

(4) 小 穴

S B 1 (実測図第76図90)

S B 1 の南側に 4 m 離れた平坦面につくられている。平面形は楕円形を呈する。規模は長軸 97cm, 短軸 68cm, 深さ 40cm である。遺物は弥生時代の土器片である。土器片は 13 個所で、甕形土器である。S B 1 に附属するものと考えたい。

(5) 土 壙 墓

S F 1 (実測図第80図 101, 図版77・A, B)

S F 1 は S B 12 の北側に 20cm 離れた平坦面に位置する。主軸を北東から南西にむけ、平面形は隅丸長方形を呈する。規模は長さ 273cm, 幅 101cm, 深さ 27cm である。遺物は弥生時代の土器片 24 片で、高坏脚部片と甕片である胎土, 焼成ともに悪い。

S F 2 (実測図第80図 102, 図版77・A, 78・A)

S B 11 の東側に 600 cm 離れた西にさがる傾斜面につくられている。主軸を北西から南東においている。平面形は隅丸長方形を呈する。規模は長さ 197cm, 幅 73cm, 深さ 13cm である。遺物は弥生時代の土器片である。土器片は小破片 71 個でそのうち 2 片は壺片である。胎土は精選されており, 焼成は良好である。

S F 3 (実測図第80図 103, 図版77・A, 78・A)

S B 20 の南東に接している。主軸を北東から南西におき, 平面形は隅丸長方形を呈する。規模は長さ 173cm, 幅 57cm, 深さ 12cm である。遺物は弥生時代の土器片である。土器片は 17 片で壺の小破片である。胎土, 焼成とも悪いものである。

S F 4 (実測図第81図 104, 図版78・B)

S B 76 の北西側に 480 cm 離れた西に下る傾斜面に位置する。主軸を東西におき, 平面形は長方形を呈する。規模は長さ 162cm, 幅 90cm, 深さ 23cm である。遺物は弥生時代の土器片である。土器片は 5 片で台付甕の底部と脚部である。胎土は精選され, 焼成は良好である。

2. 古墳時代の遺構

(1) 豎 穴

S B 33 (実測図第56図32, 図版61・A)

S B 33 は尾根の鞍部に造られているため遺存状態は良好である。平面形は隅丸長方形を呈し, 規模は壁面上で長軸 475cm, 短軸 365cm, 壁高 20cm である。柱穴は 14 ヶ所で, 床面から 15cm である。遺構内の東南部分に長軸 165cm, 短軸 95cm, 深さ 10cm の貯蔵穴がつくられていた。

出土した遺物は土器片で, 壺形土器, 甕形土器などの小破片である。

S B 34 (実測図第56図33, 図版54・B)

S B 34 は尾根の鞍部に造られているため遺存状態は良好である。平面形は隅丸長方形を呈し, 規模は壁上面で長軸 337cm, 短軸 236cm, 壁高 19cm である。柱穴は 8 ヶ所で, 床面からの深さは 22cm から 47cm である。焼土があり, そのまわりに礫で造られた炉跡がある。その規模は長軸 71cm, 短軸 37cm, 厚さ 5cm である。

出土した遺物は土器片で、壺形土器、甕形土器などの小破片である。

S B 35（実測図第57図34，図版61・B）

S B 35は尾根の鞍部に造られているため遺存状態は良好である。平面形は隅丸長方形を呈し、規模は壁上面で長軸510cm，短軸350cm，壁高26cmである。柱穴は11ヶ所で、床面からの深さは10cmから15cmである。遺構内東壁近くには長軸32cm，短軸20cm，深さ8cm，その西側には長軸34cm，短軸15cm，深さ8cmの二つの貯蔵穴が造られていた。遺構外部東方向には長軸78cm，短軸46cm，深さ14cmの貯蔵穴S B 33，および東北方向には長軸96cm，短軸62cm，深さ26cmの貯蔵穴が造られていた。

出土した遺物は土器片で、壺形土器、甕形土器などの小破片である。

S B 36（実測図第57図35，図版62・B）

S B 36は尾根の鞍部に造られているため遺存状態は良好である。平面形は不整長楕円形を呈し、規模は壁上面で長軸434cm，短軸271cm，壁高24cmである。柱穴は11ヶ所で、床面からの深さは20cmから25cmである。炉石による炉跡が遺構中央部分に造られその規模は、長軸65cm，短軸49cm，厚さ5cmである。遺構内中央東部分に長軸145cm，短軸80cm，深さ12cmの貯蔵穴が造られていた。

出土した遺物は土器片で、壺形土器、甕形土器などの小破片である。

S B 37（実測図第58図36，図版55・A）

S B 37は尾根の鞍部に造られているため遺存状態は良好である。平面形は不整円形を呈し、規模は長軸356cm，短軸292cm，壁高26cmである。柱穴は8ヶ所で、床面からの深さは30cmから40cmである。遺構には炉跡などは確認できなかった。しかし遺構外部南側に長軸168cm，短軸94cm，深さ30cmの貯蔵穴（S B 35）長軸117cm，短軸80cm，深さ25cmの貯蔵穴（S B 36）が造られていた。（実測図編第 ）

出土した遺物は土器片で、壺形土器、甕形土器などの小破片である。

S B 38（実測図第58図37，図版63・A）

S B 38は尾根の鞍部に造られているため遺存状態は良好である。平面形は隅丸長方形を呈し、規模は長軸420cm，短軸205cm，壁高24cmである。柱穴は10ヶ所で、床面からの深さは18cmから20cmである。遺構内西部分には長軸84cm，短軸70cm，深さ45cmの貯蔵穴がつくられていた。遺構外南方向には、長軸133cm，短軸85cm，深さ30cmの貯蔵穴が造られていた。

出土した遺物は土器片で、壺形土器、甕形土器などの小破片である。

S B 39（実測図第59図38，図版63・B）

S B 39は尾根の鞍部に造られているため遺存状態は良好である。平面形は隅丸長方形を呈し、規模は壁上面で長軸265cm，短軸161cm，壁高19cmである。柱穴は8ヶ所で、床面からの深さは16cmから9cmである。遺構には炉跡などは確認されなかった。

出土した遺物は土器片で、壺形土器、甕形土器などの小破片である。

S B 40（実測図第59図39）

S B 40は尾根の鞍部に造られているため遺存状態は良好である。平面形は楕円形を呈し、規

模は長軸196cm、短軸161cm、壁高49cmである。柱穴は確認されなかった。遺構の北部分には焼土が長軸60cm、短軸35cm、厚さ5cmあり、炉跡とみられる。

出土した遺物は土器片で、壺形土器、甕形土器などの小破片である。

S B 41 (実測図第59図40)

S B 41は耕作とトレンチにより、全貌を明らかにすることはできなかった。調査し得た竪穴の規模は壁上面において長軸372cm、短軸63cm、深さ26cmである。柱穴は3ヶ所で、床面からの深さは15cmから18cmである。遺構には炉跡などは確認されなかった。

出土した遺物は土器が少量出土した。壺形土器、甕形土器などの小破片である。

S B 42 (実測図第60図41)

鞍部に造られているため遺存状態は良好である。平面形は隅丸長方形を呈し、規模は壁上面で長軸251cm、短軸197cm、壁高25cmである。柱穴は4ヶ所で、床面からの深さは13cmから15cmである。遺構の中央部分には礫を使った炉跡が認められ、その規模は長軸56cm、短軸50cmである。

出土した遺物は土器片で、壺形土器、甕形土器などの小破片である。

S B 43 (実測図第60図41)

鞍部に造られているため遺存状態は良好である。平面形は不整長楕円形を呈し、規模は壁上面で長軸161cm、短軸112cm、壁高28cmである。柱穴は確認されなかった。遺構の南西部分には焼土が確認され、その規模は長軸47cm、短軸32cm、厚さ4cmである。

出土した遺物は土器片で、壺形土器、甕形土器などの小破片である。

S B 44 (実測図第60図42)

S B 44は尾根の鞍部に造られているため遺存状態は良好である。正方形は隅丸長方形を呈し、規模は壁上面で長軸240cm、短軸208cm、壁高77cmである。柱穴は検出されなかった。床面に人頭大より拳大の川原石がおかれており、この石は土器を置くために使われたものとみられる。また土器の小破片も多数出土したところから、貯蔵小屋とみられる。

S B 45 (実測図第61図43, 図版64・A)

S B 45は尾根の鞍部に造られているため遺存状態は良好である。平面形は隅丸長方形を呈し、規模は壁上面で長軸200cm、短軸146cm、壁高27cmである。柱穴、炉跡などは確認されなかった。

出土した遺物は土器片で、壺形土器、甕形土器などの小破片である。

S B 46 (実測図第61図44, 図版64・B)

S B 46は尾根の鞍部に造られているため遺存状態は良好である。平面形は隅丸長方形を呈し、規模は壁上面で長軸316cm、短軸226cm、壁高13cmである。柱穴は4ヶ所で、床面からの深さは11cmから22cmである。遺構内には炉跡などは確認されなかった。

出土した遺物は土器片で、壺形土器、甕形土器などの小破片である。

S B 47 (実測図第61図44)

S B 47は尾根の鞍部に造られているため遺存状態は良好である。平面形は隅丸長方形を呈し、

規模は壁上面で長軸 197 cm, 短軸 151 cm, 壁高29cmである。柱穴は 4 ケ所で、床面よりの深さは 6 cmから14cmである。遺構の中央部分には長軸 100 cm, 短軸66cm, 深さ11cmの貯蔵穴が造られていた。

出土した遺物は土器片で、壺形土器、甕形土器などの小破片である。

S B 48 (実測図第61図44, 図版65・A)

S B 48は尾根の鞍部に造られているため遺存状態は良好である。平面形は隅丸長方形を呈し、規模は壁上面で長軸 281 cm, 短軸 245 cm, 壁高21cmである。柱穴は 4 ケ所で、床面からの深さは19cmから21cmである。また、北東部分にも岩礫10数個を使った炉跡があり、その規模は長軸 40cm, 短軸25cmである。

出土した遺物は土器片で、壺形土器、甕形土器などの小破片である。

S B 49 (実測図第62図45)

S B 49は尾根の鞍部に造られているため遺存状態は良好である。平面形は不整円形を呈し、規模は壁上面で長軸 147 cm, 短軸 122 cm, 壁高10cmである。柱穴は 1 ケ所で、床面からの深さは18cmである。遺構には炉跡などは確認されなかった。

出土した遺物は土器片で、壺形土器、甕形土器などの小破片である。

S B 50 (実測図第53図23)

S B 50は尾根の稜線上に造られているため遺存状態は良好である。平面形は正方形を呈し、規模は壁上面で長軸 332 cm, 短軸 319 cm, 壁高20cmである。柱穴は 1 ケ所で、床面からの深さは15cmである。遺構内には炉跡が 2 ケ所で検出された。

Y D 23, K D 20と重なっており、出土遺物から、K D 20の方が古いとみられる。

出土した遺物は土器片で、壺形土器、甕形土器などの小破片である。 (岩井 克允)

S B 51 (実測図第53図23, 図版65・B)

S B 51は尾根の鞍部に造られているため遺存状態は良好である。平面形は隅丸長方形を呈し、規模は壁上面で長軸 289 cm, 短軸 202 cm, 壁高27cmであった。柱穴、炉跡などは確認されなかった。

S B 50, S B 23と重なっている。造られた順序はS B 23より新しくS B 50よりも古いものとみられる。

出土した遺物は土器片で、壺形土器、甕形土器などの小破片である。

S B 52 (実測図第53図23, 図版65・B)

S B 52は尾根の鞍部に造られているため遺存状態は良好である。平面形は隅丸長方形を呈し、規模は壁上面で長軸 205 cm, 短軸 166 cm, 壁高24cmである。柱穴、炉跡などは確認されなかった。

S B 23と重なっており、遺構の状態よりS B 23が古いものとみられる。

出土した遺物は土器片で、壺形土器、甕形土器などの小破片である。

S B 53 (実測図第62図46, 図版66・A)

S B 53は尾根の緩斜面に造られているため遺存状態は良好である。平面形は不整長楕円形を

呈し、規模は壁上面で長軸 390 cm、短軸 280 cm、深さ 20 cm である。柱穴は 12ヶ所で、床面からの深さは 13 cm から 28 cm である。遺構の中央部分には礫を使った炉跡があり、規模は長軸 35 cm、短軸 32 cm、厚さ 2 cm である。また北西部にも長軸 40 cm、短軸 37 cm、厚さ 2 cm の規模で炉跡が造られていた。

出土した遺物は土器片で、壺形土器、甕形土器などの小破片である。

S B 54（実測図第 63 図 47）

S B 54 は尾根の鞍部に造られているが、トレンチと耕作により南西部壁が削平された。平面形は隅丸長方形を呈し、規模は長軸 318 cm、短軸 275 cm、深さ 10 cm ほどである。柱穴は 7ヶ所で、床面からの深さは 20 cm から 24 cm である。遺構の東北部分には長軸 109 cm、短軸 76 cm、深さ 30 cm の貯蔵穴が造られていた。

出土した遺物は土器片で、壺形土器、甕形土器などの小破片である。

S B 55（実測図第 63 図 48、図版 66・B）

S B 55 は尾根の鞍部に造られているため遺存状態は良好である。平面形は隅丸長方形を呈し、規模は壁上面で長軸 238 cm、短軸 212 cm、壁高 7 cm である。柱穴は 4ヶ所で、床面よりの深さは 20 cm である。遺構の北西部分には長軸 65 cm、短軸 40 cm、深さ 40 cm の貯蔵穴が造られていた。

S B 56 と重なって検出された。遺構の検出状態により S B 56 より新しいものとみられる。

出土した遺物は土器片で、壺形土器、甕形土器などの小破片である。

S B 56（実測図第 63 図 48、図版 66・B）

鞍部に造られているため遺存状態は良好である。平面形は隅丸長方形を呈し、規模は壁上面で長軸 294 cm、短軸 228 cm、深さ 15 cm である。柱穴は 4ヶ所で、床面からの深さは 20 cm である。遺構の中央部分には長軸 64 cm、短軸 30 cm、深さ 10 cm の貯蔵穴が造られていた。

S B 55 と重なって検出された。遺構の検出状態により、S B 55 より新しいものとみられる。

出土した遺物は土器片で、壺形土器、甕形土器などの小破片である。

S B 57（実測図第 64 図 49、図版 66・B、67・A、67・B）

S B 57 は尾根の鞍部に造られているため遺存状態は良好である。平面形は不整楕円形を呈し、規模は壁上面で長軸 302 cm、短軸 230 cm、深さ 35 cm である。柱穴は 9ヶ所で、床面からの深さは 20 cm から 35 cm である。遺構の北部分には長軸 115 cm、短軸 69 cm、深さ 12 cm の規模の貯蔵穴が造られていた。

出土した遺物は土器片で、壺形土器、甕形土器などの小破片である。

S B 58（実測図第 64 図 50、図版 67・B）

S B 58 は尾根の鞍部に造られているが西方向が急斜面になるため、南西側壁が耕作により削平されている。平面形は隅丸長方形を呈し、規模は壁上面で長軸 304 cm、短軸 225 cm、壁高 15 cm ほどである。柱穴は 6ヶ所で、床面からの深さは 18 cm から 15 cm である。遺構には炉跡などは検出されなかった。

出土した遺物は土器片で、壺形土器、甕形土器などの小破片であった。

S B 59 (実測図第65図51, 図版67・B)

S B 59は尾根の鞍部に造られているため遺存状態は良好である。平面形は隅丸長方形を呈し、竪穴の規模は壁上面で長軸 280 cm, 短軸 178 cm, 壁高32cmである。柱穴が 6ヶ所で、床面よりの深さは12cmから14cmである。遺構の中央西部分に規模長軸58cm, 短軸45cm, 深さ 8 cmの貯蔵穴が造られていた。

出土した遺物は土器片で、壺形土器、甕形土器などの小破片である。

S B 60 (実測図第65図52, 図版67・B)

S B 60は尾根の鞍部に造られているため遺存状態は良好である。平面形は隅丸長方形を呈し、規模は壁上面で長軸 290 cm, 短軸 190 cm, 深さ60cmである。柱穴は 4ヶ所で、床面からの深さは21cmから25cmであった。遺構には炉跡などは確認されなかった。

出土した遺物は土器片で、壺形土器、甕形土器などの小破片である。(中村 隆行)

S B 61 (実測図第66図53, 図版68・A)

S B 61は尾根上に造られているが遺存状態は良好である。平面形は隅丸長方形を呈し、規模は壁上面で長軸 212 cm, 短軸 141 cm, 壁高23cmである。遺構には柱穴、炉跡などは確認されなかった。

出土した遺物は土器片で、壺形土器、甕形土器などの小破片である。

S B 62 (実測図第66図54, 図版68・A, B)

S B 62は尾根に造られているが、遺存状態は良好である。平面形は不整楕円形を呈し、規模は壁上面で長軸 185 cm, 短軸 170 cm, 壁高21cmである。遺構には柱穴、炉跡などは検出されなかった。

出土した遺物は土器片で、壺形土器、甕形土器などの小破片である。他に遺構内北東部床面に挙大の礫 1 が置かれていた。

S B 63 (実測図第66図55, 図版68・A)

S B 63は尾根部に造られているため南側壁が耕作のため削平されている。平面形は隅丸長方形を呈し、規模は壁上面で長軸 185 cm, 短軸 160 cm, 壁高16cmほどである。遺構には柱穴、炉跡などは確認されなかった。

出土した遺物は土器片で、壺形土器、甕形土器などの小破片である。

S B 64 (実測図第54図24)

S B 64は尾根に造られているが遺存状態は比較的良好である。平面形は隅丸長方形を呈し、規模は壁上面で長軸 287 cm, 短軸 272 cm, 壁高30cmである。柱穴が 4ヶ所認められ、床面からの深さは15cmから19cmである。遺構の中央部分に礫を使った炉跡が認められ、その規模は長軸 82cm, 短軸56cm, 厚さ 3 cmである。遺構の東側に規模長軸58cm, 短軸50cm, 深さ18cmの貯蔵穴 (S P 2) 北側に長軸 140 cm, 短軸94cm, 深さ17cmの貯蔵穴 (S K 7) が造られていた。

出土した遺物は土器片で、壺形土器、甕形土器などの小破片である。

S B 65 (実測図第66図56)

S B 65は尾根部に造られているため傾斜により削平されているが、外形は明らかに出来た。

平面形は不整形を呈し、規模は壁上面で長軸 244 cm、短軸 222 cm、壁高 26 cm である。柱穴、炉跡などは確認されなかった。

S B 66 と重なっており、遺構の検出状態により、S B 66 より古いとみられる。

出土した遺物は土器片で、壺形土器、甕形土器などの小破片である。

S B 66 (実測図第 66 図 56)

S B 66 は尾根部に造られているため傾斜により削平されているが、外形は明らかにすることが出来た。平面形は不整形を呈し、規模は壁上面で長軸 167 cm、短軸 121 cm、壁高 49 cm である。遺構には柱穴や炉跡などは確認されなかった。

S B 65 と重なっており、遺構の検出状態から S B 65 より新しいものとみられる。

出土した遺物は土器片で、壺形土器、甕形土器などの小破片である。(岩井 和志)

S B 67 (実測図第 54 図 25)

S B 67 は尾根部に造られているが遺存状態は比較的良好である。平面形は隅丸長方形を呈し、規模は壁上面で長軸 228 cm、短軸 165 cm、壁高 18 cm である。柱穴は 4 ケ所で、床面よりの深さは 18 cm から 22 cm である。遺構の中央北部には規模が長軸 36 cm、短軸 33 cm、深さ 11 cm の貯蔵穴が造られている。この堅穴は S B 25 と重なった状態で検出された。

出土した遺物は土器片で、壺形土器、甕形土器などの小破片である。

S B 68 (実測図第 67 図 57)

S B 68 は尾根に造られているが遺存状態は比較的良好である。平面形は隅丸長方形を呈し、規模は壁上面で長軸 247 cm、短軸 223 cm、壁高 25 cm ほどである。柱穴は 4 ケ所で、床面よりの深さは 10 cm から 16 cm である。遺構には炉跡などは検出されなかった。

S B 68 は S B 69 と重なっており、出土した遺構から S B 69 より古いとみられる。

出土した遺物は土器片で、量出土した。壺形土器、瓶形土器などの小破片である。

S B 69 (実測図第 67 図 57)

S B 69 は尾根に造られているが、削平は受けておらず遺存状態は良好である。平面形は隅丸正方形を呈し、規模は壁上面で長軸 187 cm、短軸 167 cm、壁高 22 cm である。柱穴は確認されなかった。遺構内中央部には長軸 50 cm、短軸 47 cm、深さ 5 cm の貯蔵穴が造られていた。S B 70 と重なって検出された遺構から S B 69 より新しいとみられる。

出土した遺物は土器片で、壺形土器、瓶形土器などの小破片である。

S B 70 (実測図第 67 図 57)

S B 70 は尾根に造られているが、削平は受けておらず遺存状態は良好である。平面形は不整形を呈し、規模は壁上面で長軸 165 cm、短軸 135 cm、壁高 36 cm である。柱穴は確認されなかった。遺構に接した南西側に長軸 58 cm、短軸 48 cm、深さ 24 cm の貯蔵穴 (S K 12) が造られていた。

S B 69 と重なっており、検出した遺構から S B 69 より新しいとみられる。

出土した遺物は土器片で、壺形土器、瓶形土器などの小破片である。

S B 71 (実測図第67図58)

S B 71は尾根上のため開墾により西壁が削平されている。平面形は隅丸長方形を呈し、規模は壁上面で長軸286cm、短軸165cm、壁高29cmほどである。柱穴は3ヶ所で、床面よりの深さは14cmから16cmであった。遺構には炉跡などは検出されなかった。

出土した遺物は土器片で、壺形土器、瓶形土器などの小破片である。

S B 72 (実測図第67図59)

S B 72は尾根上に造られている為開墾により西壁が削平されている。平面形は隅丸長方形を呈し、規模は壁上面で長軸197cm、短軸185cm、壁高39cmほどである。柱穴は検出されなかった。遺構内中央南部には長軸46cm、短軸36cm、深さ13cmの貯蔵穴が造られていた。

出土した遺物は土器片で、壺形土器、瓶形土器などの小破片である。 (岩井 正治)

S B 73 (実測図第68図60)

S B 73は尾根上に造られており開墾により西壁、北壁、南壁が削平されている。平面形は隅丸長方形を呈し、規模は壁上面で長軸363cm、短軸315cm、壁高26cmほどである。柱穴は7ヶ所で、床面よりの深さは4cmから11cmである。遺構には炉跡などは確認されなかった。

出土した遺物は土器片で、壺形土器、瓶形土器などの小破片である。

S B 74 (実測図第68図61)

S B 74は尾根上に造られており開墾により南壁、東壁が削平されている。平面形は隅丸長方形を呈し、規模は壁上面で長軸266cm、短軸140cm、壁高26cmほどである。柱穴は検出されなかった。炉石による炉跡が遺構中央北部分に造られ、その規模は、長軸48cm、短軸41cm、厚さ3cmである。

出土した遺物は土器片で、壺形土器、瓶形土器などの小破片である。

S B 75 (実測図第68図62)

S B 75は尾根上に造られているため開墾により西壁が削平されている。平面形は隅丸長方形を呈し、規模は壁上面で長軸162cm、短軸残存部80cm、壁高16cmほどである。柱穴、炉跡などは検出されなかった。

出土した遺物は土器片で、壺形土器、瓶形土器などの小破片である。

S B 76 (実測図第68図62)

S B 76は尾根上に造られており、開墾により西壁が削平されている。平面形は隅丸長方形を呈し、規模は壁上面で長軸234cm、短軸残存部75cm、壁高19cmほどである。柱穴、炉跡などは検出されなかった。

出土した遺物は土器片で、壺形土器、甕形土器などの小破片である。

S B 77 (実測図第69図63)

S B 77は尾根上に造られており、開墾に造られているが、遺存状態は比較的良好である。平面形は隅丸長方形を呈し、規模は壁上面で長軸201cm、短軸190cm、壁高20cmほどである。柱穴、炉跡などは確認されなかった。

S B 78と重なっており、検出した遺構からS B 78より古いとみられる。

出土した遺物は土器片で、壺形土器、甕形土器などの小破片である。

S B 78 (実測図第69図63)

S B78は尾根上の西緩斜面に造られているが、遺存状態は良好である。平面形は隅丸長方形を呈し、規模は壁上面で長軸192cm、短軸162cm、壁高28cmである。柱穴、炉跡などは検出されなかった。

S B77と重なっており、検出した遺構からS B77より新しいとみられる。

出土した遺物は土器片で、壺形土器、甕形土器などの小破片である。

S B 79 (実測図第69図69)

S B79は尾根上に西緩斜面に造られているが遺存状態は良好である。平面形は不整長楕円形を呈し、規模は長軸253cm、短軸120cm、深さ21cmである。遺構には炉跡などは検出されなかった。

出土した遺物は土器片で、壺形土器、甕形土器などの小破片である。

S B 80 (実測図第70図65, 図版69・A)

S B80は尾根上に造られており、開墾により西壁が削平されている。平面形は不整円形を呈し、規模は壁上面で長軸170cm、短軸169cm、壁高27cmほどである。柱穴は1ヶ所で、床面からの深さは25cmである。遺構には炉跡などは検出されなかった。

出土した遺物は土器片で、壺形土器、甕形土器などの小破片である。

S B 81 (実測図第70図65)

S B81は尾根上に造られており、開墾により西壁が削平されている。平面形は不整楕円形を呈し、規模は壁上面で長軸168cm、短軸165cm、壁高22cmほどである。柱穴は2ヶ所で、床面からの深さは17cmから15cmである。遺構の西側に長軸82cm、短軸44cm、深さ16cmの貯蔵穴(S K10)が造られていた。

出土した遺物は土器片で、壺形土器、甕形土器などの小破片である。

S B 82 (実測図第70図66)

S B82は尾根に造られているが、遺存状態は比較的良好である。平面形は不整楕円形を呈し、規模は壁上面で長軸193cm、短軸165cm、壁高19cmほどである。遺構内には、柱穴、炉跡などは確認されなかった。

S B10と重なっており、検出した遺構からS B81より新しいとみられる。

出土した遺物は土器片で、壺形土器、甕形土器などの小破片である。

S B 83 (実測図第70図67, 図版69・B, 70・A)

S B83は尾根に造られているが、遺存状態は良好である。平面形は不整楕円形を呈し、規模は壁上面で長軸206cm、短軸174cm、壁高24cmである。遺構内には、柱穴、炉跡などは検出されなかった。

出土した遺物は土器片で、壺形土器、甕形土器などの小破片である。

S B 84 (実測図第70図68, 図版70・A)

S B84は尾根に造られているが、遺存状態は良好である。平面形は隅丸長方形を呈し、規模

は壁上面で長軸 169 cm, 短軸 144 cm, 壁高 21 cm である。柱穴は確認されなかった。遺構内南壁部には長軸 28 cm, 短軸 25 cm, 深さ 8 cm の貯蔵穴が造られていた。

出土した遺物は土器片で、壺形土器、甕形土器などの小破片である。

S B 85 (実測図第71図70, 図版70・A, 71・A)

S B 85は尾根に造られているが、遺存状態は良好である。平面形は隅丸長方形を呈し、規模は壁上面で長軸 198 cm, 短軸 179 cm, 壁高 25 cm である。柱穴は 2 ケ所で、床面からの深さは 11 cm から 12 cm である。遺構の北壁部分には長軸 54 cm, 短軸 44 cm, 深さ 9 cm の貯蔵穴が造られていた。遺構の南側に長軸 54 cm, 短軸 44 cm, 深さ 17 cm の小穴が造られていた。

出土した遺物は土器片で、壺形土器、甕形土器などの小破片である。

S B 86 (実測図第71図71, 図版71・A)

S B 86は尾根に造られているが、遺存状態は良好である。平面形は不整楕円形を呈し、規模は壁上面で長軸 200 cm, 短軸 155 cm, 壁高 16 cm である。柱穴は 4 ケ所で、床面からの深さは 25 cm から 9 cm である。遺構内の西南部分には長軸 56 cm, 短軸 47 cm, 深さ 7 cm の小穴が、また遺構の北側に長軸 85 cm, 短軸 70 cm, 深さ 20 cm の小穴 (S P 7) が造られていた。

出土した遺物は土器片で、壺形土器、甕形土器などの小破片である。

S B 87 (実測図第71図72)

S B 87は尾根部に造られているため西北部壁が開墾により削平されている。平面形は隅丸長方形を呈し、規模は壁上面で長軸 170 cm, 短軸 70 cm, 壁高 18 cm ほどである。柱穴が 2 ケ所で、床面からの深さは 10 cm から 20 cm である。遺構東南端部分には礫を使った炉跡が認められ、その規模は長軸 35 cm, 短軸 30 cm, 厚さ 2 cm であった。

出土した遺物は土器片で、壺形土器、甕形土器などの小破片である。

S B 88 (実測図第71図72)

S B 88は尾根部に造られており、開墾により西壁削平されている。平面形は隅丸長方形を呈し、規模は壁上面で長軸 238 cm, 短軸 163 cm, 壁高 41 cm である。柱穴は 4 ケ所で、床面からの深さは 11 cm から 17 cm である。遺構の中央西部分には長軸 42 cm, 短軸 39 cm, 深さ 15 cm の小穴が造られている。遺構の東側に長軸 91 cm, 短軸 55 cm, 深さ 17 cm の貯蔵穴とみられる土壌と東北側には長軸 96 cm, 短軸 66 cm, 深さ 22 cm の貯蔵用の土壌 (S K 9) が造られていた。

出土した遺物は土器片で、壺形土器、甕形土器などの小破片である。

S B 89 (実測図第72図72)

S B 89は尾根部に造られているが比較的遺存状態は良好である。平面形は隅丸長方形を呈し、規模は壁上部で長軸 203 cm, 短軸 147 cm, 壁高 24 cm ほどである。遺構には柱穴や炉跡などは検出されなかった。遺構の西北側に接して長軸 90 cm, 短軸 77 cm, 深さ 15 cm の貯蔵穴とみられる土壌が造られている。

出土した遺物は土器片で、壺形土器、甕形土器などの小破片である。

S B 90 (実測図第72図72)

S B 90は尾根部に造られているが遺存状態は比較的良好である。平面形は隅丸長方形を呈し、

規模は壁上面で長軸 144 cm, 短軸 125 cm, 深さ 43 cm である。遺構内には柱穴や炉跡などは検出されなかった。

出土した遺物は土器片で, 壺形土器, 甕形土器などの小破片である。

S B 91 (実測図第72図73)

S B 91は尾根部に造られているため西壁が開墾削平されている。平面形は隅丸長方形を呈し, 規模は長軸 155 cm, 短軸 75 cm, 壁高 11 cm ほどである。柱穴が 2 ケ所で, 床面からの深さは 9 cm から 7 cm である。遺構には炉跡等は検出されなかった。

出土した遺物は土器片で, 壺形土器, 甕形土器などの小破片である。

S B 92 (実測図第72図74, 図版72・B)

S B 92は尾根部に造られているが遺存状態は良好である。平面形は不整形円形を呈し, 規模は長軸 158 cm, 短軸 130 cm, 壁高 20 cm である。遺構には柱穴や炉跡は検出されなかった。

出土した遺物は土器片で, 壺形土器, 甕形土器などの小破片である。

S B 93 (実測図第73図75, 図版72・A, B)

S B 93は尾根に造られているが, 遺存状態は比較的良好である。平面形は不整形円形を呈し, 規模は長軸 234 cm, 短軸 202 cm, 壁高 27 cm である。遺構には柱穴や炉跡などは検出されなかった。

出土した遺物は土器片で, 壺形土器, 甕形土器などの小破片である。

S B 94 (実測図第73図76)

S B 94は尾根部に造られているが, 遺存状態は比較的良好である。平面形は隅丸長方形を呈し, 規模は長軸 191 cm, 短軸 153 cm, 壁高 21 cm である。遺構には柱穴や炉跡は検出されなかった。

出土した遺物は土器片で, 壺形土器, 甕形土器などの小破片である。

S B 95 (実測図第73図77, 図版72・B)

S B 95は尾根部に造られているが遺存状態は比較的良好である。平面形は隅丸長方形を呈し, 規模は長軸 256 cm, 短軸 189 cm, 壁高 25 cm である。遺構には柱穴や炉跡などは検出されなかった。

出土した遺物は土器片で, 壺形土器, 甕形土器などの小破片である。

S B 96 (実測図第73図78)

S B 96は尾根部に造られているが遺存状態は比較的良好である。平面形は隅丸長方形を呈し, 規模は長軸 262 cm, 短軸 190 cm, 壁高 22 cm である。遺構には柱穴や炉跡は検出されなかった。

出土した遺物は土器片で, 壺形土器, 甕形土器などの小破片である。

S B 97 (実測図第73図79)

S B 97は稜線上に造られているが遺存状態は良好である。平面形は円形を呈し, 規模は長軸 149 cm, 短軸 146 cm, 壁高 15 cm である。柱穴は 1 ケ所で, 床面からの深さは 32 cm である。遺構には炉跡などは検出されなかった。

出土した遺物は土器片で, 壺形土器, 甕形土器などの小破片である。 (内藤 次郎)

(2) 竪穴附属小屋

SK 2 (実測図第54図34)

S B 35の北東側に40cm離れたところに位置する。主軸を南東から北西におき、平面形は楕円形を呈する。規模は長軸78cm、短軸46cm、深さ14cmである。遺物は土師器で、脚付甕の脚部破片である。胎土、焼成とも悪いものである。S B 35に附属する土壌と考えたい。

SK 3 (実測図第74図81)

S B 35の北東に80cm離れた平担面につくられている。平面形は三角形を呈する。規模は長軸96cm、短軸62cm、深さ26cmである。遺物は土師器の小破片56個である。壺1個体分とみられる。S B 35に附属する土壌と考えたい。

SK 4 (実測図第74図82)

S B 37の南側に130cm離れてつくられている。主軸を北東から南西におき、平面形は楕円形を呈する。規模は長軸168cm、短軸94cm、深さは60cmである。断面形は土壌の中央部に下がるにしたがい深くなっている。遺物は土師器片27個で、脚付甕の胴部と脚部である。S B K 5に附属する土壌と考えたい。

SK 5 (実測図第74図83, 図版73・A)

S B 37の南側に10cm離れたところにつくられている。主軸をほぼ南北におき、平面形は長楕円形を呈する。規模は長さ117cm、幅80cm、深さ25cmである。遺物は土師器片2個で、壺の底部である。S B K 5に附属する土壌と考えたい。

SK 6 (実測図第75図84)

S B 38の北東側に20cm離れた平担面につくられている。主軸を南西から北東にむけ、平面形は長楕円形を呈する。規模は長さ133cm、幅85cm、深さ30cmである。遺物は土師器片7個で、甕と壺の小破片である。S B K 6に附属する土壌と考えたい。

SK 7 (実測図第75図85)

S B 64から北側に40cm離れてつくられている。主軸を東西におき、平面形は楕円形を呈する。規模は長さ140cm、幅94cm、深さ17cmである。遺物は何も出土していないが、S B K 32に附属する土壌と考えたい。

SK 8 (実測図第75図86)

S B 67から北側に40cm離れた緩斜面につくられている。主軸はほぼ南北におき、平面形はほぼ円形に近い。規模は長軸106cm、短軸103cm、深さ14cmである。遺物は何も出土していないが、S B K 35に附属する土壌と考えたい。

SK 9 (実測図第75図87)

S B 56の北東側に25cm離れた西側への緩斜面に位置する。主軸をほぼ東西におき、平面形は楕円形を呈する。規模は長軸96cm、短軸66cm、深さ22cmである。遺物は出土していない。土壌はS B K に附属するものと考えたい。

SK 10 (実測図第70図66)

S B 82の南側に接してつくられている。主軸をほぼ南北におき、平面形は不整形円形を呈する。

規模は長軸110cm、短軸98cm、深さ9cmと浅い。遺物は出土していない。SB82に附属するものと考えたい。

SK11（実測図第75図88）

SB83の北側に接してつくられている。主軸をほぼ東西におき、平面形は楕円形を呈する。規模は長軸120cm、短軸106cm、深さ30cmである。遺物は出土していない。SB83に附属するものと考えたい。

SK12（実測図第72図72）

SB90の北側15cm離れてつくられている。主軸をほぼ東西におき、平面形は楕円形を呈する。規模は長軸90cm、短軸76cm、深さ15cmである。遺物は出土していない。SB90またはSB90と重複しているSB89に附属するものと考えたい。

SK13（実測図第53図23，図版65・B）

SB23とSB52にかけて、主軸を北北東から南南西におく。平面形が隅丸長方形の土壇状遺構である。規模は長軸63cm、短軸25cm、深さ20cmである。遺物は土師器の壺などが出土した。小竪穴と言いがたいがSB52に附属するものと考えたい。

（3）竈

竈SI1（実測図第53図23）

SB50内の東寄りの竈3号の南側につくられている。峯山の北尾根と峯山古墳1号との鞍部につくられている。地山を掘りさげ焚口を南側にして北側に本体と煙出し部を設けている。主軸をほぼ南北におき、平面形は瓢形を呈する。規模は全長161cm、幅、本体部107cm、煙出し部50cm、深さは本体部で63cmである。

焚口部は平面形は正方形を呈し、一辺の長さ50cm、深さ20cmである。底面は平坦であり、ここにしゃがんで火を焚いたであろう。

本体は焚口から急傾斜に下がり傾斜をなして煙出し部に続いている。規模は南北30cm、東西45cmである。

煙出し部は本体から急傾斜でのぼり地上へ続いている。側壁が少し外向になっているが、堆積土のなかに赤褐色土が混っていたことから天井部があったと推定する。

遺物は焚口部、本体、煙出し部とも炭化物を含んだ暗黒色土が堆積しているのみであり出土していない。竈のつくられた時期は遺物もなく明確にしがたいが、SB50の造られた時期と大差がないとみて古墳時代前期とみられる。

竈SI2（実測図第53図23）

竈3号は竈2号の煙出し部先端から10cmほど離れたところを焚口としている。主軸をほぼ南北におき、平面形は瓢形を呈している。規模は全長164cm、最大幅本体部で73cm、深さ38cmである。焚口部は竈2号と同じように南壁が垂直になっており、焚木などは上から入れて燃す構造となっている。竈の本体は平面形は不整形円形を呈し、径75cmあまりである。内壁の東側と西側は上端から10cm～20cm下に幅9cmの帯状の段が設けられており、ここに大型土器などを掛けて使用したものと推定される。煙出し部は本体の底部から15cmほど上がって25cmほど平坦とな

り、ここから傾斜となり地上へと続いている。竪穴内の部分には内側が少しえぐられていたことから天井部があり、煙突状となって外部へ通じていたものとみられる。またこの煙出し部の東側には本体側壁上部から「」型に煙突が造られている。煙突の先端は竪穴内の壁近くに抜けている。規模は水平部分が長さ26cm、直径16cm、垂直部分は高さ20cm、直径14cmである。

遺物は竈内に微細な炭化物を多量に含んだ暗黒色土が堆積していた以外は何も出土していない。竈のつくられた時期はS B50と同時と推定され、古墳時代前期であろう。また竈1号との築造時期の前後関係は相方とも遺物がなく判定が困難であるが、2号を先に造り、ある期間使用したのち廃棄して竪穴壁沿に3号をつくったものと推定される。

(4) 竈

竈 S I 6 (実測図第76図89)

S B35の西側170cm離れた平坦部につくられている土師器焼成用の竈である。地山を掘りさげ、北側を焚口として南側へゆるやかにのぼり、本体と煙出し部から成っている。主軸をほぼ南北にむけ、平面形は瓢形を呈する。規模は全長183cm、幅は焚口部66cm、本体中央部53cm、煙出し部56cm、深さ焚口部44cm、本体23cmである。

焚口部は上部が破壊されており不明であるが、焚口部直下の堆積土中に赤褐色の焼土があったことから天井部が落ちたものとみられる。

本体の平面形は円形を呈し、直径161cm程度である。内壁はえぐられており断面形は楕円形を呈する。竈内の堆積土は微細な炭化物を含んだ暗黒色土の中に赤褐色の焼土があり、天井があったものと推定される。

煙出し部は竈本体の底部から比較的急傾斜で本体と接続している。煙出し部は長さ80cm前後とみられる。幅は竈本体との接続部が最も狭く52cmである。先端は22cmである。底部から炭化物のなかに赤褐色土が混っていたことから天井部があったと推定する。

遺物は焚口部から本体にかけて炭化物を含んだ暗黒褐色の堆積土から出土した古式を呈する土師器の小片である。竈のつくられた時期は出土した遺物が土師器の細片であり明かにしにくいですが、この竪穴住居跡が造られた時期と同時とみて、古墳時代前期と推定される。

(5) 小 穴

S P 2 (実測図第76図91)

S B64の東側に20cm離れたところにつくられている。平面形は不整円形を呈する。規模は長軸59cm、短軸51cm、深さ7cmである。遺物は何も出土しなかったが、有機質で遺存しにくいものであったかもしれない。S B K に附属する土壌と考えたい。

S P 3 (実測図第77図92)

S B67の北側に250cm離れた緩斜面に位置する。主軸をほぼ南北におき、平面形は楕円形を呈する。規模は長軸95cm、短軸70cm、深さ12cmである。遺物は土師器片である。土師器片は3片で、壺の胴部である。S B K に附属する土壌と考えたい。

S P 4 (実測図第77図93)

S F 4の北西に50cm離れた傾斜面に位置する。主軸とほぼ東西におき、平面形は楕円形を呈

する。規模は長軸68cm, 短軸37cm, 深さ14cmである。遺物は弥生時代の土器片である。土器片は5個であり, 風化が著しくはっきりしないが壺片であろう。

S P 5 (実測図第77図94)

S F 4の北西側に26cm離れてつくられている。主軸をほぼ東西にむけ, 平面形は不整形である。規模は長軸69cm, 短軸55cm, 深さ16cmである。遺物は土師器の小破片2個である。住居から離れており用途は詳かでない。

S P 6 (実測図第77図95)

S B87の東側80cm離れた西に下る傾斜面に位置する。主軸をほぼ南北におき, 平面形は楕円形を呈する。規模は長軸91cm, 短軸55cm, 深さ17cmである。遺物は何も出土しなかった。S B87の附属する土壌と考えたい。

S P 7 (実測図第77図96)

S B83の南東側に30cm離れた緩斜面に位置する。主軸をほぼ東西におき, 平面形は楕円形を呈する。規模は長軸85cm, 短軸70cm, 深さ20cmである。遺物は土師器の小破片3個である。S B83に附属する土壌と考えたい。 (岩井 克允)

(6) 土 壙 墓

S F 5 (実測図第81図105, 図版78・B)

S C 1の北西に130cm離れた平坦面に造られている。土壌は主軸を南北にむけ, 平面形は不整形長方形を呈する。規模は長軸200cm, 幅91cm, 深さ12cmである。遺物は出土していない。

S F 6 (実測図第81図105, 図版78・B)

S F 5の南側120cm離れた平坦面に位置する。土壌は主軸をほぼ東西にむけ, 平面形は不整形長方形を呈する。規模は長さ186cm, 幅89cm, 深さは削平されており6cmである。遺物は何も出土していない。

S F 7 (実測図第82図106)

S F 6の南側に30cm離れた削平されている平坦面に造られている。土壌は主軸をほぼ東西におき, 平面形は不整形長方形を呈する。規模は長さ92cm, 幅63cm, 深さ13cmである。遺物は何も出土していない。

S F 8 (実測図第82図107, 図版79・A)

S F 8はS F 7から南に5m離れた尾根が南西に下る緩斜面に位置する。土壌は主軸を南北におき, 平面形は長方形を呈する。規模は長さ155cm, 幅55cm, 深さ20cmである。遺物は何も出土していない。

S F 9 (実測図第82図108, 図版79・B)

S F 8の東側が重複されており西壁が削られている。主軸をほぼ東西におき, 平面形は長方形を呈する。規模は長さ141cm, 幅68cm, 深さ23cmである。遺物は出土していない。

S F 10 (実測図第83図109, 図版79・B)

S F 9の南側15cm離れた傾斜面に位置する。主軸をほぼ南北におき, 平面形は長方形を呈する。規模は長さ134cm, 幅87cm, 深さ16cmである。遺物は出土していない。

S F 11 (実測図第83図 110, 図版79・B)

S F 10から西側へ10m離れた緩斜面に位置する。主軸をほぼ東西にむけ、平面形は楕円形を呈する。規模は長さ150cm, 幅122cm, 深さ19cmである。遺物は出土していない。

S F 12 (実測図第83図 111, 図版79・B)

S F 11からの西側へ440cm離れた緩斜面に位置する。主軸を南北におき、平面形は楕円形を呈する。規模は長さ208cm, 幅105cm, 深さ22cmである。遺物は出土していない。

S F 13 (実測図第83図 112)

S F 12からの南西側に420cm離れた緩斜面に位置する。土壌は耕作により削平されてきた。主軸を北西から南東におき、平面形は楕円形を呈する。規模は長さ156cm, 幅91cm, 深さ20cmである。遺物は土師器片が4片である。

S F 14 (実測図第84図 113, 図版73・B)

S F 13の東側に60cm離れた緩斜面に位置する。平面形は不整形を呈し、規模は長さ100cm, 幅90cm, 深さ17cmである。遺物は何も出土していない。 (岩井 正治)

S F 15 (実測図第84図 114)

S F 14の南側に10cm離れた南に下がる緩斜面に位置する。主軸をほぼ東西におき、平面形は不整形楕円形を呈する。規模は長さ155cm, 幅82cm, 深さ12cmである。遺物は土師器片が5片である。

S F 16

S F 15の南側に50cm離れた南にさがる緩斜面に位置する。傾斜面と耕作により削平されているが遺存状態は良好である。平面形は不整形長方形を呈する。規模は長さ172cm, 幅62cm, 深さ26cmである。遺物は土師器片2片である。

S F 17

S B 93の東側に30cm離れた西にさがる緩斜面に位置する。主軸を南北におき、平面形は不整形楕円形を呈する。規模は長さ140cm, 幅87cm, 深さ30cmである。遺物は何も出土していない。

(7) 溝状遺構

溝 S D 2 (実測図第78図97)

峯山の稜線南端・谷通古墳の西側平坦部が北へゆるやかな角度で傾斜をはじめるところで、K D 1の南側に位置する。溝の流れる方向は東北東から西南西に流れる。規模は長さ780cm, 幅は中央部においては30cm, 深さ8cmである。断面形はU字形を呈する。溝は西端が溝2号の東支流に接続していたものとみられるが耕作およびトレンチの下手際により削平され消滅した。

遺物は土師器の細片が溝全体から出土している。土師器は細片であり形態は不明であるが、胎土・燃成とも良好である。溝のつくられた時期は遺物が細片であり判定し難いが、隣接するK D 1と同時期とみて古墳時代前期と考えたい。

溝 S D 2 (実測図第78図98, 図版75・B)

峯山の稜線中央に築造されている峯山古墳1号西側裾部地山はやや高まりをみせ西へ傾斜している。一方北尾根の南側は峯山古墳1号との鞍部となって西へのびている。溝2号はこの鞍

部に沿って北東から南西へ流れるものと南東から北西側へ流れるものが一点に集まりY型を呈する。

規模は北東側の溝が長さ750cm、幅78cm、深さ14cmである。南東側からの溝(SD2-B)は長さ480cm、幅72cm、深さ10cmである。断面形はいずれもU字形を呈する。SD2-Bは溝1号の西端と続いている。

遺物は土師器の細片が溝全域から出土している。土師器は細片であり形態は不明であるが、胎土・焼成とも良好である。溝のつくられた時期は遺物が細片であり詳かでないが、隣接するKD16などと同時期とみられ古墳時代前期と考えたい。(中村 隆行)

3. 奈良時代の遺構

(1) 祭祀遺構SC1

峯山遺跡のなかで最も高位の北尾根最頂部の平坦面に位置する。標高83.3mである。かつて神明神社の奥院があったと言われているところである。土坑は地表に奉大の川原石をおいて目印とし、平面形は不整楕円形を呈し、規模は長軸272cm、短軸210cm、深さ74cmである。土壌内の底面から25cm上に10cmから25cmの川原石が検出されている。遺物は土壌内から土器片、鉄製品である。土器片は須恵器の大形甕片である。胎土は精選され、焼成は良好である。自然釉がみられる。鉄製品は釘3本である。長さは2.7cmのものが2本、3.4cmのものが1本である。

土壌が造られた時期は出土した須恵器から言えば7世紀後半であるが、他の出土遺物を考慮に入れると平安時代まで営まれた祭祀遺構と考えたい。

4. 鎌倉時代の遺構

(1) 岩井戸

岩井戸SE1(実測図第79図99, 図版76・A)

SE1は峯山遺跡北側稜線を下った先端部近くの竪穴群のある南側急斜面、標高63mのところ位置する。

岩井戸は主軸を南北に向け、その平面形は楕円形を呈する。規模は長軸145cm、短軸110cm、深さ52cm、断面形は広口の壺のような形を呈する。胴部南壁中腹より溝が掘られ満水になると水が流れ落ちる構造である。胴部北壁上端より上部は自然崩落により岩盤が露出し凹凸が著しい。胴部の岩盤には、跡が顕著にみられる。岩井戸のつくられた時期はSE2と同時期とみて鎌倉時代と考える。

岩井戸SE2(実測図第79図100, 図版76・B)

SE2はSE1の東側に4.8m離れた南側急斜面、標高64m地点に位置する。

岩井戸は主軸を北西より南東方向に向け、その平面形は楕円形を呈する。規模は長軸150cm、短軸110cm、深さ65cm、断面形はU形を呈する。SE2もSE1と同様、胴部北壁上端より上部は自然崩落し岩盤が露出し凹凸が著しい。岩井戸の底面部には南西方向から北東方向にのびる亀裂が生じたため使用されなかったことと思われる。

遺物は岩井戸内部からは出土しなかったが、岩井戸の足場にあたる地山からカワラケの坏小片1が出土した。1号と同様胴部北壁にノミ跡がみられる。岩井戸の造られた時期は、遺物から鎌倉時代と考える。

(2) 土 壙 墓

S F 18

土壙は中央尾根の北側裾部に位置する。主軸をN-22-Wに向けている。平面形は楕円形を呈し、規模は長軸195cm、短軸108cm、深さ25cmである。土壙はS F 19と重複し、これを切断している。出土した遺物は土器で、土壙内の北西隅から行基焼5個が口縁部を上にして出土した。土壙の造られた時期は鎌倉時代であろう。

S F 19

S F 18と重複し、中央部分を除いて南側はS F 18に北側はS F 20に切られている。主軸をN-4-Wに向けている。平面形は楕円形を呈し、規模は長軸156cm、短軸82cm、深さ22cmである。遺物は土器で、土壙内の南西隅から行基焼4個が口縁部を上にして出土した。土壙の造られた時期は土器から鎌倉時代であろう。

S F 20

S F 18の北側を切って造られている。主軸をN-22-Wに向け、平面形は楕円形を呈する。規模は長軸145cm、短軸91cm、深さ22cmである。遺物は何も出土しなかった。土壙墓の営まれた時期はS F 18、S F 19と大差はなく鎌倉時代と考える。 (岩井 克允)

第13章 峯山古墳群

I. 峯山古墳 1号

(1) 位置と墳丘 (実測図第46図1, 図版82・A)

峯山古墳は峯山遺跡の最南の頂部に位置し、標高は79.8mである。南側傾斜面には神明横穴群がある。東部斜面には谷通り横穴群、さらにオボレ谷を隔てて御堂ヶ谷横穴群、さらにオボレ谷を隔てて御堂ヶ谷横穴群が分布している。西側緩斜面には峯山遺跡の住居跡群があり、その先に山郷山遺跡、さらに下方は逆川により形成された沖積平野が望まれる。

墳丘は稜線の頂部を利用して造られており規模は直径8m、高さ1.5mであった。東側は自然崩落しており、西側斜面は耕作により削平され原形を大きくそこなわれている。

(2) 埋葬施設 (実測図第86図118, 図版82・B)

地山を掘り下げて埋葬壙をつくり木棺を直葬している。埋葬壙は主軸をほぼ南北にむけ、平面形は長方形を呈する。規模は長さ155cm、幅は中央部で65cm、深さ残存高17cmである。

(3) 遺物

遺物は土壌内には黒褐色土がつまっていたのみで、副葬品は何も出土しなかった。恐らく遺存しにくい有機質のものであろう。また封土からも出土しなかった

(4) まとめ

占地にすぐれ、内部構造が地山を掘り下げて墓壙を掘り、木棺を直葬していることは2号墳と相似している。遺物が何も出土していないものゝこの古墳の被葬者は木棺の長さ、幅がやや小さいことから成人に達していない者と考えたい。

II. 峯山古墳 2号

(1) 位置と環境 (実測図第46図1, 図版82・A)

峯山遺跡の北尾根の南側、標高80mの尾根の高まりを利用して築造されている。占地は東側の急涯な地形となり選地はよいものゝ地形に制約されている。墳丘北側は北尾根の鞍部となり竪穴住居跡となっている。西側から南側にかけても同様である。墳丘南側裾部には峯山古墳3号が築造されている。

(2) 墳 丘

墳丘は開墾のため大きく変形し、墳丘東側上には南北に掘られた溝により切断され、墳丘の西側、北側は開墾のため裾部は確認できない。南側は峯山古墳 2 号の裾を切って築造されている。墳丘の規模は直径 8 m、高さ 1 m 程度とみられる。

(3) 埋葬施設（実測図第73図79，図版83・A）

地山を掘りさげて埋葬墳をつくり木棺を直葬している。埋葬墳は主軸を N-6°-E にむけ、平面形は長方形を呈する。土壌は KH65 と重複した耕作により削平が著しい。規模は長さ 212cm、幅 74cm、深さ 8 cm である。

(4) 遺 物

埋葬墳からは土師器の細片が数片出土しているにすぎない。埋葬墳から西側へ 50cm 離れた地山面から須恵器片が 2 片出土している。須恵器片は坏蓋で第Ⅲ型式に属する。

(5) ま と め

埋葬施設が地山を掘りさげて墓墳をつくり木棺を直葬していることは隣接する 1 号墳、3 号墳と相似ている。古墳の造られた時期については墓墳西側地山面から出土した須恵器片が第Ⅲ型式であり、西側トレンチ裾部から出土の土師器を考慮に入れて 5 世紀後半まで遡り、6 世紀中葉まで降る可能性もある。被葬者は成人で、この地域でも地位の高い者と考える。

Ⅲ． 峯 山 古 墳 3 号

(1) 位置と墳丘（実測図第46図1，図版82・A）

峯山古墳 2 号から南側への緩頂斜上に築造されている。占地は峯山 1 号墳の墳丘南側裾部を切らざるを得ない地形的制約をうけている。墳丘は削平により変形し、東側は溝、西側は開墾により削平している。墳丘の規模は詳かでない。

(2) 埋葬施設（実測図第87図119，図版83・B）

地山を掘りこんで土壌をつくり木棺を直葬している。土壌は主軸を N-22°-W におき、平面形は長方形を呈する。土壌は東側壁部は地山深く耕され遺構は浅くなっている。西側は東側よりも比較的良好に遺存している。北側は木棺の両端の小口部が明瞭に残っている南側は耕され遺構底部のみ存す。規模は長さ 144 cm、幅 65 cm、深さ 13 cm、北側小口部の長さ 62 cm、幅 12 cm、深さ 12 cm である。床面は角礫が中央から東側にかけて多くみられたが、それは恐らく木棺の上に角礫をのせ土を被せた後崩れ落ちたためと推定される。

(3) 遺 構

埋葬墳からは遺物は底部から人骨粉が風化したとみられる砂状の暗灰色土が検出された外は遺物は出土しなかった。

(4) 附属土墳

埋葬墳北側から15m離れた南への緩斜面に位置する。土坑の平面形は楕円形を呈し、規模は長さ84cm、幅69cm、深さ23cmである。遺物は土師器の小片2である。この外土坑内には暗褐色土が詰っていたことから遺存しにくい有機質のものが埋められていたであろう。

(5) ま と め

埋葬施設が地山を掘り下げて土墳をつくり、木棺を直葬していることは隣接する1号、2号と相似ている。遺構の大きさから推定して大人の埋葬墳ではなく、恐らく小人埋葬であろう。葬られた時期については2号墳の墓壇西側地山面から出土した須恵器片が第Ⅲ型式であるが、3号墳南西側トレンチ裾部から土師器の第Ⅱ型式が出土しているので年代として5世紀後半まで遡ることも推定されるが、須恵器が第Ⅲ型式であるので6世紀中葉まで降る可能性もある。

IV. ま と め

1. 立地について

峯山の稜線が終ろうとする地点から西側へ「川」字状に三条の尾根が下方の水田に裾をのびしている。今回調査の対象となったのはこのうち、峯山の最頂部からのびる北尾根と南側のオボレ谷を隔てた南の中尾根の上部である。北尾根では標高65.5mから85.5mのはゞ緩斜面に、中尾根では標高71mから79mの緩斜面に集落を営んでいた。掛川市内からはこれまで調査した天王山遺跡、大多郎遺跡などの集落は標高53mから65mほどに所在しているが、峯山遺跡の集落跡はこれよりも、さらに高い標高80m前後に所在している。周辺の集落を一眺でき、また湧水も涸れることのないところである。

2. 分布について

峯山遺跡から検出された遺構は弥生時代、古墳時代、奈良時代、鎌倉時代におよんでいる。これらを古い時代から概略を示すと次のとおりである。

(1) 弥生時代の遺構

弥生時代の遺構は峯山の稜線が終ろうとする地点、標高約77mの西側鞍部緩斜面平坦部とその西側の尾根傲隆地および中尾根の標高68mから78mにおよぶ緩斜面に分布し、峯山稜線鞍部に竪穴、屋外竈、北尾根の中ほどでテラス状平坦部から急傾斜面に竪穴、土壇、小穴が、下方

に堅穴5軒と類類を隔て、分布しは、5つのグループに分けられる。

(2) 古墳時代の遺構

古墳時代の遺構は峯山稜線上の標高80m前後に古墳群、標高77m前後の西側鞍部緩斜面に堅穴、小屋、小穴、窯、溝状遺構が、峯山最頂部と峯山古墳2号の標高79mの鞍部に堅穴、北尾根上部標高80mから77mのや、急な斜面には土壙墓群が所在している。この標高75m附近ではテラス状に平坦面をなし堅穴などが11軒ほど営まれている。こゝから下方の標高70m附近では斜面が急傾をなしているが、堅穴、小穴、土壙墓が営まれている。下方の標高65mあたりは緩斜面でや、平坦状を呈するため、多くの堅穴、小屋などが営まれている。

(3) 奈良時代の遺構

奈良時代の遺構は1基のみで、標高85.5mの峯山最頂部の平坦面で、峯山稜線南端下方に鎮座する神明神社の奥ノ院跡と伝承されているところに営まれていた祭祀遺跡である。

(4) 鎌倉時代の遺構

峯山稜線西側の標高77.5m前後の鞍部緩斜面に陶質土器を副葬した土壙墓で、3基が南北方向に重りあって営まれていた。

3. 遺構について

峯山遺跡から検出された遺構を一覧表に示すと次のとおりである。

	堅穴	竈	窯	小穴	土壙墓	溝状遺構	古墳	岩井戸	祭祀遺構
弥生時代	39	3		1	4				
古墳時代	74	2	1	7	13	2	3		
奈良時代									1
鎌倉時代								2	

のあわせて152の多くである。

(1) 弥生時代の遺構

弥生時代の遺構は堅穴39と竈3、小穴1、土壙墓4のあわせて47基である。

堅穴は平面形が円形と楕円形のもが大部分であるがなかには隅丸長方形のものもある。これは集落を営んだ時期の差であろうか。堅穴のなかで最も大規模なものはSB1で、集落の中心的な堅穴である。直径6mを超すもので、堅穴中央に川原石を置き並べた炉を施けている。そして大形蛤刃石斧や壺形土器が出土している。この外の堅穴には直径1.3mの小規模のものも含まれている。これらはすべて住居跡として使用されたものではなく、小屋として使用されたものとみられる。小屋を含めた堅穴の柱穴の有無をみると柱穴のあるもの20軒、ないもの12軒である。又炉跡についてみると、炉のあるもの7軒、ないもの25軒である。小屋とみられるものに柱穴や炉跡があり、見張的性格をもつものであろう。

堅穴から検出された遺物は土器と石器であるが、その出土量はごくわずかである。

土器は小破片であり、完形品あるいは復元可能な土器は数点にすぎない。土器の小破片は壺

表 8 弥生時代竪穴一覧表

番号	平面形	規模 (cm)			柱穴	炉等および位置	遺物	備考
		長軸	短軸	深さ				
S B 1	楕円	604	564	15	13	炉：中央	土器片，摩製石斧	
“ 2	楕円	353	(現)180	23	5		土器片	
“ 3	楕円	253	219	29			“	
“ 4	楕円	225	(現)144	25	4		“	
“ 5	円	413	376	29	10	炉：北壁より	“	
“ 6	円	518	480	30	11		“	
“ 7	長楕円	201	137	18			“	
“ 8	長楕円	307	220	29	4		“	
“ 9	不整円	348	322	22	9		“	
“ 10	楕円	152	119	30		焼土：北壁より	“	
“ 11	長楕円	211	102	12	2		片刃石斧	
“ 12	楕円	336	263	13	6	焼土：中央	“，炭化物	
“ 13	“	273	196	23				
“ 14	“	206	167	11	1			
“ 15	不整円	177	164	19	4	焼土：中央		
“ 16	“	151	140	28		焼土：北壁より		
“ 17	楕円	323	175	36	2		土器片	
“ 18	“	237	155	32	7		“	
“ 19	不整長楕円	252	162	16	6		“	
“ 20	隅丸長方形	281	238	20	8		“	
“ 21	円	130	130	20	3		“	
“ 22	“	131	124	17	1		“	
“ 23	隅丸長方形	234	183	43	4		“	
“ 24	不整円	308	268	31	6	炉：中央	“	
“ 25	隅丸長方形	217	137	24	2		“	
“ 26	“	190	121	32				
“ 27	不整円	203	190	18				
“ 28	隅丸長方形	210	119	25				
“ 29	不整円	153	131	25				
“ 30	不整楕円	221	173	27				
“ 31	楕円	216	178	26				
“ 32	“	158	137	38				

形土器，甕形土器などである。石器では摩製石斧と片刃石斧がある。

竈は3基である。S I 3，S I 4，S I 5とも標高く部が一個になるように近接して扇状に

表9 屋外竈一覧

遺構番号	平面形	規模 (cm)			遺物	時期	備考
		長軸	短軸	深さ			
SI3	平面形	116	67	18	土器片	弥生時代後期	
" 4	"	100	66	20	"	" "	
" 5	"	99	60	14	"	" "	

築かれている。いずれも楕円形である。焚口は幅広く、煙出し部にゆくにしたがい細くなっている。竈は堅穴よりもやや離れて、稜線の鞍部に築かれており、祭祀儀礼を行ったものではなからうか。そして近くの堅穴SB23は祭祀儀礼小屋ではなかったらうか。小穴のSP1はSB1の附屋施設であらう。

表10 弥生時代土墳墓一覧表

遺構番号	平面形	規模 (cm)			遺物	時期	備考
		長軸	短軸	深さ			
SF1	隅丸長方形	273	101	27	土器片		
" 2	"	197	73	13	"		
" 3	"	173	57	13	"		
" 4	"	162	90	23	"		

土墳墓は4基と少ない。そのうち3基は中尾根の堅穴の近くに営まれ、他の一つは北尾根中ほどの急斜面に営まれている。いずれも隅丸長方形をするものである。

(2) 古墳時代の遺構

古墳時代の遺構は堅穴74、竈2、窯1、小穴7、土墳墓13、溝状遺構2、古墳3のあわせて102基である。

表11—① 峯山遺跡古墳時代堅穴一覧表

遺構番号	平面形	規模 (cm)			柱穴	炉等及び位置	堅穴内土壙	遺物	時期	備考
		長軸	短軸	深さ						
SB33	隅丸長方形	475	365	20	14		1	土器片		
" 34	"	337	236	19	8	炉：中央南		"		
" 35	"	510	350	26	11		2	"		
" 36	不整長楕円	434	271	24	11	炉：中央	1	"		
" 37	不整円	356	292	26	8			"		
" 38	隅丸長方形	420	205	16	10		2	"		
" 39	"	265	161	19	8			"		
" 40	楕円形	196	161	49		炉：北壁		"		
" 41	推隅丸長方形	372	63	26	3					
" 42	隅丸長方形	251	197	25	4	炉：中央		土器片		
" 43	不整長楕円	161	112	28		炉：中央南西		"		

表11-② 峯山遺跡古墳時代竪穴一覽表

遺番	構号	平面形	規模 (cm)			柱穴	炉等及び位置	竪穴内 土 壙	遺 物	時 期	備 考
			長軸	短軸	深さ						
S B44		隅丸長方形	240	208	77				土器片		
" 45		"	200	149	27				"		
" 46		"	316	226	13	4			"		
" 47		"	197	151	29	4		1	"		
" 48		"	281	245	21	4	炉(カマド)：中央北		"		
" 49		不整円形	147	122	10	1					
" 50		正 方 形	332	319	20	1			土器片		
" 51		隅丸長方形	289	202	27						
" 52		"	205	166	24			2	土器片		
" 53		不整長楕円	390	280	20	12	炉：中央西側		"		
" 54		隅丸長方形	318	275	10	7		1	"		
" 55		"	238	212	7	4		1	"		
" 56		"	294	228	15	4		1			
" 57		不整楕円形	302	230	35	9		1	土器片		
" 58		隅丸長方形	304	225	15	6			"		
" 59		"	280	178	32	6		1	"		
" 60		"	290	190	60	4			"		
" 61		"	212	141	23						
" 62		不整楕円形	185	170	21						
" 63		隅丸長方形	185	160	16						
" 64		"	287	272	30	4	炉：中央	1	土器片		
" 65		"	244	222	26				"		
" 66		不 整 円 形	167	121	49				"		
" 67		"	228	165	18	4					
" 68		"	247	223	25	4		1	土器片		
" 69		隅丸長方形	187	167	22			1	"		
" 70		不 整 円 形	155	135	36				"		
" 71		"	286	165	17	3			"		
" 72		"	197	185	30			1			
" 73		"	363	315	26	7			土器片		
" 74		"	266	140	26		炉：北壁		"		
" 75		"	162	80	16						
" 76		"	234	75	19						
" 77		隅丸長方形	201	190	20						
" 78		"	192	162	28						

表11—③ 峯山遺跡古墳時代堅穴一覽表

遺番	構号	平面形	規模 (cm)			柱穴	炉等及び位置	堅穴内 土 壙	遺 物	時 期	備 考
			長軸	短軸	深さ						
S B79		不整長楕円	253	120	21						
" 80		不 整 円 形	170	169	27	1					
" 81		不整楕円形	168	165	22	2		1			
" 82		不 整 楕 円	193	165	19						
" 83		"	206	174	24				土器片		
" 84		隅丸長方形	169	144	21			1			
" 85		"	198	179	25	2		1	土器片		
" 86		不整楕円形	200	155	16	4		1	"		
" 87		隅丸長方形	170	70	18	2	炉：南東隅		"		
" 88		"	238	163	41	4		1	"		
" 89		"	203	147	24				"		
" 90		"	144	125	43				"		
" 91		"	155	75	11	2			"		
" 92		不 整 円	158	130	20						
" 93		不整楕円形	234	202	27				土器片		
" 94		隅丸長方形	191	153	21				"		
" 95		"	256	189	25				"		
" 96		"	262	190	22						
" 97		楕 円 形	149	146	15				土器片		

表12 古墳時代堅穴付属小堅穴一覽表

番 号	平 面 形	規 模 (cm)			遺 物	時 期	備 考
		長 軸	短 軸	深 さ			
S K 2	不 整 楕 円	78	46	14	土 器 片	古墳時代前期	堅穴本体番号S B34
3	三 角 形	96	62	26	"	" "	" S B35
4	不整長楕円	168	94	30	"	" "	" S B37
5	"	117	80	25	"	" "	" "
6	"	133	85	30	"	" "	" S B38
7	不 整 楕 円	140	94	17	"	" "	" S B64
8	不 整 円	106	103	14	"	" "	" S B67
9	不 整 楕 円	96	66	22	"	" "	" S B87
10	"	110	98	9	"	" "	" S B82
11	"	120	106	30	"	" "	" S B83
12	"	90	76	15	"	" "	" S B89又は90
13	隅丸長方形	63	25	20	"	" "	" S B52

堅穴は平面形が隅丸長方形を呈するものが多くをしめるが、なかには正方形に近いもの、楕円形を呈するものもある。最大規模の堅穴は長軸 5.1 m、短軸 3.5 m のものである。小形のものでは長軸 1.6 m、短軸 0.8 m のものが最小である。これも弥生時代の堅穴と同様に住居用ばかりでなく小屋とみられるものも含まれている。

これらの堅穴をおゝむね住居用と小屋などに分類してみると住居用は36軒である。このうち柱穴のあるもの27軒、無いもの9軒である。小屋29軒のうち柱穴のあるもの9軒、無いもの20軒である。

遺物は土器である。出土量はごく少なく、完形品あるいは復元可能なものは数点で、他は小破片である。土器片は壺形土器や甕形土器の破片である。

竈2基はいずれもS B50の内部に築かれていたもので、大形である。S I 2は堅穴S B50の

表13 古墳時代小穴一覧表

番号	平面形	規模 (cm)			遺物	時期	備考
		長軸	短軸	深さ			
SP2	楕円	59	51	17		古墳時代前期	
3	"	95	70	10	土器片	" "	
4	不整楕円	68	37	14	"	" "	
5	不整円	69	55	16	"	" "	
6	楕円	91	55	10		" "	
7	不整楕円	85	70	20	土器片	" "	
8	丹形				"	" "	

表14 古墳時代土墳墓一覧表

遺番	構号	平面形	規模 (cm)			遺物	時期	備考
			長軸	短軸	深さ			
SF5		不整長楕円	200	91	12		古墳時代前期	
" 6		"	186	89	6		" "	
" 7		"	92	63	13		" "	
" 8		長楕円	155	55	20		" "	
" 9		隅丸長方形 不整楕円	141	68	23		" "	
" 10		"	134	87	16		" "	
" 11		"	150	122	19		" "	
" 12		不整長楕円	208	105	22		" "	
" 13		"	156	91	20	土器片	" "	
" 14		不整楕円	100	90	17		" "	
" 15		不整長楕円	155	82	12	土器片	" "	
" 16		"	172	62	26	"	" "	
" 17		"	140	87	30		" "	

北壁沿で外部へ煙出しを施けている。

窯 S I 6 は竪穴群より少し離れて築かれている。焼成部内には土師器細片が灰黒褐色土に混って出土しており、土師器製造用の窯と考える。

小穴は7基である。S P 2 から S P 7 までの6基が北尾根に営まれている。S P 8 は峯山古墳3号の副室と考えたい。

土壙墓は峯山最頂部から北尾根の上部にかけて12基、下方に1基のあわせて13基である。

5つのグループに分けられるが、ほぼ特定の場所に集中している。平面形はいずれも隅丸長方形で、浅いものである。遺物は土師器細片のみである。

溝状遺構は峯山稜線と中尾根上部の微隆地との間に北西へさがる微緩斜面の南側と竪穴群をはさんで北側にY字形に掘られている。S D 1 は東西方向に直線上に掘られ、上部からの雨水

表15 溝状遺構一覧表

遺構番号	平面形	規模 (cm)			遺物	時期	備考
		長軸	短軸	深さ			
S D 1	直線状	780	30	8	土器片	古墳時代前期	
" 2	Y字状(北東方向)	750	78	14	"	"	
" 2	" (南東方向)	480	72	10	"	"	

流入を防いでいる。S D 2 は竪穴群の北端で竪穴を挟むようにY字形である。溝底面からは土師器細片が出土しており、溝が築かれた時期は竪穴群が営まれた古墳時代前期と同時期と考える。

(3) 奈良時代の遺構

奈良時代の遺構は祭祀用とみられる土壙1基である。土壙は地表に拳大の川原石を低く積みあげ、その下の地山を隅円方形に掘りさげて土壙をつくっている。

土壙は長さ272cm、幅210cm、深さ74cmの大形で、断面形は深皿状である。土壙内の底面から25cm上部には川原石が平坦状に遺存していた。

出土遺物は須恵器片数片と釘3本である。釘は木製の箱状のものに使用されたものとみられる。埋方内方法は土壙を掘り、木製の箱を埋納して土をかけ、さらに封土を盛った上に川原石を積み上げたものとみられる。そして木製の箱が腐蝕して封土が沈下し、地表の積みあげた川原石のみが水平となった地表に露呈していた。土壙の営まれていた峯山頂部は峯山稜線南方に鎮座する神明神社の奥ノ院跡の伝承があり、これに係る遺構ではないかと推定され、営まれた時期は出土した須恵器片から奈良時代と考える。

(4) 鎌倉時代の遺構

岩井戸は北尾根下方の南崖面をえぐって2基つくられている浅岩井戸である。急斜面に人間1人歩ける幅の小道をつくり急崖面の岩盤をタガネを使用して掘り抜いている。S E 1 の湧水は千数百年経た今日でも豊富である。S E 2 は岩盤の質が悪く、奥壁から底面に達する亀裂が入っており、完成後間もなく使用不能になったことが井戸内の堆積土から明らかとなった。両浅岩井戸とも出土遺物はないが、S E 2 の提上からのカワラケが掘られた時期のものとする

表16 岩井戸一覽表

遺番	構号	平面形	規 模 (cm)			遺 物	時 期	備 考
			長 軸	短 軸	深 さ			
SE1		楕 円	145	110	52			
" 2	"	"	150	110	65	土師質土器	鎌倉時代	

表17 鎌倉時代土墳墓一覽表

遺番	構号	平面形	規 模 (cm)			遺 物	時 期	備 考
			長 軸	短 軸	深 さ			
SF18		不整長楕円	195	108	25	土器 5	鎌倉時代	
" 19	"	"	156	82	22	土器 4	"	
" 20	"	"	145	91	22		"	

二つの浅井戸のつくられた時期は鎌倉時代と考える。

土墳墓は3基で、いずれも南方向につくられ、それぞれが重複している。土墳内には黒色有機土が詰っており、SF18の北壁沿から行基焼碗1と小皿4が出土した。SF19はSF18とSF20に切断され、中央部を残すのみである。副葬品は南壁沿から行基焼碗1と小皿3である。SF20は南端もSF19と重っている。副葬品はない。出土した行基焼碗は鎌倉時代とみられる。

(5) 峯山古墳群

古墳3基はいずれも峯山稜線の小隆起している高まりを削り、あるいは若干の盛土をして墳丘を整えている。しかし、長い年月にわたる流土のため盛土部分のごくわずかとなり、また、地滑りや開墾による変形のため墳丘の形態は大きく損われている。外部施設はない。いずれも地山を掘りさげて墓壙をつくり木棺を直葬している。

峯山古墳1号は墳丘の中央部のやゝ北寄りに地山を掘りさげて木棺を直葬している。副葬品はない。峯山古墳2号は峯山中央部の標高80mほどで墳丘頂部よりやゝ南寄りに南北方向に地山を掘りさげて墓壙をつくり木棺を直葬している。副葬品はない。しかし埋葬壙から西側へ1mほど離れた地山面からの須恵器片が築造時のものとする本墳が営まれた時期は古墳時代後期中葉とすることができる。

峯山古墳3号は2号の南側の尾根が南側へやゝ下る鞍部近くに営まれている。本墳もやはり地山を掘りさげて土壙をつくり埋葬壙としていることは他の2つの古墳と同様であるが、しかし、本墳は土壙を掘り、床面に角礫を並べて木棺を安置している。木棺の北小口部跡が完全に遺存していたことは特徴的である。副葬品は何も検出しなかったが、埋葬壙の北側40cm離れたところに本墳の副室とも言うべき円形土壙が掘られている。このなかから出土した土師器片が築造時のものとする3号の築造された時期はこの地方で須恵器が普及しない古墳時代中期末とすることができる。

(6) 総 括

以上のように峯山遺跡は標高65mから85.5mにおよんでいる丘陵の稜線上に、弥生時代後期

前半と古墳時代前期に営まれた高地性集落跡である。遺構は竪穴住居跡、小形小屋、屋外竈、土壇墓古墳のほか奈良時代の祭祀跡、鎌倉時代の浅岩井戸、土壇墓など152にのぼる。出土品は土器、石器が少量である。弥生時代の住居跡は円形プランであるが、古墳時代前期になると長方形となり、各時代とも5グループに分けられる。そして小形小屋跡と土壇墓のグループは特定の場所にかたまっている。弥生時代後期後半の遺構がなく、弥生時代後期前半と古墳時代前期との二度にわたってこの標高80m前後の高地に集落が営まれているのは国家統一への動乱期にあたる当時の社会情勢を示していると考えられる。

(岩井 克允)

第14章 山郷横穴群

I. 山郷横穴1号

(1) 位置 (実測図第46図1, 図版84・A)

峯山遺跡の最頂部から西側斜面を13m下がった標高72mの急斜面に西に向って築造されている。

(2) 構造 (実測図第88図1, 図版84・B, 85)

前庭部は急斜面で、羨道部から前庭部にかけてはV字形に削られている。羨道部は崩落により一部分を遺すのみで原形をとらえていない。閉塞石も遺存していなかった。

横穴の平面形は不整楕円形を呈し、両側壁から羨道部に沿ってゆるやかな袖部を造っている。玄室の規模は奥行420cm, 幅304cm, 高さ194cmである。断面形はアーチ状を呈し、天井及び側壁の遺存状態は良好である。玄室床面の中央奥壁寄りには後世の盗掘穴がみられる。玄室中央には拳大の川原石が数個置かれていたが棺台に使用したものであろう。

(3) まとめ

過去において盗掘をうけて床面の一部が掘下げられており、このたびの調査においては遺物は何も出土していない。構造についてみると玄室平面形は楕円形を呈し、ゆるやかな両袖型である。断面形はドーム型である。築造年代については隣接する横穴が6世紀後半とみられるので、本横穴も大差のない時期であろう。

(内藤 次郎)

第15章 谷通横穴群

I. 谷通横穴 1号

(1) 位置と環境 (実測図第46図1, 図版86・A)

峯山の南端に占地する峯山古墳1号から東側の稜線を12mあまり下った標高68mの稜線南側に急傾斜面につくられている。横穴は周辺所在の横穴と同様に3段にわたり営まれているなかでの最上位にあたる。調査は前庭部の一部が用地外にあたるため、発掘調査は玄室と羨道部及び前庭部の一部である。

(2) 構造 (実測図第89図1, 図版86・B, 87)

前庭部は羨道部から階段状につくられ、また自然浸蝕と排水施設により中央部がV字形に削られている。閉塞施設は高さ95cm, 奥行64cm, 幅48cmの規模で、15cmから20cmの川原石を使用して7段に積み上げられている。

玄室は天井部の一部が崩落しているものゝ規模は奥行256cm, 高さ160cm, 幅260cmである。平面形は隅丸方形を呈する両袖型である。断面形はアーチ型を呈する。棺台は玄室左側につくられている。規模は長さ270cm, 幅は玄室入口左袖部では85cmで奥壁に近づくにしたがい幅が狭まり60cmである。高さは底面から15cmである。棺台は玄室築造とともに15cmの段を造りその上面も川原石を敷きつめ、棺台側面には長さ20cmから30cmの川原石を置き形を整えている。

排水溝は玄室の中央から羨道、前庭に向かい直線に掘られている。長さは300cm, 幅20cm, 深さ25cmで、平均傾斜角度6度、断面形はV字形を呈している。

(3) 遺物 (図版88)

遺物は装身具5, 土器7, 鉄製品6である。装身具は玄室入口左側から銀環1, 玄室右袖壁近くから勾玉2, 管玉2が出土している。土器は須恵器で、玄室左袖部から坏身2, 坏蓋1, 横瓶1, 玄室中央部から短頸埴1, 奥壁から提瓶1, 前庭部から坏蓋1が出土した。鉄製品は大刀1, 刀子1, 鉄鏃4が棺台中央側壁から奥壁に散乱して出土した。

(4) まとめ

構造については泥岩に掘られた両袖型の隅丸方形で天井部がアーチ状を呈している。遺物については勾玉, 銀環, 管玉などの装身具, 須恵器などは規模に比べ豊富と言える。埋葬時期については玄室から出土した須恵器が第IV型式に属し、また前庭部から出土している坏蓋が第VI型式に属すると考えられるので6世紀末から7世紀終りまでの間に追葬を重ねていると考えたい。

(内藤 次郎)

第16章 御堂ヶ谷横穴群

1. 位置と環境 (実測図第90図1, 図版89)

御堂ヶ谷横穴群は掛川駅から北東へ3.3kmほど行った尾根の南傾斜面に位置する。地籍は掛川市蘭ヶ谷字御堂ヶ谷309-2である。

周辺の地形をみると、北方から続く稜線がいくつもの開折谷や枝状に発達した稜線をつくり南にのびている。東側は入り込んだ谷となっている。南側は御堂ヶ谷から続く稜線が西に向きを変えている。西側の水田を隔てて峯山が横たわっている。

御堂ヶ谷横穴周辺の遺跡についてみると、北側には谷通り横穴群、臍山遺跡、深谷横穴群、深谷古墳がある、西側には峯山遺跡、谷通り横穴A群、神明横穴群がある。南側には蘭ヶ谷横穴群が点在する。

2. 御堂ヶ谷横穴群A群1号

(1) 位置と環境 (実測図第90図1, 図版89)

峯山遺跡の東側の谷を隔てて御堂ヶ谷の尾根の南端の孤状に張した南傾斜面の中腹に位置する。標高49mである。即の開墾と昭和初期の調査によって玄室奥壁が遠望できる。北側には御堂ヶ谷横穴群B群、谷を隔て、谷通横穴群B群、C群、深谷横穴群、山郷山横穴群、神明横穴群が所在する。

(2) 構造 (実測図第92図3, 図版90)

羨道部から玄室にかけては天井部が消滅し奥壁が遠望できる。前庭部は畑地流出防止施設のため調査できなかった。羨道は長さ200cm、幅は中ほどで60cmの規模である。羨道部の玄門部分は20cm高く、幅100cmで、羨道に接続する部分は左右とも袖状となっている。玄室は長軸を東西におき、北東隅が入り込んだ隅丸長方形を呈し、両袖がゆるやかな弧を描いて羨道に続いている。玄室の規模は奥行210cm、幅195cmで、高さは天井部が消滅しており詳でない。断面形は奥壁残存部からドーム型である。玄室内には木棺礫郭土墳墓がつくられている。木棺礫郭土墳墓は人頭大の川原石を積みあげ、更にその外側に拳大の川原石を積みあげると同時に大形の川原石の隙間に詰めて土壌を築造している。土壌の規模は長軸190cm、短軸130cm、深さ30cmである。土壌床面の東側半分は深さ10cmほど低くなっているが掘過ぎである。木棺礫郭土墳墓の基壇内と礫郭全面に赤色顔料が塗られている。また墓壇南壁と玄門内側の間には長軸95cm、短軸50cmの土坑がつくられている。横穴築造当初は排水施設として、追葬時には土壌とし

て使用されたであろう。

(3) 遺物

横穴からの遺物は人骨、装身具、須恵器、瓷器、行基焼、鉄製品である。人骨は羨道入口から150cmほど内側に入った左側に雑然と片付けられた状態で出土している。昭和初年の調査時に原位置から移動したものとみられる。装身具は金環1個が玄室中央から出土している。須恵器は坏身・蓋と大型甕片の3個で羨道中ほどから玄門にかけて出土している。瓷器は1個で壺である。行基焼は2個で小皿である。鉄製品は釘5本で木棺に使用されたものである。

(4) まとめ

横穴の占地については尾根南端傾斜面の孤状に張した中位に築造されている。構造については玄室の平面形が主軸に対して左右に長い長方形を呈し、左片袖型である。断面形はドーム型である。羨道、玄室とも追葬と攪乱が認められる。遺物については須恵器が第5型式と第6型式にあたり、瓷器は平安期である。行基焼については第Ⅲ型式初頭であろう。築造時期については出土した遺物から6世紀中葉から追葬を重ね鎌倉時代中葉、13世紀中頃まで使われたものと考えられる。

(内藤 次郎)

3. 御堂ヶ谷横穴群A群2号

(1) 位置 (実測図第461, 図版89)

御堂ヶ谷横穴A群1号の羨道から東へ1m離れたところに築造されている。1号穴と同様に開墾のため玄室、羨道部とも消滅している。横穴の東側は入りくんだ谷となり横穴群B群が存在する。

(2) 構造 (実測図第93図1, 図版90・A)

前庭部は1号穴と同様に畑地流出防止の為調査できなかった。羨道部は奥行100cm, 幅76cm, 高さは残存部で50cmを計る。閉塞施設は20cmから25cm大の川原石を2段に積み上げている外は羨道部に崩れ落ちていた。玄室は袖部がなく側壁からゆるやかに羨道部に向かって細くなる杓子状を呈する。玄室左壁は1号穴東側の築造によって破壊されている。玄室の規模は奥行260cm, 幅は中ほどで130cm, 高さ120cmである。棺台部は奥壁沿から玄室西側の玄門部に向かって斜めに変則的につくられている。棺台上には人頭大の川原石を2個づつ、東側と西側に置いて木棺を安置している。

(3) 遺物

横穴からの遺物は釘、須恵器、土師器、鉄鏃である。釘は1本で木棺に使用されたものであ

る。須恵器は高坏脚部である。土師器は埴形土器片と壺の埴形土器片である。鉄鏃は小破片である。

(4) ま と め

構造については玄室が無袖型で玄門部へ狭まる長方形を呈する。断面形がドーム状である。遺物については須恵器が第Ⅴ型式，土師器が第Ⅲ型にあたる。築造時期については出土した遺物から7世紀後半と考える。(岩井 克允)

国道一号掛川バイパス建設に伴なう
埋蔵文化財発掘調査報告書
実測図

発行日 昭和 52 年 3 月 31 日
発行者 掛川市教育委員会
印刷所 株式会社 開明堂

